
陽月の軌跡 ～ 始まりの場所～

星河 翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

陽月の軌跡 ～始まりの場所～

【Nコード】

N0258G

【作者名】

星河 翼

【あらすじ】

同じ姓名、同じ誕生日の少年ベンジャミン・フリント。しかし、その二人は全く違う境遇の下生を受け生まれた。復讐と、自らの罪を負う二人。その二人が偶然出逢ったのは、騎士養成所。そして、卒業後、大陸を二分する敵を倒すために立ち上がる。そんなファンタジー小説です。

#1 プロローグ

我、汝の心に背く者なり

我、自らを罰する者なり

我、無欲なるに心を閉ざす者なり

汝、我を救いたもうか？

『我、それを心から望む者なり』

心の中に住まう贖罪^{しゅくざい}。それで全てが洗い流される暁には、自らの心を解き放つ事を旨とする^{むね}。

否^{いな}、そうする事で、人との距離を測る事が出来る。そう信じていたい。ずっと心の何処かで隠していた想い。それは、今までの自分が持っていた、たった一つの儚い願いだった。

真っ黒な空にひっそりと蒼い月だけが冴え冴えとこのアイーラの空にぽっかりと浮かんでいる。何て冷たい月であろうか？それがまるで、自らの心にその代償を払えと云わんばかりに感じられた。

アイーラ。ここは、太古、アイルランドと呼ばれた土地である。

これまでの年月を経た温暖化、地殻変動^{プレート}と、海流異常により、アイルランドはユーラシア大陸と併合してしまった。否、併合と云うのは、語弊かも知れない。一繋ぎの大陸となったというべきであろう。

そして、永い氷河期が訪れ、一度栄えた文明は廃れてしまった。人間は、次々と息絶え、そして残ったのは僅か数千人ほど。そして、太古絶滅したはずの、翼竜などの恐竜さえもが生息するようになった。

それはまるで、太古のような時代である。否、世界は混沌となっ

たのかも知れない。

既に、北も南も変化を遂げた。地軸がかなりずれてしまったという訳だ。今では、赤道となる部分が北と南を作っている。そしてアフリカ大陸、北アメリカ、南アフリカ。その他の島々。それらも全て海の藻屑^{もくず}。古き海底都市となってしまった。

また、ユーラシア大陸も、その何千年と云う時を経て、半分近く海に沈んでしまっている。

アジアと云うものは存在しては居ない。今の地球は、そのアイーラという一つの大陸として簡略ながらも地図は書き換えられた。もうその土地しか存在してはいなかった。

これらの歴史を書き記した過去と今を繋ぐ古い文献達。それを保存する事すら殆ど儘ならなかった。それほど急激な変化がこの地上にあった。

よって、アイーラの今で云う地図での西方に重要書庫館として、一部、何とか掻き集められるだけ掻き集められた書籍類が保管されている。及び、口伝^{サガ}として書き記された書物として保管出来ている物もあるらしい。といった時代とも云えよう。

そんな今のアイーラも、その氷河期から解放され随分環境が善くなり、人が何とか生活する事が出来るようになってきた。広葉樹も生え、草花も奇跡的に、夏の季節にだけはひっそりと顔を現す。そして、土地に依ればもっと気候の良い地方もあった。

そんな時代背景は、古代を想わせるような時代の幕開けを迎えようとしている土地と成り得た。

それでも過酷な時代には変わりはない。それは、アイーラを二分する、民族意識がそれであった。相反する民族。

グリーズコートという獣神^{スカアハ}を讃える民族である国と、ラスキンハートと呼ばれる気神^{ルグ}を重視する国に大きく分かれているからであった。

グリーズコートは主に動物や人間を主体とする民族であり、特に争いに長^たけている。中には呪術・魔法にも手を出していた。

そして各地を荒らしまわっているような気性の荒い人間が居住しており、云うなれば、此処は混沌とした欲望に忠実な者達が集うアイラの中央となる国である。

それとは逆に、基本ラスキンハートは、自然や植物を主体と考える民族が住まう穏やかな地方である。

そう、グリーズコートを取り巻くように在る土地。保守的な国。

だが、^{ルীগ}気神の教えに反する事になろうとも、グリーズコートからの侵略を受けて立つだけの力を持つと、武力を少しずつ蓄えるため、小さいながらも新たに各施設を創設した。^{アカデミー}そして、少なくとも年若き者数十人。そこに入学する者達が集い始めたのである。

^{アカデミー}施設は、希望者を受け入れ少しずつ形となってきた。それは、自らの意志を向上させる物であり、自己防衛と侵略回避が目的である。

それを、善しとするか、義旗とするか、罪とするかは、判断する者の考え方一つであろう。死を目の前にして人は恐怖を覚え、そしてそれを回避しようとする。その手段を得るためなら、これは一つの手ではなからうか。

そう、人は穏やかな面を持ちながら、保身する能力。そして死に対しては敏感なのであるのだから。

特にこの時代は、そう云う時代と云えるのではなからうか。と、自分は考えた。

私の名前は、ベンジャミン・フリント。十五歳。本日付けをもって、数ある施設の内の一つに入学を許可され、そこで生活と勉学に勤しむべき、一人の若き騎士となることを志望した者である。

#2 出逢い

ラスキンハートの東に在る、草木も無い砂漠と化した辺境の地で
ある騎士を育てる施設アカデミーに到着した私は、荷物を、広い敷地内にいく
つか建ち並んでいる古巣の様な木造の二階の簡素な部屋に持ち込
だ。

と云つても、持つて来ているのは、入学時に必要な制服と、施設アカデミー
での休息に必要な服。剣ツルギが一本。

そして、教科書と云えるのであろうか、ただの紙で束ねられた書
籍類。それも施設アカデミーで必要とされるものだけ。後は、特に何も無い。

私は、そんな身軽な身なりで此処アカデミーの施設。通称、騎士養成所ナイトトレーニングに居
る。

ここは一応、合宿所というべきところであろう。生徒数十人が収
容できる、それなりに作られた寮のようなところであつた。

そして私にとって問題とされるのは、寮は二人一組の相部屋とな
ると云う事だつた。

私は、人とのコミュニケーションと云うものがとても苦手であり、
出来れば避けて通りたいという程に駄目なところがある。それは自
分の生い立ちに係るのだが、それを誰かに話すほど莫迦では無
い。否、話せないのだ。話したら最期、自分の愚かさ、醜さを知ら
れる事になる。だから、人とのコミュニケーションはなるべく避け
たい。

それでも、此処に來た経緯は、施設側も了承済みではある。その
過去を受け入れてくれたという訳だ。だから、今の自分は此処に居
ても良いのだと想いたかつた。そう、此処は、自分の居場所だ。そ
う心に念じた。

そして、私は部屋に設えている数十本の蠟燭に火を灯すと、歪いひつな
木であしらわれた机の前に座り、一度入学手続きの書類に目を通し
直すと、寝る準備をするため着替えをすることにした。

それは、もう、夜中と云っても良い時間帯。

それなのに、まだ、もう一人の此処に居座るだろう者が現れていなかった。遅刻にも限度があるだろう？と私は想ったが、それを批判するつもりは毛頭ない。それは、自分が云える立場では無いからである。そう、私はきつと、自らの罪に縛られているのだ。誰をも非難する権利など私には無いのだから。

「おゝ寒い！」

その頃の、相部屋となる住人は、寮に着いたばかりで、自らの部屋の前で、小柄な体を震わせながら手に息を吹きかけていた。

「此処だな？オレの部屋は」

そんなことを呟きながら、後ろ髪を短く刈り上げたフサフサとした金髪頭を直しながら今、建て付けが悪そうな木であしらわれた扉を開こうとしていた。

「よし！」

そう云い残すと、思いきり良く扉を開けた。

しかしその狭い部屋の先には、仄かなる光に照らし出された、真っ赤な腰まである長い髪をした、まるで女性のような容貌をした者が、後ろ向きで着替えをしているのをそのまま直視してしまったのである。

「わゝゝゝ済みません。間違えました！」

と、その少年は慌ててドアを閉めた。鈍い木の擦れる音が耳に残る。

あれ？でも変だな。此処に女性が居る訳は無いし。ちゃんと男子寮の筈。

少年は、この寮の入り口付近で、寮案内をちゃんと見たのである。確かに男子寮であった。

「と云う事は？」

そう、今着替えていたのは、相部屋の住人と云う事だ。

「何だ。間違つて無いわけだ」

と、また扉を開こうとした先に、

「どうぞ」

勝手に扉は開かれた。

無表情のその者は、特に怒っている様子が無い。少年は少しホツとした。

それにしても身長がかなり有るなと気付いた。それは自分を見下ろすように視線を下げたからだろう。そして左眼がアッシュグレイ、右眼がルビーと色が異なる瞳。これは、オッドアイと云うのであるうか。そして燃えるような真っ赤な髪が凄く印象的である。まるで、炎を連想させるかのようだ。とにかく自分の村には居ない種族に感じられた。

「あ、悪い！」

オレはそう云い添えて、扉の中に入る。

それにしても、何とも狭い部屋だ。埃っぽいし、掃除をしているのだろうかとさえ想われる。

あとは簡素に作られた歪ゆがんだ木の机二つと、簡易な二段ベッド。

それも、今にも崩れそうな感じを受けた。これから暫く此処での生活を送る事になるのかと想うと、少し何とかなんのかと想う。

そして、少年はまだ相棒になる目の前の人間に自己紹介をしていない事に気がつき、

「おっと、初めましてだ！オレ。北のタナーシャって小さな村から来た、ベンジジャミン

・フリントって云うんだ。宜しくな。お前の名前は？」

オレは、目の前に居る物静かなその少年と云うか青年と云うべきだかに問いかけた。

するとそいつは、一瞬ギョツとした様に瞳を見開いた。只それだけなのに、かなり印象が強く感じるのは、オッドアイの性だろうか。そいつは、そのあと、

「明日判る」

トーンの低い声で一言だけ残すと、スルリと簡易ベッドの下端に

身を沈めた。

「え？おい。寝るのかよ！」

その応えは返ってこなかった。

オレは、早々に就寝しようとするこの者を扱い辛いと思い、溜息が出た。こんな奴ばかりだと、この騎士養成所ナイトトレーニングでの生活は息が詰りそうだとも想える。なにやら前途多難だ。

そう考えてオレは大きな荷物を広げると、小箱のようなこの部屋に収納し、そしてそれが終わると就寝に入った。

それは、明日の入学式をも控えるというそんな一夜の事であった。

#3 入学式

「おかあさ〜ん！」

それは、炎渦巻く火の粉が飛び散る家の中での出来事。五歳の私は、その中で涙を流しながら叫んでいた。何故こんな事になったのであろうか？それは語ることが出来ないことである。

「お前は逃げなさい。あたしは、もう、動けないから」

そう、母は、箆^{たんす}の下敷きとなり、動ける状態ではなかった。こうなったのも、私を、倒れてくる箆^{たんす}から救おうとして逆に下敷きになった為であった。

「そんなこと出来ないよ。今これ退けるから。ちょっと我慢して！」

私は、小さい身体で、その大きな箆^{たんす}に挑んだ。しかし、箆^{たんす}はびくともしない。次第に、苦い煙が充満し、私は、ゲホゲホと咳き込み始めた。苦しい。目が霞む。

「もう良いから、お逃げなさい。ベンジャミン……」

母は、朦朧としているのか、視線がうつろで、もう私の姿をその瞳に映しているようには感じられなかった。

「嫌だ。お母さん！しっかりして！」

私は叫ぶしか出来ない、無力な子供だった。そんな時、外からの助けが現れた。

「まだ生きているぞ。早く助ける！」

それは、近所のマキムさんの声であった。

「ベンジャミンか。良かった。お前無事だったのか。レイラは？」

そう、レイラとは母の名前である。

「お母さんが、箆^{たんす}の下敷きに。ゲホゲホ」

そう云って、私は母を助けてと縋った。しかし、天井の柱が火の勢いで崩れ落ち始め、母を助けるどころではなくなったのである。否、もう助けられない状態だった。

「もう無理だ。ベンジャミンだけでも助けて出るぞ」

マキムさんは、その奥に居る者に言付け、私を抱きかかえると、直ぐ様外へと駆け出した。

私の記憶はそこで途切れている。母は、こうして、天に召されてしまった。

気神^{リゲ}の計らいか。それとも、黄泉^{マゲ}の（メ）国^{ルド}へ先に遣わされたのか。そんなことは判らない。

だけど、もうこの現世には存在していない事だけは事実だ。

気がついた時、サンフラワーだった私の髪の色はあの炎のように真っ赤に染まり、アッシュグレイであつたはずの瞳の片方が、ルビィ色に変わっていた。まるで、この火災事件が、私の罪であるかのごとく。

そこで、私は目を醒ました。

気付けば、低い天井。騎士養成所^{ナイトトレイニング}の寮の二段ベッドの下で寝ているわけだ。

なんと昔の事が夢として出てきたものだ。片時も忘れる事が出来ない事なのに、それでも夢として出てきたのは、きっと、この二段ベッドの上で寝ているだろう者の名前を昨夜聴いたからであろう。

同じ名を持つ者。それなのに、自分とは全く違う性格。そして目指すものが同じ。

それが多分今の自分に大きな衝撃を与えたのではなからうか。

もしかしたら、大きく自分を変えられるかも知れない。と云う一縷の望みがその先に見い出せるかも。と、心の何処かで感じたのかも。しれない。

まだ、朝日がこの地上に昇り切らないそんな時間帯。私は騎士養成^{ナイトトレイニング}所の白くて動きやすい制服を身に纏い、先に講堂へと足を運んだ。

「もう、朝かよーおい！お前、起きてるか？」

もう一人のベンジャミン・フリントは朝日の光に反応して起きたは良いが、物音一つしないこの部屋に疑問を持ち、下段のベッドを

見下ろした。が、そこに人影は無かった。

「あんにやる、勝手に行動しやがった！」

と云うのも、騎士養成所ナイトトレーニングでのルールとしては、二人一組での行動を義務化されているわけだ。

それなのに、居ないと云うのはどうだろう？規則違反として罰せられるぞ！何て胡坐をかいてブツブツ云ってみる。

しかし、部屋の外の廊下から、人の出入りの物音が激しくなり、遅刻すると感じたオレは、ベッドから飛び降りて仕度をし、朝飯を食べるべに一階の乱雑な大衆食堂へと駆け込んだわけだ。

後で叱られても、オレは悪くないからな！の言葉を胸に抱いて。

入学式は、食後直に行われる形となった。クラスは一クラスのみの新人生で構成され

ている。クラスは三十人余り。男子も女子も関係なく、一クラスに纏められていた。

この講堂は、常に磨かれているのであるのか？気神ルীগの神体を前方に設え、常にその教えを忘れんがための気配りをされている。まあ、判らんでもないが、気神ルীগはそれを望んでいるのか？とオレは問いたくなる。

気神ルীগは太古のイルランドの魔神で、口伝サガでは闘神でもあり英雄とも謳われる神だ。それでも、口伝でそう云われているだけであつて、実際の事など太古の事で、オレにとつてはそこまで重要では無いのだが。それは、今祀っている気神の穏やかな神と云う特長と全く違うからでも有る。

それでも、この民族はそれを讃えるのが必然。だから、オレ一人の意見が通るわけが無い。判っているから、心に秘めておく。

そんな中、直後ろに、朝居なかつたあの赤頭がこの講堂に足を運び坐った。

「おい、お前！何処に行つてたんだよ！勝手に動かれるとオレが困るつてんだ！」

オレはなるべく声を抑えてそう云った。

「用事があった。只それだけだ」

何とやりづらい奴だろう。オレはムツとしたが、その直後、式が始まった。

式は肩が凝るほど格式だけを重んじていた。オレは途中眠くなり、思わずウトウトして

しまった。そして、ガクンと頭を垂れた時に、今回の最高成績で入学したと云われる、代表挨拶が始まった。

皆が一斉にそちらに眼を向ける時である。そんな中オレは、まだ眠りの狭間に居たが、

或る単語に反応し、席を思わず立ってしまったのである。

「ナイトトレイニング新騎士養成所生代表、ベンジャミン・フrint」

自分の名前を呼ばれたからであつた。

周りはざわめく。それもそうだろう、静かなこの講堂に、二人も立ち上がったのだから。

「な……」

オレは周りを見渡した。皆がこちらを見ている。いや、こちらと云うのは、オレの背後の赤頭だつた。そいつは講談へと足を運び始めた。

オレは一瞬呆然としたが、横の黒髪の男が、

「おい、坐れつて！」

と云つたので、ハツと我に返り慌てて席に腰を下ろした。

所々でクスクス笑い声が聴こえてきた。そりやそうだろう。代表であるならば、先に言葉添えがナイトトレイニング騎士養成所からある筈なのだから。

それなのに、立ち上がったと云う事は、寝ていて同じ名前に反応したと取られても仕方ない。大失態だ。

オレは、耳まで熱くなり恥ずかしくて俯いていた。が、さつき坐れと云つた少年が、

「ま、同じ名前なんて、そう無いからさ。気にするなよな？」

何て云っている。そいつの云う通りかも。と想えれば良いが、オレは昨夜あの『明日判る』と云った言葉が頭を駆けずり回って、イライラしてきた。初めから恥を掻かすつもりだったのかと。

でも、あいつは皮肉っぽくそう云った訳では無かった。表情が無いからそう読み取れないだけかも知れないが、悪気が有ったとはどうしても考えられない。そこまで考えて、もう一人のベンジャミン・フrintという人物が気になり始めた。この事件が多分オレ達の初めの接触コンタクトとなったのである。

#4 接触

「……」

入学式が終わった後、部屋に戻ったオレは、机に坐って教科書を持っただけで黙り込んでいた。否、隣にいるそいつと初めは話そうと想ったんだけど、そう云う雰囲気にならないから不思議だ。興味ある者には、直に声を掛けられる人見知りしない性格なのに。

それはきつと、こいつの放っている気と云うものかも知れない。ずっと黙って、教科書に目を通してしている姿だからとかでは無い。持ちえる物が俺とはかなり掛け離れている。それは大人びて見えるかなのか？それともオレが子供っぽいからなのか？それは多分後者だろう。と想って一瞬溜息をついてしまった。

「何だ？」

先に問いかけてきたのは、考えられないのだが、今頭の中に居るそいつだった。

「え、と？」

オレは、言葉を詰らせ、慌ててしまい思わず本を落つこととしてしまった。

「さっきからこちらを気にしているようだが……」

それは、そうなんだけど。何故気がついたんだろう。オレは頭の中に？マークが飛んでいた。

「話が無いのなら、このまま本を読ませていただけるかな」

そいつは、そう云って、一度たりともこちらを見ずに言葉を切った。

否、待て！探せ自分！

「あ、お前さ……オレと同じ名前なんだな？オレ思わず、自分かと想って立ち上がったやつたぜ！」

おい、何自分の恥を曝さらしているんだ。莫迦か？とも想ったが、
「その事か。驚いたのは、こちらもだ。で？」

やはり莫迦にしている様子ではなかった。それはまあ置いてくとして……そう。その後だけど、何か無いか！こう云う時は、自己紹介だよな。ムムム。

オレは、まるで人と初めて話をする子供のように覚悟を決めた。

「お前の事、何て呼べばいいのかな？とか想つて。それと、何処から来たんだ？年は？」

そう。どう呼べばいいのだろうか？お前って何だかすっげー失礼な気がするんだよな。

「別に。お前。で良いが」

相変わらず、視線は本へと向けられている。きちんと聴いているのかいないのか疑問だ。それに、お前で良いとは本当にそれで良いのか？嫌だろうに。

「否、待て。何か考えよう！って、直考えられる訳じゃ無いから、暫くお前の事は苗字の方で呼ぶな？え」と、フrintさん……」

「フrintで結構」

あちゃ。何てドライな奴だろう……それで良いのか！オレは何か無いかと考えてみたが、全く想い浮かばない。仕方なく、こいつの云う通り、フrintと呼ばせてもらう事にした。

「じゃあ、フrint……」

オレは言葉を編もうと、続けようとしたら、

「場所は、南の町ルカンドから来た。年は十五歳」

先に問いかけた事を、スラッと言ってしまった。ちゃんと聴いてはいるんだな。でも、愛想が無い。これが地なのであるうか。

しかし、此処でくじける事はできない。何せ、これから暫くはフrintと同室なのだから。相方とも云えるだろう存在だ。

「へえ。南の町か。良いな。暖かくてさ。オレの所なんて、年中雪が降ってるぜ。って、十五歳……オレと同じ年かよ！」

どう見ても、オレより年上に見える。落ち着いてるからなのか。それとも、身長が高いからなのか。そこでオレは少し大人にならないとな。と想ってみるが、そんなこと直には出来ない。

「同じ年？」

意外にそこに飛びついて来てくれた。フrintはやつとこちらをチラリと見た。

「そうそう、同じ年だよ。って、そう見えないか……」

オレは、思わずハハハと空笑いしてしまった。フrintは、ちょっと、考えるような仕草をしたが、直に元の通り教科書に目を通し始めた。

「なあ、フrint。騎士になると決めてるから此処に来てるんだと想うけど、やっぱそうなのか？」

オレは、話を変えてみた。実はオレには目的があつて、この騎士^{ナイト}養成所に来ていたりする。

勿論、名目上という訳ではなく、本物の実践で役立つ騎士となる為に。

「……騎士に成る為なのか。自分でもハッキリ分らない。そのつもりで来てはいる。キミには有るんだな。目的が……」

その応えに、オレは啞然とした。騎士に成るつもりが有るのか無いのか。それも分からないのに、主席入学？それって反則……

「あ、でも、騎士講師つてのも有るしな？」

オレは、ちよつと話をはぐらかせる。そうしないと、この場が保たない。フrintが、本に向けていた視線をデコボコした机の上に落としたからだった。

考えてみれば、フrintの事を理解しているわけでは無い。これが初めての会話の様な物であるし……と想つて、騎士講師などと云うものをでっち上げた。無いことは多分……無いだろう。こう云う騎士養成所^{ナイトトレーニング}が在るのだから。

「騎士講師？」

「あ、いや、そう云うのも有りかなと」

こいつがどのくらいの能力を秘めているのかは判らない。でも、主席入学しているくらいだから、上級者である事は間違いない。でも、それを、実践で生かせるかはオレには計れないからそう云う道

は有ると想う。不愉快だつただらうか。

「まま、ゆつくりこの、騎士養成所ナイトトレーニングで考えればいいじゃん。時間はまだあるしさ」

オレは、言葉を紡ぐのに一苦労しそうだった。黙り込んでいるフリントが、そうさせる。

そのタイミングで、夕食を告げるベルがカランカランと鳴った。オレはこれ幸いと、

「夕飯だぜ。早く食べに行こう」

そう、話を摩り替えた。そしてオレ達は、今していることを全て置き、直ぐ様食堂へと向つたのである。

食堂と云うその場所は、飲み屋か何かのように、丸い木のテーブルを十個くらい配列させて、まるで、酒場の様なカウンターを通して、支給されるお盆に食器が陳列。その中に大衆向けのその食事を摂る体制になっている。

場所によっては、薄暗いし埃っぽいので、皆その場所取りに追われる。それが今朝の食事で判っているから、オレは急いで中央の場所を取りに行った。

テーブルには、四人坐れるだけの椅子がある。オレ達と相席になったのは、あの時オレに坐れと云った、黒髪のあいつだった。勿論その相方も居るのが。

フリントが、オレの分の食事を取ってきてくれて、食事が始まった。

「面白いコンビだな。お前達」

食事を摂りながら、そう云ったのは、黒髪の少年だった。

「あ、僕、九竜チェロンって云うんだ。東の村から来た。で、こいつが、ミハエル。西から来たんだって」

もう一人の金髪頭は宜しくと軽く頭を下げた。

「九竜？また、変わったなまえ名前だな」

オレは初めて聴いた発音名だったので思わず問いかけた。

「太古で云う所の、中国。その末裔なんだ。この黒髪も、アジア
辺りから引き継がれてるらしい」

フrint同様、世界は広い物だとオレは此処に来て初めて知った
ような気がした。

「あ、オレはベンジャミン・フrint。で、こいつ……」

云おうとした所で、

「ベンジャミン・フrintさんだろ。今日の一件でキミ達かなり有
名だよ？」

九竜はクククと笑った。

そうでした。オレは苦笑いするしかなかった。

「でも、どうやって名前呼べば良いのか判らなくてね。オレは、こ
いつの事フrintって呼んでるのさ」

オレは、さらに苦笑いをして事のいきさつを話した。フrintを
チラ見する。至って平然としていた。だから話しても大丈夫だろう
と想ったのである。

「名前の呼び方ね。そう云えば、紛らわしいよな」

九竜は、漆黒の瞳を隠すかのように数回瞬きをした。

「だろ？苗字まで一緒だと、余計に紛らわしいしさ」

黙々と食事をしている後の二人を他所にオレ達二人はベラベラと
話していた。あ、でも食えることは勿論忘れてはいない。

「うーん。こうして見ると、お前とフrintさんってかなり相反す
る所あるよな？」

そうなんです。それが苦勞の種。何て想ってはみるものの、口に
は出さない。

「どう見える？オレとフrintって？」

客観的な意見が欲しい所。オレは頼杖を付いてこっそり問いかけ
た。

「まだフrintさんの性格が判らないから、何とも云えないけど、
光と影って感じ」

って、どっちがどっちだよ。オレが影かい。

「光が、キミで、影がフリントさんって感じかな。何だろう？僕にはそう感じられてならないけど」

え？オレが光。で、フリントが影？ってどうしてそう想う？主席入学の光り輝く優等生が影……

「オレが光？」

「そう見えるけど？お前って、他人に何か隠すような性格してないだろう？っていうか、かなり開けっぴるげ？他人に干渉したりしそう」

その言葉はまあ、当たってはいるけれど、云い方がなあゝハハハとオレは笑っておいた。

「でも、フリントさんって、何か隠し事をしてるよな。それも何か心の深い所で重いものを背負ってる感じがするんだ。これ、僕の村の太古から引き継がれてる心理学的見解なんだけどね」

身体を巡っている。血がそうさせているって意味なのかとオレは理解してみた。生まれが違くと、その持つてる能力も変わると。そう云いたいのだろうか？

「ふゝん。あいつがね」

オレは、ちよつとふてくされてしまった。何かを隠しているとしたら、それはそれで個人の自由だけど、相談とか出来ない物かね？とそう想う。多分オレの性分なんだろう。

気にするって事は。おせっかい焼きの血が騒ぐ。

いつか話させてやる。何て心の何処かで沸々と血が滾たぎってる気がする。

「渾名。あだな 考えておいてやるよ。というかそう云うの得意だから僕。

じゃ、飯食べ終わったから僕達そろそろお暇するね」

もう既に食べ終わっている相方を見て、九竜はそう云った。

オレは、まだ食べ終わってないため、

「宜しくな！」

何て気軽にそう云っておいた。九竜達はその場を後にし、オレとフリントはその場に残った。

「悪い。早く食べるから！」

オレは、フrintにそう云うと、残りをかけこもうとした。が、
「ゆっくりで良い。食事は味わって食べる物だ」

フrintらしい言葉にオレは咳き込んでしまった。こんな調子で
一日目は過ぎ去って行った。

#5 渾名

次の朝から授業は始まる。

基本的に、教科書を用いた歴史や、騎士としての有り方等を説いた屋内での勉強と、実践における課外授業。そして、型を教える授業。その三科目がそれである。

オレは、この屋内授業が一番の苦手だったりするのだけど、これも勉強なのだと自分に云い聞かせてなるべく眠らないように。何て想いながら授業を受けようと挑んだ。

席に着いたオレ達がしたことは、まず、出席の確認だった。

席は、自由にと云うわけでは無く、誕生日順とされていた。なので、右前から年上順とされた。

ここで、一つ判ったこと。オレとフリントが同じ年であり、誕生日までもが同じであると云うことだった。

この時代、月を表す言い方は変わっていて、一月が、ムーンライト。二月が、カーキ。三月が、モープ。四月が、マダー。五月が、パンジー。六月が、ピスタチオ。七月が、サファイア。八月が、ローズ。九月が、ヘンナ。十月が、カナリー。十一月が、アプリコット。十二月が、レイズン。と表記されている。

後の日付けは太古と同じ。但し、月は三十日と固定されていたりする。

そして、入学したこの月は、ピスタチオであったりする。

そんな中、オレとフリントの誕生日は、カナリーの十八日。で、席がどうなっているのかと云うと、オレの席の方が前。

多分、此処に入学する際行った身体測定で、オレの背が低かったためだろう。それを考えると、凄く虚しい。と云うのも、席が教壇の一番前だったりするからだった。何てことだ。これでは居眠りすると直にバレてしまうではないか。

オレはグツタリすると、後ろを振り返り、

「フリント。席変わらないか？」

なんて云ってみる。がしかし、

「既に決められている。私は変わるつもりは無い」

なんて云って退けられてしまった。何だか不機嫌そうだったけど

……ああ、優等生らしい言葉だとオレはガクッと肩を落とし右横を見た。

右横には、九竜が居る。こいつはオレより年上なのか……

「よっ！お互い一番前つてのは辛いな」

なんて云いながら、九竜は教科書を用意し始めていた。

「はははそうだな。にしても恨めしいのはこの背の低さだぜ。何で、同じ誕生日で、ここまで差別されるかね」

「へ？誕生日まで一緒なのか？」

九竜は、大きく目を見開いて、こちらを覗き見た。

「いつ？」

「カナリーの十八日……」

オレは肘をついて、ぶっきらぼうに言った。

「カナリーか……確か旧暦で云う所の十月。中国では、陽月ヤンユエつて云われていたらしい」

九竜は想い出すように、視線を遠くに移すと、何か考えるようにして、そうだと云った。

「渾名想いついたぞ！」

いきなり突拍子もなく手をポンと打つ。

「何だよ、ビックリするな」

オレは考えに耽っているところからいきなり現実に戻ってきた九竜にそう云ってやった。

「お前、陽ヤンで、フリントさんは、月ユエ！」

「はあ？」

ヤンにユエ？何だそれ……意味判んないし。

「ヤンつてのは太陽の陽つて字からも入るんだけど、お前に、光み

たいつて云つただろ？だから、ヤン。ユエつてのは、月。太陽の陰に隠れてその光を受け取る。まそんなところかな？」

と、凄じ雑学というか何と云うか。何処からそんな発想が出て来るんだか？そう想いながら、ヤンね……悪くは無いと想う。

「じゃあ、フリントの事をユエつて呼ぶようにするって云つてみようか？」

とオレは、後ろを振り向くと、

「フリント。お前の事ユエつて呼ぶからな？オレの事、ヤンと呼んでくれ」

フリントは、一瞬何を云っている？と云う表情をしたが、

「それで良ければ、私は別に問題無い」

と、無表情で云つてのけた。本当に愛想が無い。オレは、引きつりそうになる顔をなるべくそう見せないように笑った。

その後時間を惜しむように、無機質で退屈な授業が始まるうとしていた。

「騎士の称号を得るには、古代で云う所では……こらっ！ベンジヤミン・フリント！」

黒板に書き連ねている文字を中断して、先生が、私の名を呼んだ。「はい」

私は何か怒られる事でもしてしまったのだろうか？と一瞬本から目を離し、前を向くが、どうやら目の前で寝息を立てているヤンだったらしい。

「あ、すまん……キミでは無いのだよ。この背の小さい方のベンジヤミン・フリントで……」

こうしてみると、確かに紛らわしいのかも知れない。私はそこまですべて考えていなかったが、実際名前が一緒だと不便だ。

「起きんか！莫迦者！」

先生は、名前を呼ばないように心掛けてるようであった。名前

……

私は珍しく、自らこう発言した。

「先生。彼の事を、こう呼んでいただけですか？ヤンと。私の事は、ユエで結構です」

自分の意志をこういう形で主張したことは無かった。が、背の低い高い。で判別されるのは確かに良い気分では無いであろう。

昨日の自分では此処まで考えなかった。でも、今日、このヤンと誕生日まで一緒だと知ったことで自分と云う者が何者なのか？何故此処まで育った環境が違って、考え方が違って、そして何より入ったところが同じなのか。

これを運命とするなら、本当に何かを変えることが出来、そして、自らも変わらなければ成らないと考えが及ぶ。

だからこれは、私の意志。

「ベンジャミン・フリントという名前で困られるのでありましたら、そうして頂けますか？先生」

そう。これを堺に、変わらなければならない。贖罪はもしかすると、此処での生活で洗い流されるのでは無いだろうか？そう。ヤンが私を変えさせてくれるのでは無いだろうか。

私は、自分の意志を表すことで少し報われた気分になる。これが初めの一步となる。だから……

「キミがそう云うのならそれで良いが」

と先生は少し困惑していたが、

「えーと、ヤン！起きんか莫迦者！」

そう云って、目の前の者のこめかみをグリグリと拳で締め付けていた。

「イタタ！何でい……あ、すみません先生、寝てましたー！余りにも退屈で……ハハハ」

慌てて立ち上がったヤンに、

「そう云えば、お前の得意とするのは実践だったな。でも授業中に居眠りは良くない」

先生は、ヤンの顔を斜めに見て、そう云つと、

「先生、話判つてゐるじゃん！」

調子のいいヤンに、喝を入れた。

「廊下に立っている……莫迦者！」

ヤンは渋々廊下へと足を伸ばす。そこで爆笑がこの教室に起こつた。

そして、ヤンを後に、授業は引き続き行われたのであった。

#6 目的

二時限目は、型の練習。

屋外に出、敷地に設置されている石畳の場所が練習場と成っている。砂埃の舞う中、数列の隊を組み、私達は師範代と向き合った。

そして柄にラスキンハートの紋章が刻まれている剣を持ち型を、合わせ鏡のように模倣するのがこの授業だ。

基本、型はこのラスキンハートに伝わる物である。その為、公的な場所に用いられるものではあるが、実践的に価値観が有るとは云えない。云うなれば、演舞。剣を用いた型の流れを主としている。

そう、誰もが一度は目にすることがあるはずのもの。村はずれや山奥で無ければ、この演舞を行事で見る機会が多々あるのだから。

そしてこれを押さえておけば、実の所、官吏職というのを得ることはできるであろう。ヤンはこの事を知らなかったのだろうか？

でも私は知ってはいたが、興味は無かった。

しかし、官吏職は手堅いと皆想っている。手を抜く者はいないはず。と私は実際の所想っている。

そして一人、この演舞を上手くこなせない者が居た。それがヤンであった。

実践を得意とすると云っていたのに、演舞は苦手であるらしい。リズムや流れがお粗末。そして荒々しい。まず、剣と向き合おうとしていないように感じられた。目の前に居るヤンのその姿を視界に入れる事になる私は、そう想わずにいらなかった。

そう云えば、ヤンは自らの目的があると云っていた。その目的とは一体なんなのであるのか？このような型では、やはり官吏になるという風では無い。彼の意図するものとは？

剣を突き、私は今のこの演舞の流れの中頭で考える。こつも気になる者に出逢ったのは何かがあるはずだ。それが凶と出るか吉と出るか。それは判らないが。

「オイ。そこ！型がバラバラじゃないか。ちゃんと模倣しろ！」

余りにチグハグな型に師範も呆れてヤンの元まで足を運んだ。

「型なんて、自己流でも良いじゃないですか。それより早く実践に入りましょうよ！」

まるで体面を気にするより、実が欲しいという云い方だった。私は、端から見ていて少し不安を感じる。ヤンは、それでも動じない。強靱と云うか、無鉄砲と云うのか。師範に意見をすると云う事自体、この騎士養成所ナイトトレーニングに有ってはならない事である。

「お前、名は！」

「ベンジャ……いえ、ヤンです」

面倒だと云わんばかりの表情で、師範と向き合っているそれがまた、強気である。

意志がハッキリしていると云うのも規律を乱すと私は想うのだが、そう云う風には考え無いのであろう。それが、少なくともこの騎士養成所ナイトトレーニングでのヤンと云う個性なのだとこの時理解した。

私は、それを受け入れる事ができるであろうか。それを考えると判らない。自分はそこまで意思表示することはできない。特に、規律と云うものは絶対だ。と信じている。

それを破ると云うことは、万死に値する行為。そう、これが私の中の考え方だ。それを直に切り替えることなど出来ない。

「実践は、この後だ。全く生意気な練習生だな。まず、お前がしないといけない事は、演舞。型を覚えることだ！無駄だと想うのは勝手だが、実践にも必要な時がある。この型は公的物と考えるのは愚かだぞ」

師範はそう云うと、また演舞に戻った。

私は、演舞を実践に必要な無いものと考えていたが、そうでは無いと云い切った師範に、考えが甘かったと恥じた。その言葉は、ヤンにも及んだのかも知れない。

その証拠に、その後ヤンは少しずつ型を自分のものにしようと躍起になって行ったのである。それは、彼に向上心を持たせたのかも

しれない。いや、向上心と云うより闘志かも知れない。必死で流れを追っている。そう感じられた。

「あゝかつたるいゝ！」

今までの流儀やら方針みたいな授業が終わり次は実践授業となるそんな休み時間だった。

オレは、立たされたり、なじられたりで、凄く不機嫌だったりする。何でもまた、規律を重んじるかね？ラスキンハートって国は。

それは^{リーグ}気神を重んじるこの体制だと判ってはいるものの、納得がいかない。必要なはもつと他にあると想うが……とは多分このオレの勝手な云い分なのであろう。でも、必要なのは、そんなものではない。騎士に成ろうってことは、闘わなければならぬ事なのだとオレは思っている。守る者があればこそその騎士だ。だから、志願した。そして、志を共にする仲間の為にも此処でオレは……

そこで、九竜が、ポンとオレの肩を叩いた。

「ヤン、お前やり過ぎだぜ？」

言葉がこうだから、怒ってるのかと想いきや、そうでは無いらしい。語尾が震えている。笑っているみたいだ。

「さつき、そこでユエに、少し控えるように伝えてくれと僕に云ってきたよ。あの無表情な顔をして、一応心配してるんだな？」

その後、ケタケタと笑った。

「何が可笑しいんだよ」

オレは、そこまで変か？

「心配されてる事に、だよ。お前無茶し過ぎ！ヤンが何を考えてるのか。それは判らないけど、師範にああ云わしめたらそりゃ誰でも引くって。一瞬僕だって引いたよ」

引く？何故。

「どうして引くんだ？」

判らない。そこで九竜は、見せたことの無い真面目な顔をして、

「そこで疑問？ 仮にも、師範だよ。僕達の将来を決める人間だ。もしかして、ヤン。官吏志望じゃ無いのか？」

官吏。なんじゃそりゃ？ オレの頭の中で疑問符が回ったのは云うまでも無い。

「違うけど……？」

そう、違う。オレは、そんなものの為に此処に来ているのではない。それは確かだ。オレはオレの目的の為に来ている。

「大半は官吏志望だよ。そう云う僕もだけど。食っていくためには、その地位に着くのが一番だ。家族を養っていくためにも。でも、ヤンは違うのか。じゃ、何故此処に？」

九竜は、興味津々と云う感じで近くの枯れ木にもたれ掛かり問いかけた。

「……復讐だよ」

オレはボソリとトーンを落として云った。別に隠すことは無い。

隠す必要など無い。それが、このオレの最終目標だ。

「……もしかして、グリーズコートと、剣を交えるつもりなのか？」

それは、真面目な九竜の声のトーンだった。いつに無く深い声をしている。それこそ、止めると云いたげだった。

「もう、メンバーは決まっている。オレの村は、北のはずれだけど、色々グリーズコートとは争いが有るんだよ」

そう、忘れもしない。あの日の惨劇は。

「タナーシャ討伐事変。あれなのか……」

九竜は詳しく知っているのかいないのか、その言葉を吐き出した。「知っているのか？」

オレは、一言問いかけた。九竜の真っ直ぐな視線を感じ取る。それは哀れみだった。

「有名だよ。一夜にして、村が焼けたというあの事件だろ。グリーズコートがそれを指揮し、そして、焼き払って回った。確か、魔法でそれを行ったと……」

有名……か。今までも、グリーズコートが襲撃した町や村は沢山

ある。しかし、その大半は沈下できてはいない。そう、襲われたら最期。その悲惨さはよく知られている。僅かな草木も炎の肥やしに成る。それほどまでに残った村には生活を出来る環境は無い。

「生き残れたんだ。会えて良かったよ」

九竜はちよつと悲しそうに笑った。

別にオレは悲観などしてはいない。ただ、怒りだけで此処まで生きてきている。いつか必ずグリーズコートを排除して見せるというその気持ちだけで。

「オレは、未だ小さかったからな。両親や、大人達はオレ達を逃がすために立ち向かった。それは、当然の事なのだろうけど、オレは忘れる事はできない。最悪の状況だよ。おかげでオレ達子供は村はずれまで避難が出来た。運が良かったんだ。そして、オレと同じ年頃の奴等も生き残れた。そいつ等と組んで、グリーズコートと闘うつもりだ」

その言葉に威厳が有るか無いか。それは自分でも判らない。九竜がどう受け取るかも。これは個人的且つ勝手なオレ自身の問題なのだから。

「気持ちには判かったよ。でも、これと、師範に対するものは違う。騎士に成るんだろう？目的がどうあれ、それなりの心構えは必要だよな。それに、此処はラスキンハートの騎士養成所だ。先にも云ったけど、コンビとなる者の言葉を聴く事も必要だと僕は思う。聴いてないとは云わないけど、感じ取れ」

九竜は、今度は年上としての威厳を出してきた。

「出来る限りは……」

オレは、取りあえず頷いておいた。

確かに、自分だけの考えを押し付けて此処で過ごす訳には行かない。自分でもそう判っていたはず。

だけど、心の何処かで警鐘を鳴らしていたんだ。これは、復讐の序幕なのだと。だけど、あいつは、ユエは違う。あいつまで巻き込むことなど出来はしないんだ。そう、此処での連帯責任は、自分で

も判っていたはず。だから、改めなければならない。

そう、今の自分をどうにかして制御しなくては……それが此処での掟なのだと、九竜から学んでしまったのだった。

#7 実践

「ヤンに、云っておいて頂けるかな」

そう、私は仲が良いと判断した、九竜という者に躊躇いがちになりながらも、云ってしまった。

初めはどうしようか？考えた。それは、自分が介入して大丈夫なものなのか？それが気掛かりであつたからである。しかし、九竜は一瞬驚いてはいるようでは有つたが、そう云うことか。と何かを納得しつつ、

「オーケー。伝えとくよ。あ、でも次回からは僕を通さずに、自分で云うんだぜ？」

と肯定した。それは、私が忠告することであつたのか？

確かに、私がヤンの相方になる訳であり、こう云う事は当人同士の問題なのかも知れない。持ちつ持たれつ。それが、此処での有り方。だけど、未だその勇氣は私には無い。それを納得したと云うのだろうか。あの九竜は。

それに感謝しつつ、私は次の課外授業、実践場へと足を二人よりも先に向けた。

実践場。そこは、敷地内の中央に位置する場所にある。足元は石畳ではなく、敷地外と同じ砂。それが足に纏わり付く。まるで、動きを封じ込めるかのように。

そんな中、私達クラスメイトは、二人一組となり、動けるだけのスペースを持ち、剣を交える体勢を取らされた。

勿論私の相手はヤンである。

基本的にどうなれば負けか？それは剣で相手を切る寸前迄となるのだが、与えられてる剣は本物で、一つ間違えると、切りかねない。でもそれをキープできる者こそ、本当の剣術者であると師範代は云った。それもそうかも知れない。

ヤンは、今か今かと、この授業を待っていたわけで、顔がイキイキしていた。

「はじめ！」

師範代が、二人が向き合った状態で、剣を重ね合わせた所で、そう云い放つ。そして、両者は初めて、剣を弾いた。

私は、ヤンの動向を見る。この足元に纏わり付く砂を全く気にせず、足を横にスライドさせている。まるで、この場所が、石畳でもあるかのように。それが、印象的だった。

私は、一瞬喉を鳴らせた。負けると想った。何であろう？この威圧感。あのヤンが凄く大きく見える。

私は、実践を苦手としているわけでは無い。だけど、このヤンの前では、負けると想った。

そんなことを考えている一瞬を突き、ヤンが一気に前へと飛び込んできた。私は、その振り下ろされる剣を間一髪弾き返す。受け止めるにはその剣は重すぎた。私の身体では止められない。

そして、何度も打ち込んでくるヤンの剣。それは、弾くだけで精一杯である。何処にこんな力があるのであろうか。私は、後ろへと後退をしながら、とにかく防ごうとした。だけどこのままでは、どうしようもない。私も前に出なくては。

そう想って、左に身体を傾け飛び退く。そして、方向を少し変えた。

それに反応するのが速いヤンは、剣を上から振り下ろすのを瞬時変えて、右から左へと振り払った。何て、瞬発力のある奴だろう。動体視力も並外れている。

私は、追い込まれるだけ追い込まれた。全く攻め込む余地が無いのだから。

そして、今度は右に身体をずらす。しかし、ヤンはそれをも見切る。どうすれば良いのだろうか？考えるだけ考えて、こうなったら、前に出るしかないという考えに及んだ。

ヤンは、剣を振る事に躍起になっている。それを逆手に取るしかない

い。だから……

私は、剣を振り下ろすその瞬間を先取りし、それを掻い潜って、前に出る。すると、至近距離にヤンが見えた。私は持っている剣を胸元に突いた。これで決まった。と想った。

しかし、ヤンはそれを間一髪後ろに飛びのく事で交わしたのである。何？私は前に出たその足を砂に着けると、足を取られ、前屈みになる体勢になった。それをヤンが見逃す訳が無い。

片足を突いた私の右肩に剣を振り下ろし、寸前で止めた。

勝負は決まった。ヤンは、私の肩に手を乗せると、

「大丈夫か？」

いつもの調子で問いかけた。私は、

「ああ……」

と、その手を取り立ち上がる。その時回りで、どよめきが起こっている事に気がついた。

そのどよめきが何で有るのか。その時の私には理解が出来なかったのである。

そして、この授業は終わりを告げた。

「さて、飯だ〜〜〜！」

オレは、夕飯のベルがカランカランと鳴るのを楽しみに、部屋で待っていた。

と云うのも、この部屋に帰って来てからというものの、ユエと会話らしい会話が出来なかったからである。

本当は、謝らないといけないなと思っていた。自分勝手なことを今日はして来たのだから。でも、そう云う雰囲気にならない。ユエはただ黙々と、教科書を読んでいた。何だか話しかけるのに戸惑う。オレが実践で勝ってしまったというのも実は話しかけられない要因だった……

トップでここに入り、未だ一回しか剣を交えていない訳だけど、飯にも負けた訳で。プライドの高い奴かどうかは判らないが、普段

が普段なだけに話し掛けづらい。だけど、飯くらい楽しみたい物である。だから想いっきり独り言を云つてみた。
すると、

「ちよつと話があるのだが……」

と、今まで読んでいた教科書を置き、ユエから話しかけてきたのである。

オレは、一瞬面食らった。どういう心境の変化なのであろうか。

「あ、ごめん。オレ今日勝手すぎた！」

ユエが先に何かを云う前に、オレは謝ってしまった。何だろ。怒られると想ったからか。

「あ、その……私が。謝るべきなのだと想うが？」

「へ？」

オレは、ユエの口から零れ出た言葉にまたまた面食らった。ユエが謝る事は無いであろくに……

そしてユエは視線を直ぐ直ぐオレに向けてこう云った。

「九竜さんに、私が言付けた事……大変申し訳ないと想う。直に私が云うべきだった」

ユエは、それを今まで気にしていたのか？何だ……オレはフウッと息を吐き、そして、胸を撫で下ろした。

「そんなことか……オレ何も気にしてないよ。だって、お前云いづらかったんだろ？口下手そうだもん。それ直した方が良いかと想うけど、そう簡単に出来ることでも無いものな？オレてつきり愛想つかされてるか、怒ってるのかと想ったぜ？」

オレは、ニツと笑って見せた。

それを見たユエは、大きく目を見開いて、それから視線を外した。「そうか。今度からはそうする事にしよう」

ボソツとそう云った。何だか立場が逆の気がする。オレはクククと笑いが込み上げてきた。そしてワハハハと大声を上げて笑った。お腹が痛い。この笑いは、卑下してるものではない。そう、このユエと云う個性が何だか判った気がしたからだ。

「おい。飯食いに行こうぜ！と云うか、お前も笑え！」

オレは、背の高いユエの肩を抱いて、食堂へと導く。未だオレは腹から笑っていた。

「何故、私が笑わなければならない？」

ユエは、不思議そうにそう云った。

「可笑しいから笑うんだろ。お前感情表現下手！笑ったらかなりもてるぜ」

そう、笑って欲しいものだ。きっと貴重だぜ。こいつの笑顔って見てみたい。見たい。

此処に来て、そう想う。只でさえ一目置かれているのだ。きっと人気者になる。そう云う友人を持てるのも良い事だ。

「さあ、さあ、あの埃まみれの食事食いに行こうぜ！」

オレは、食堂までこいつと肩を並べて歩く。それを、食堂に行くまでに出会った者達は呆気にとられるかのように見ていた。

へへへ。オレは、鼻を擦りながら食堂を目指す。こいつとこんな風に話が出るオレ。羨ましいだろう？そんな気分だった。

8 疑惑

「で、ユエとはもう、普通に話せるようになったのか？」

九竜は問いかけてきた。

ローズの十日。あれから二ヶ月経つ。

そして、二限目の演舞授業が終わって場所移動をする休み時間であった。いつもと同じ水飲み場で、九竜は枯れ木に体を預けている。

九竜とは、気軽に話せる友人となった。それは多分馬が合うからだろう。

「うん。でも、過去の事とかは話さない。オレは話しても、ユエは話さないんだよな。その辺りかなり気になるんだけどさ」

そう。あれから食堂に行つて、九竜達と同じテーブルを囲み食事をした後、部屋に帰つて、騎士論とか語り合つた。そして、オレの過去も。

だけど、その過去に関する事に対して、ユエが何故か自分を貶すようなそんな態度を取っていたから、それ以上オレ自身の過去も話せない。だから、会話はごく普通に、世間話。

ユエの過去に関しては、全く判らない。それは話そうとしないからだが。

「ユエって、女子の間で凄い人気みたいだよ。というか、男の間でも一目置いてる奴結構居るけど」

確かに、目立つ存在だ。行動じゃ無い。持っている気だろう。

「オレも見たいよ。ライラとか云うかなり美人の目立つ女子に告白されてるの。とにかくすごい人気。だけどあいつ、告白されても静かに断つてた。勿体ねえ」の。他にも多分懂れてる女子多いぜ」

オレ自身、見かけで此処に来た時、ユエの事女かと間違うくらい綺麗だし、威厳もある。そんな奴を周りは放っておか無いだろうな。何て思っていた。それだけユエは凄く人を惹きつける。但し、話しは下手だが。

今日の演舞演習で、ユエの剣さばき、流れを見ただけで、それは師範よりも素晴らしかった。見惚れると云うのはこう云う事なのかと思えるほどに……

それに体型がスラリとしてるし背が高いのも手伝って、剣を構える時の姿勢一つ。それだけでも絵になるし、スツと弧を描く剣や、剣を振り抜くりズムも強弱も申し分が無い。

それを見て、溜息が出る者達多数と云うのも頷ける。それだけ、ユエの剣舞は素晴らしい。

そして、頭が良いのも事実。一限目の授業でのユエの発言からも窺えた。ただ、騎士となる者としてユエに無いのは、闘志だ。彼は優しすぎるのだらう。または、戸惑っているのかもしれない。心の何処かで制御をしているように見受けられる。

何度もそれを感じた。力を出し切ってないように感じられる。何故制御をするのだらうか？まるで、傷つけるのを拒むかのように……確かに、負けたくは無いらしいのは感じられなくも無い。でも、それを上回る感情をそこに込めては居ない。オレはそれが気になった。力が無い訳ではあるまいに。

「なあ、ユエって……かなり前に何か隠し事してるって九竜、お前云ってたよな？何だと想う？」

オレは、話をそっちに振った。もてる、もてないはこの際どうでも良い。それより、ユエ自身の事が気になるのである。

「ああ、そんなこと云ったっけ？」

おいおい、忘れてるよこの人は……オレは苦笑いしそうだったけど、

「ま、それは冗談だけど。ヤンの云い分だと、過去に関係するんじゃないかな？調べることは出来るのかも知れないが、それもどうだらう？本人が語りたくないのだったら、勝手に調べるのもどうかと……」

プライバシーを探ると云うのは避けるべきだと、九竜は云いたいらしい。

「そりやそうだな。自分から話してくれるのを待つか……」
そう云った時に、いつもの時間が来た。オレと九竜は、中央広場へと駆け込んだのである。

それからと云うもの、この騎士養成所でのオレ達の毎日は授業授業と追われる。

またその合間の一時は楽しいものもあり、友好を深めるものもある。オレ達のこの騎士養成所での時間は日々こうして何事も無く過ぎ去っていった。

そして、時は過ぎ、試験も終わり、後は卒業を待つばかりとなったレイズン十八日の事である。

オレは、試験結果で、一つ赤点を取ってしまったおかげで、職員室と呼ばれる押し置き部屋に出頭を余儀なくされていた。

「ああ~~~~頭が痛い~~~~」

オレは、その場所まで行き着くまでに、ブツブツ文句を云っていた。

その報告を受けた時、近くに居たユエは、当然の事としてオレに一瞥したが、初めみたいに、感情が無いようには感じられない。少なくとも、ご愁傷様とでも云いた気な表情だった。

まあ、ユエは結局、この騎士養成所では最期まで実践以外はトツプの座を誰にも渡さなかった。だから、今は有意義にこの時間を楽しんでることだろう。九竜の相方のミハエルとは仲が良く、多分オレを送り出した後、九竜の部屋に遊びに行っている筈だ。

と云う訳で、オレは洪々一番苦手であった筆記試験の答案用紙を持って、この場所に來たと云うわけだ。

しかし、その職員室に辿り着いたのは良いのだが、中には誰も居ない。

「全くなんだよ！呼びつけておいてあの先生は！」

オレはぶつくさ云いながら、職員室の中に入る。

乱雑なこの部屋は、積み重ねられた本と、埃まみれの床。ゴミ箱も一杯だ。ここで仕事をしているのかと考えると、全く信じられない感覚だ。忙しくても、片付け位しろよな。

オレは鼻をつまんで、どうしようかと考えていると、この部屋のもう一つ向こうにある部屋から声が聞こえてくるのに気がつき、耳をすませながら、その扉の所まで行った。

始め、声を掛けるべきかどうか悩んだが、ベンジャミン・フリントという名前にドキツとして、そのまま耳をその扉に寄せる。オレの事か？それとも、ユエの事なのか？ユエの訳は無いだろう。だってあいつはトップでこの騎士養成所を卒業できるのだから。ならオレと云うのが妥当だ。だから、聞き耳を立てた。

「あの、ベンジャミン・フリントをこのまま卒業させて良いものかどうか。それをお訊きしているのです。彼は、曲がりなりにも、あの事件の当事者ですよ！」

やはりオレの事が……

「そうですね。そのお気持ちは判ります。しかし、この騎士養成所に来るように取り計らった私の意向をあなたは否定されるのですか？あの時あなたは、同意した。それは卒業をさせてもいいと云う判断の下でしょう？」

ん？何だ、この展開は……オレは志願をした訳で、取り計らって貰った訳では無い。どう云うことだ。もしかしてこの話は、オレではなく、ユエの？

「彼は、グリーズコートと、ラスキンハートの種族^ハ違い（ー）の子^ッです！しかも、親を焼き殺した。あの赤い髪の毛にオッドアイ。おぞましい……確かに私は許可しました。しかし、そのような者を、この国の重要な職に就かせる訳には行かないと云う事を云っているのですよ」

ユエが……グリーズコートと、ラスキンハートの種族間の子供……しかも、親殺し？

オレは耳を疑った。こんな事を聴いてしまつて良かったのか？オ

レは動揺を隠し切れず、思わずドアに寄り掛かってしまった。

すると、キチンと閉まりきってなかったそのボロイ木の扉は、ギシツという鈍い音と共に俺をその中に招き入れたのである。

「うわっ！」

中には、先生と、師範代。そして、此処を統率する校長、教頭がテーブルを囲み議論をしていた。

「あ、忘れてました……ヤン！お前こっちに来なさい！」

オレは、未だ胸がドキドキ云っている。先生にその襟首を掴まれそして、その部屋から摘み出された。

先生は、

「今までの話を聴いていたのか？」

と問いかけた。ここで嘘をつくのは簡単だろう。でも、オレは嘘の付けない性格だったから、

「済みません。聴こうと想ったわけでは無いのですが、オレの名前が出たから、思わず……」

そう。嘘じゃ無い。

「はあ……誰にも云うんじゃ無いぞ。何処まで聴いていたのかは判らないが、滅多なことを云えない事だからな」

真剣だった。それは、国家機密だと云わんばかりに。

「はい。判りました」

気になる。だから訊いてはいけないと想いつつ、

「ユエは……卒業できないのですか？」

オレは口を開いてしまっていた。

「仕方ない奴だな……普通、はい。と云ったら、訊かないぞ。そう云うことは……」

先生はそう云って、溜息をつく。

「私は、卒業しても良いと思っている。が、しかし、反対する者も確かに居てね。こう云う事は、難しい問題なのだよ」

種族に關係する事だから？それとも国の面子？それなら、ふざけるなと云いたい。

「ユエが、親を殺したつてのは本当ですか……」

その言葉は、先生の目を曇らせた。それもそうだ。殺したとなると、国と云うよりも、事件として扱われる。今頃牢獄だ。

「不可抗力。彼に殺す動機等なかったのだから。私はそう、校長からは聴かされている。確か、ユエが五歳の時だったそう。家が発火してね。その為焼け死んだ両親。その発火がユエの力だという説が濃いと云う訳だ」

魔法。グリーズコートの連中は、魔法を使う。それが、ユエの遺伝子の中に有るグリーズコートの血で有るならば、有り得る話だ。

「ただ、僅か五歳でそんなことが起こるであろうか？この先生の云うとおり、不可抗力だ。オレはそう信じたい。」

「で、どうやって、ユエは今まで生活していたのですか？」

そう。五歳で家と両親を失ったならば、その後は。否、オレみたいに、親戚の下でと云う事も有り得る。でも、オレの場合、もつと大きくなつてからだから、五歳のユエにそれはかなり酷だ。

「たった一人の祖母の家に預けられたと云うことだ。その祖母の口添えで、此処の校長が騎士に成る道を促していたらしい。そして、今回彼はここにやってきた」

祖母。それはグリーズコートの？それともラスキンハートの？もう疑問ばかりである。

「さあ、もうこれ以上話すことは出来ない。判るな？もし知りたいのなら、本人に直接訊き給え」

そう云つて、職員室の一部を借り切るように、椅子を動かした。

机の上にある沢山の埃まみれの本をも退かせて。

「今から、追試験だ。お前だけだぞ、こんな点を取ったのは！」

机の上に、俺が持ってきた赤点答案用紙を取り上げバンと置く先生。それをもう一度確認させてオレに新たな問題用紙と答案を渡した。

ウゲっ！そうだった。これがあるから此処に呼ばれたんだっ……
…オレは渋々机に着く。

しかし、気になることが沢山あり、追試験どころでは無い。どここれを取り切らないと、オレの目的もパーになる。だから、なるべく頭を集中させた。そう、オレは絶対騎士に成るのだから……

「まあ、これなら何とか合格点だな」

追試験を終え、疲れ切ったオレに、先生は少し渋い顔をしたが、合格点と云う言葉はオレを安心させた。と云うか、もうこれで勉強しなくても済むと云うのが嬉しい。

「もう、戻っても良いぞ。あと一つ。ヤン」

先生は何かを伝えたがっているようだった。それをオレは、
「何ですか？」

まだ何かオレの点数に不満が有るのかと、ぶっきら棒に問い返したが、伝えたかったのはそんなことではなかった。

「お前をユエと同室にしたのは校長だ。只それを伝えておきたかった。察しが着く、着かないはお前の頭で考える。私はそれなりにお前を評価している。卒業式で逢おう」

そう云って、先生は隣の部屋へと足を運ぶ。隣の部屋。そこで、未だあの話の続きは行

われているのであろうか？オレは、気になった。だけど、さっき先生がオレに云った台詞はオレにその経過を知れと云う事では無い。

そう、先生は、ユエを知れ。そして、オレにユエの力になれ。そう云いたかったんだとオレは察したのであった。それが出来るのは、きつと世界広しと云えど、同室になった名前と誕生日が同じオレだけかも知れないのだから。

#9 ユエの過去

「どうだった」

部屋に戻ると、九竜の部屋に転がり込んで居るであろうと予測していたのに、ユエは机の前に腰掛けていた。

「お、おう。合格！」

オレは、そう云って笑った。でも、この笑顔は作り笑い。本当は居ないと思っていた

者が居たので驚き、どうすれば良い？と云う困った顔が出来ない、咄嗟の反応だった。

「そうか。良かったな」

ユエは未だ笑った顔を見せたことが無い。

楽しそうにしている時でも、表情には出さない。そう云う時は少しだけ語尾を和らげるか、

言葉数が増えるかで読み取れる。

だけど、そう云う生い立ちなら、笑う事など難しいだろうなと俺は痛感する。オレも、タナーシャ討伐事変の後、笑う事など出来なかった。只憎しみに支配され、荒んだ。

でも、仲間と目的を見つけ、元来の自分を取り戻し、今に至る。

元来根が明るかっただけ有って、それは自然と出来た。過去に縛り付けられるだけではないけない。未来を変えるだけの力を持つ。それが、オレの出した結論だった。その先にあるモノが復讐だとしてもだ。

「なあ、ユエ。お前此処卒業したらどうするんだ？」

オレは話を切り替える。というか遠まわしにユエの事を知りたくてそう云ってみた。応えてくれるかどうかなど判らないのに。

「未だ考えてはいない」

ユエは、視線をオレから外してそう云った。

「あのな。オレと一緒に来ないか？」

何てことをオレは云っている！自分で発言し吃驚してしまったが、もう云ってしまったものは元には戻らない。

「ヤンと？何故。キミには目的が有るのだろう」

そう、そうだからなんだけど……ユエの事が気になるし、これからの事も考えてないのなら……否違う。オレはユエに……そのなんだ？

「オレは、友人達とグリースコートと闘う。お前も手伝ってくれないか？ユエ」

ああ、これって、不自然だよな。ユエにこんなこと云って。それに残酷な事をオレは云っているのではないのか？此処でグリースコートを出すなんて。

今迄だって過去の話をした時にはグリースコートの名は出している。それを余り心地良くは想ってないのも良く判っていたはずだ。だけど、ユエにこのまま過去の贖罪を抱えていて欲しくは無い。

向き合うべきなんだ。やっと考えが纏まった。

「ヤン。キミ……何か変だ」

そう変だよ。だって、お前の過去の一部を知ってしまったのだから。

「ユエ。お前の過去が知りたい」

オレはハッキリとそう云った。その言葉に、普段冷静沈着なユエは、ハッキリと左右の色が違うその瞳を大きく見開いた。

「どうしたというのだ。キミは……」

そうさっき、オレは一部を聴いてしまった。でも、オレはユエの口から知りたいんだ。

「さっき、職員室の奥の部屋でユエの過去を少し聴いてしまった。悪い。聴く気など無かった。だけど聴いてしまった……」

その後は察しが着くだろう？ユエなら。

「……」

ユエは静かな面持ちで、いつもの微動だにしない表情でオレを見ていた。

「オレはユエの口から聴きたい。短かったけど、オレはお前と同室で過ごしてきた。そして大切な友人だと想ってる。だから、聴きたい」

こんな台詞、オレ、何、恥ずかしげもなく云ってるんだ？何てことはもう切り捨てた。此処から先は、ユエの考え方次第だろう。

「聴いても、キミにはどうにも出来ない。とは想わないのか？」

ユエは全く表情が変わらない。何を考えているのか。それをオレは、どうしようか考えていると判断した。ユエは、吐き出したくても出来ないだけだ。こいつはそう云う奴なんだ。自分で抱え込むそれは、苦しいはずなのに……

「オレなら、何か出来るとそう想ってる。別に自惚れてなんかいないさ。でも、オレにしか出来ないと思う」

そう。オレだからこそ出来るんだ。オレは強気に出た。するとユエは、

「何処から話せば良いだろうか」

折れた。ユエは窪んだ床を眺めつつそう云ったのである。オレは自分の机の椅子に坐りユエと向き合い話を聴く体勢を取った。

それは、過去と向き合うユエにとっての断罪だったのである。

あの日、私は母と父とごく普通に食卓を囲んでいた。

父はラスキンハートの官吏で、よく南の街ルカンドの職務を果たしていた。ラスキンハートの純粋な血。そう、豊かな心の持ち主。

そして、母は、グリースコートの外れに在る村で育った、純血であるグリースコートの血を受け継いだ者。気性は血を感じさせないほど穏やかさを持った母だった。芯はかなり筋を通す人では有ったが。

そんな母をたまたま官吏の仕事でその村に訪れた父が、見初め結婚した。その時出来た子供が私だった。

勿論回りに反対された。その事の詳細など詳しくは知らないが、

父方の両親、親類とは疎遠になった。でも、父は母をこよなく愛していた。国の為に働く官吏と云う職を持ちつつ、それでも愛する者には国をも超えた考えが有ったのだらう。私はそんな父を尊敬していた。でも、もしかすると、私は心の中で自分と云う存在を両親がこの世界に残したのは間違いだった。とも想っていたのかも知れない。

世間は、父と云う存在を大切にしていた。でも母は日陰の身。それでも母は朗らかな性格で、異郷の地、グリーズコート特有の赤い髪と赤い目を惜しげもなく町で曝していた。その事は良く憶えている。母は強い人だったと。

私は、父の血を濃く受け継いでいたのか、見掛けはラスキンハート特有の面影をしていた。だから、周りの者は温かく迎え入れてくれていた。恵まれて育ったはず。それが、あの日あんな事に……

夕食を終え、寝る準備をしていた私の体がいつに無く熱くそして火照っていた。

風邪でも引いたのかと、両親は早めに寝かしつけたが、私は体の火照りで寝ることが出来なかった。異常な感覚。そして、突然の激しい頭痛。まるで、頭が叩き割られるのではないかと思えるほどの眠れない私は母と父の寝室に行った。二人とも既に眠りに就いていた。でも私は、二人に助けを求めたかった。そして、二人を起こしに掛かった瞬間、炎が辺り一面を覆った。

私は、混乱した。何故こういう状況になったのか。それが判らなかった。

燻った臭いが充満した時、父にまず引火した。父は転げ回るようにして、ベッドから落ちた。そして、私に手を差し伸べようとした所で息絶えた。

母はその様子を見て、何が起きたのかを判断したのだらう。父を助けようと、汲んできた貴重な水を父に掛けた。しかしそれも既に遅過ぎた。

火の勢いはとどまらず、母は私を抱いて、屋敷外に連れ出そうと
していた時、倒れてきた箆笥の下敷きに。

私に、逃げなさいと言った母の言葉が未だに耳に焼き付いて離れ
ない。

これは私のせいなのか？

助けが来た人達は私だけを連れ出し、そして看病をしてくれたが、
私の姿はこの通りだ。

グリーズコート特有の面影をしていた。左眼を残して……

周りは、この事件が、私が引き起こしたものだと思わなかった。
魔法。そう、力が覚醒をしたのだと。

その後私は町を追われ、母方の祖母の住んでいるラスキンハート
の南の地。その国境近くで過ごした。あの事件以来、失語症となり、
話す事さえ出来なかった私は、本にかじりついていた。そんな私に
祖母だけは優しくかった。

そこでは異端だと罵られる事が多々あったが、それでも、理解し
てくれる人間は、祖母一人。私は祖母にだけ心を開くことが出来た。
ただし、行動としてだけ。

その祖母は、ラスキンハート。そう、この騎士養成所の校長と縁
を持っていた。それは、二つの種族を繋ぐ架け橋の役割を持った間
柄だった。

今想えば、単なる推測になるのだが、二人は恋人同士だったので
はないだろうか？それほどに親密で、穏やかな会話をしていた。お
互いを見る眼差し、相手を想いやる心がその会話の中に見え隠れし
ていた気がする。

その校長が、私に騎士に成らないかと私の目の高さまで腰を落と
して肩を抱き寄せそう云った。私は、騎士になるという行為がどう
云う事になるのか？それを考えられる年頃にはなっていた。

だけど、迷いはあった。何しろ、私は親殺しと云う大罪を犯して
いる。例え自覚症状の無いことであっても。そんな者が、ま

してや、グリーズコートの血をも受け継ぐ者が、ラスキンハートの騎士になど成れるのであろうか？それに、私は自分自身、父のように国に忠誠を尽くす仕事を望んでいるとは思えない。そう、何をしたら良いのかさえ判っていないかった。

それでも、彼はそんな私の身を案じたのだろう。何か目的を持とうとすれば、今の自分を変える事が出来るし、道は何処かに繋がるとそう希望を持たせようとした。その事は、私に色々な考えを齎せてくれた。

だから私は、それに賭けてみようとの騎士養成所へと導かれ、やってきた。それまでの期間、失語症を回復させ、必要な物を全部頭と身体に叩き込んだ。

でも、私が帰るべき所はもう無い。それは、祖母が此処に来る二日前に既に黄泉の（グ）国へと旅立ったからだだった。私の唯一の心の支えは無くなった。

それでも私は生きていかなければならない。そう。今自分は、大きな罪と、未来を抱え、こうして生きているのだから。

私の罪をどう受け取るのか。話し終えたところで初めて、ヤンの顔を見た。それまで私はずっと床を見て話していた。目を見て語れるほど私は強くは無い。強くありたいと想うのだが、罪と云うものは、人を弱くする。

そして、何か救いを求めようと目を見張る。それが罪人なのかも知れない。

せめて、ヤンがこの話を。私を受け入れてくれるのなら、私は少しでも救われるのかも知れないだろう。怖いけど、辛いけど、私はヤンを、ヤンの瞳を真っ直ぐ見詰めた。

その視線の先には、ボロボロ大きな碧い瞳から涙を流しているヤンが居た。何故ヤンが泣くのだろうか？私は不思議な感覚に陥った。その訳が判らなかったから。

「何故、ヤンが泣いている？」

私はつい口から言葉が零れ出た。

「お前が泣かないからだろう。お前泣いてないんだろう。オレには判る！」

そう云って、ヤンは私の手を取った。その手にヤンの涙がポトポトと落ちた。私はどうすれば良いのか判らずそのままその涙を見ていた。

掛ける言葉が判らない。私は何をすれば良いのだろうか。考えるが、答えなど無い。

ただ、想い出した。こういう時、抱き締めて貰ったら、心は落ち着くのだと云う事を。

私は、恐る恐る、ヤンの肩を抱き寄せた。そして、

「もう、泣くな」と云った。

よく考えると、変な言葉だ。泣くなって云うのは変だ。子供をあやす言葉ではないだろうか？自分で云って、ん？となる。何故だが可笑しい。

「ほら、顔を上げる」

そう云うと、ゴシゴシ服の袖でヤンは目を擦ると、私を見上げた。そして、一瞬驚きの表情をしたかと想ったら、何故かとても嬉しそうに笑った。

「何が可笑しい？」

私は、問い返した。するとヤンは、

「初めて見た。お前が笑ってる顔」

私が笑っている？自覚がないうちに笑った？私は、どう言葉で表現していいのか判らなくて、戸惑う。

「良いから、考えるな。そのまま笑ってる。その方が、オレ嬉しいから」

ヤンは、そう云って、私を見た。それは心の底からそう想っていると私にも判った。だから私は、何も考えないようにしようとした。でも、疑問を感じると、そっちに頭は回るものであって……

「混乱するな！あ、そうだ、この話知ってるか？九竜が、二段ベツドから寝ぼけて落ちたって話！」

私は、プツと噴き出した。

「んで、たまたまミハエルがその前に起きようとして、上を見たらよだれたらした九竜が降って来たんだってさ！可笑しいだろう？」

私は、その話を聴いて、笑ってはいけなないと想いつつも、何か込み上げてくるモノにしたがって笑ってしまった。

笑う。そう、こんな感情は両親を失う前の穏やかな日々以来だ。

「おめでとう。ユエ」

そうヤンは云った。それはきっと、私の凍て付いた心を溶かした瞬間だろう。

贖罪。

それを洗い流した、一瞬。

何か特別な事をした訳では無い。只、自らの罪を話しただけ。でも、感情と云うものを少しだけ取り戻した。それは、他人に。否、一番自分に近い友人と云うべき存在に、自分を判って貰えた事。それが、断罪でもある。

癒しは、こんな身近な所にあつた。そう、それは私にとっての、新たな始まりの場所にもなったのである。

「で、どうする？」

オレは、ユエの端正で優しい笑顔を堪能するだけ堪能して、話を戻した。

実際、ユエには還る場所がないのだと知ったし、このまま官吏なり師範になると云う手もある。

がしかし、オレは何故かユエをそう云う職に就かせることは、ユエを潰すのでは無いだろうか？と云う考えにも至った。九竜の云う通り、ユエは弱い。感情を潰したら、それこそまた失語症にでもなりかねない。

それなら、オレと共にオレの目的を果たす手伝いをしてくれた方

が良いのではないだろうか？何て事を考える。身勝手なのだろうか。もしかして、オレはこのままユエを手放したくないのかも知れない。否、此処で別れるのは間違っているのではないだろうか。そう真剣に考えた。

「それは……ヤンの云う通り出来るならしても良いと想うが、私はグリースコートの血も受け継いでいる。それが仇になるかも知れない……」

悩んでいるのだろうか。

確かに半分はグリースコートの血を継いでいる。その事で自分を否定する事は無いとオレは想う。でも、同族と闘うと云う事に反発があるというのであれば、俺が介入できることは無い。そこまでオレは、ユエを束縛できはずは無いのだから。

「オレは……その、ユエに傍にいて欲しいと想った。でも、お前にそれを強要する事は出来ない。だから、仇とか気にしているのならその事に関しては、オレは気にしない。ただ、ユエが本当はどうしたいか？それが知りたいだけだ」

ユエはその言葉に、考え込んだ。自分がどうしたいか？それを考えているようである。

出来れば、共に。と云って欲しい。そうオレは、その短くて長い時間願っていた。

「本当に、大丈夫か？私で……」

その考えた末の、最終的な問いかけなのだろう。

「オレが良いと云ってるんだ。ユエが心配する事は何も無いぜ」

オレは云い切った。不安そうな印象的なオッドアイが揺らいだ。オレはそれに吸い込まれそうになる。何かオレ変かも。だけどそれを打ち消し、

「心配するのは、オレの方。ユエを護れるかどうか。だって、お前オレには実践で一度も勝った試し無いものな？」

そう、ユエは実践的には不向きかも知れない。でもそれは、オレが強過ぎるだけなのだから。

「そうか。判った……なら、此処を卒業したら、ヤンに着いて行く」
ユエの中で心が決まったらしい。

その答えがオレを喜ばせた。

「なら卒業後、北にあるオレの村まで一緒に旅立とうな。お前荷物少ないから、苦にはならないと思う。ああそうか、もう冬だから、雪がかなり降り積もってるだろう。あと、オレの友人にもお前を紹介しないとな」

オレは俄然やる気が出た。この気持ちは何なのだろうか。凄く気分が良い。それに、体が軽く感じる。

オレは、早く卒業式が来ないかと楽しみにした。そして、その卒業式は来た。

ユエは、無事此処を卒業できるように取り計らって貰ったのである。卒業式の講堂にちゃんとユエは居た。

そう、きつとあの校長。あの方が、話を纏めたと俺は想った。全ては何事も無く進む。

「卒業おめでとう。どうだった？ユエとは話がちゃんと出来たかな？」

卒業式後、よく怒られたあの先生はオレに耳打ちした。オレはにっこりと笑って、

「はい。おかげさまで！オレ達はオレ達の道を取り敢えず進むつもりです。先生にはお世話になりました！」

満面の笑みで、オレは先生に応え、そして、ありがとうございましてと感謝した。

卒業式で配られた白い絹の騎士の服と紋章。それを身につけての卒業式。それは、少し大人の階段を上った気がした時間だった。

そして、オレ達は荷物を片付けると直ぐ様北のタナーシャに向って旅立った。そう、オレが還るべき故郷へと……

#10 帰郷

タナーシャは、もう、冬景色。真っ白い景色が視界を覆う。雪は腰まで深々と降り積もっていた。

オレは、防寒用具を持っているが、ユエは、防寒服さえも身につけてないため、この寒くて凍えそうな雪の中、身動きを取るのが苦しそうだった。「一緒に来るか？」と云った手前、自分に責任がある。だから、オレの持っている防寒服を、ユエに着させようと想い、立ち止まったが、オレと、ユエの体格差と云うものがそれを拒んだ。「済まない。ユエ」

オレは、自らとにかく着込み、その上に羽織るマントを自らとそしてユエに掛けてやった。

ユエの方が頭一つ以上高いため、その見た目は端から見るとデコボコした岩が歩いてるように見えるだろう。それでも、身体を寄せて歩いている内に、体は温まった。

「ホント悪いな」

オレは謝ったが、ユエは首を横に振った。気にしてないと言いたげだった。南の町で育ったユエにとってははきつい環境だろうに。

オレは、なるべく早く暖を取れるようにと、急ぐように足を動かした。

ユエもそれに歩調を合わせている。申し訳ない気分であるが、それを見せないようにオレはギュッとマントを持ち、先を見据え歩き続けた。

そして、オレの家に辿り着く。家と云っても、簡素な物だ。石煉瓦を無造作に積み重ね、屋根は木と木を加工し組み立てたもの。それでも、生活には苦勞しない。家が在るだけ恵まれているのだから。「さあ入ってくれよ」

オレは、ユエを家に招き入れた。

「暖かいな。外の空気をキッチンと遮断している」

そう。無造作に石煉瓦を組み立てていても、隙間は作っていない。この気候がオレ達の村に知恵を授けてくれたと云う訳だ。

「それに片付いている。ヤンは意外と几帳面なのだな」

その言葉は、オレの性格と違うと云いたいのですかな？確かに大雑把だけど、こう云う事はきちんとしたいんです！オレは苦笑いしなくなつたが、

「今暖を取れるようにするから、その辺りの椅子に腰をかけてろよ」
オレは、荷物を自分の部屋に持っていくと、裏から薪を持ってくる。それを暖炉に放り込み、火をくべた。次第に部屋は暖かくなつていった。

オレは、ユエの座っている椅子に対して面と向かうようにテーブルを挟んで腰を掛けた。

「さて、本題に入ろうか」

ユエも、荷物を床に降ろし、寛げる様になつたところでオレは詳しい話を持ちかけた。

「まず今オレの友人達は、自らに合う資格を採りに各地方に旅立つてる。オレが此処に還ってくる時期に合わせて、還ってくるようになつているからその内顔見せが出来るだろう。ユエにもちゃんと紹介する」

まずオレの仲間を知って貰わなければならない。それに知りたいであろう。ユエも。

「それに関しては、ヤンにお願いしたい。私の事はどう説明する？」
そうなのだ。騎士養成所の仲間として紹介するのは容易い。しかし、素性は明かさない方が良いだろう。ユエの生い立ちは秘密であつた方が無難だ。

「同士だと伝える。それで良いだろうか」

オレは、それしかない。とそう想つた。

「それしかないだろう。半分グリースコートの血を受け継いでいるなどとは云えないだろうし」

ユエは、いつものあの無表情な顔でそう云った。無表情。でも最近こいつが少しずつ、微かに感情を表に出すようになって、ことを俺は知っている。

ほんの僅かだが、喜怒哀楽を感じ取る事ができるようになった。それは喜ばしいことだとオレは想う。

ユエらしさ。人間らしさ。それを身近に感じる事が出来るのだから。今のユエは冷静にそれを受け止めている所だと判る。

「そうだな。さて、オレが還って来ると、此処の明かりで皆判断するだろう。そろそろ夜になる」

北の地タナーシャは、白夜。そう、夜は短い。それも有り、暗くなるのが遅い。明かりか、それとも暖を取っているその煙突の煙かで判断する所が日常茶飯事だ。

と、此処で玄関の扉を叩く音が聴こえた。

「誰だろう？もう、還って来たって判ったのか」

オレは、呟やくように、

「ちよつと待つてろよ」

そう云った。それに対してユエは、緊張しているかのような表情を見せて、

「ああ。判った」

と返した。俺にもその緊張感が伝わった。

それが、オレとユエにとって、タナーシャに還ってからの、仲間との帰還後の最初のコンタクトとなった。

ヤンはそつと扉の前に立つと、

「どなたですか？」

と問いかけた。すると、ヤンが扉を開く前にパンツとそれは開かれ、金髪をポニーテールにした色白の小柄な女の子がヤン目掛けて抱きついたのである。その勢いで、ヤンは後ろにひっくり返ってしまった。

その勢いと云うのは凄い物で、何が起こったんだろうと想えるくらい、私は面食らってしまった。

「いたたた……」

ヤンは想いつきり頭からひっくり返ったものだから、頭を押さえて上に乗っかっている者にこう云っていた。

「莫迦！この、はねつかえりミネルバ！だからいきなりこういうことするなんていつも云ってるだろ！」

ミネルバと云う子に対してヤンはつつけんどんに云った、そして未だにヤンの上から下りようとしないのでそれを困ったように直にその体を押しやっていた。

私はこの場面ここに居合わせているわけで、どう反応すれば良いのか？それを考えたが、見て見ぬ振りを決め込んだ。それは、見て良い物かどうか判らないプライバシーと云う物だろう。

「お帰り〜ベンジヤミン。やっと逢えたつてのに、その素っ気無さは何なのよ？全く失礼しちゃう！このミネルバ様が抱きついてあげてるんだから、光栄に想いなさいって！」

元氣一杯なそのミネルバと云う女の子は、リズム感良くヤンに云い放っていた。よほど自分に自信があるらしい。でも、確かに綺麗な顔立ちをしている。

そんなミネルバが、私の存在に気が付いたのは、それから直だった。思わず私が椅子をギシッと軋ませてしまったからである。

「あら、お客さん？」

ミネルバと云うその女の子は、こっちに一度顔を向けてそして、ヤンを見下ろしていた。

「見たら判るだろう。あと、お客さんじゃ無い。オレ達の新しい仲間だ……判ったら、さっさと退いてくれないか」

ヤンは、真っ赤になつてそう云っていた。

それには、渋々仕方ないかと、ミネルバと云う子は顔を歪ませ、立ち上がった。

普段しているのだろうけど、仲間と云う言葉に反応したとも思える。

さっきまでのにこやかなその表情が一変した。よくよく見ると、少し吊り上がった目元が印象的である。

「仲間って、女性なの？こんなひ弱そうなのが仲間なんて、大丈夫なのかしら」

女性？って、私の何処が女性だと云うのであろうか。しかもひ弱そう？流石の私もムツとしてしまった。それをヤンが、

「ミネルバ！お前失礼すぎるぞ！彼は、オレと同じ名前のベンジャミン・フリントって名前のれっきとした男性だ。年もオレと同じだし、お前より年上！それに、騎士養成所では主席を通して。そこらの騎士より、格が違うの！」

それは云い過ぎだろうと私は、ヤンの言葉にちよつと待ってくれと云いたかったが、ミネルバが、

「ええ？男なの！どう見積もっても女性にしか見えない。と云うか女性の匂いがあるんだけど？脱いでみせてよ」

なんて詰め掛けてきた。とっぴ無い事であるし、何故此处で私が脱がなければならないのであろうか。

余りにも今までになかった発言に、困った私を助けてくれるかのように、ヤンはそのミネルバの首根っこを掴んで、ヒョイっと持ち上げると、近くの椅子に坐らせた。

「そこで反省しろ。全く何をぬかしてるんだかこの莫迦は。悪い。こいつの悪い癖が出ちゃった。こいつは、猛獣使い（ビーストテーパー）。云うなれば、動物を操る事が出来る一風変わった能力を持つてたりする。ミネルバ。挨拶は！」

そう云って、苦笑いしていた。まるで保護者のような対応。実際さっき、彼女の方が年下のような私の紹介をしていた。

「ミネルバ・タフト。宜しく。あと、ベンジャミンは、あたしの夫になる人だから、手、出さないでね。と云っても、ベンジャミンは、もう既にあたしと約束してるもんね」だ

凄く直線的な性格をしているなと思う。が、やはり敵対視ライバルされていると云うことは、私を女だと未だ想っているらしい。

匂いと云っていたが、何の事なのか？私は疑問だったが、余り追及することも無いだろう。そう。私はれっきとした男なのだから。

「おい、ミネルバ！誰が夫だって？お前みたいなハネツ返りの、高慢ちき。嫁になんて貰う訳無いだろう……それにいつ約束した。冗談はその辺りにして置け」

ヤンは、まんざらでも無い顔でそう云った。なんだ、何だかんだ云つても気に入ってるんだ。このミネルバと云う少女を……そう想ったとたん、何だか胸を締め付けた。それが何なのか今の自分には判らず、一瞬不安になったが直に話に耳を傾ける。

「で、お前いつ戻ってきたんだ？それによく気が付いたもんだ」

ヤンは、話をミネルバに向けた。

「一昨日だよ。卒業式があたしの方が早かったんだ。それに、ベンジャミンが還つて来るのを待ちに待ってたんだよ。気付かない訳が無いじゃない？それに、あたしにはこの耳と鼻がある。声と匂いですぐに判るよ」

ケロッとした顔でミネルバは、云った。それが当たり前でも有るかのように。それもそうだろう。ヤンの事が好きなのだろうから。

「で、他の皆は？」

ヤンは、少し照れて後の仲間の事を聴き始めた。

「あら、照れちゃって。うーんと、エドは未だ還ってきてないよ。

アーイシャは今日還つて来たけど、未だ顔を出さないと想う。あの女、面倒くさがりだから。リケルは還つて来てる。相変わらず、薬草図鑑に没頭。ルシードもそう云えば未だかな」

名前を挙げる限り、他に四人居るらしい。私達、此处に居る者を考えると、七人と云う事になるのであるうか。私は、冷静に判断していた。

「そうか。なら皆が集まれるまで、少し待たなきゃな。卒業式が終わってるけど、タナーシャに還つて来れてないと云う事も考えられる。さて、俺はもう休みたいから、ミネルバお前帰れよ」

あの雪の中、動いたのはかなり辛かった。流石に私は何も食べな

くても休めそうだ。

「えゝ折角還つてきたのに、もう少し喋ろうよゝ」

ミネルバは、名残り惜しいとヤンに縋り付いた。それを、

「俺は休みたいの！さて、ユエ、休もう。オレの部屋貸してやるから」

ヤンは、そう云うと、私に話を振った。だけどヤンは何処で休もうと云うのであろうか。

「ヤン、お前は何処で休むと云うのだ？」

私に部屋を貸したら、休む場所が無いであろくに……

「オレは、此処で休む。それとも一緒に良いか？」

ヤンはケタケタと笑った。一緒に云うのも良いのだが、狭くなるであろ。私はとにかく場所を取るだろうから。

「なら、私が此処で休もう」

そう、居候としては丁度良い。

「そんなことさせられるかよ。ユエは客人なの。奥で休め。オレは何処でも寝れるんだから良いんだよ！」

ヤンは慌ててそう云った。それは自分の責任であるともいうかの如くだった。

「ねえ、ちよつと。さっきから気になってたんだけど、ヤンってベシジャミンの事？」

私達のやり取りにミネルバが間に割って入った。

「オレ、ヤン。って渾名なの。で、こいつは、ユエ。さっきも云っただろ。名前が一緒だって。お前も、オレの事、ヤンって呼べよな。紛らわしいから」

話を聴いてなかったのかと、ヤンは嗜めた。だけど、名前が違うから渾名で呼び合つてるとはヤンは語ってない。だから、

「ごめんなさい、ミネルバさん。私の事は、ユエと呼んで頂ければ嬉しいですよ」

ヤンの事はともかく、それで良い。出しゃばってしまったかも知れないが、そう云った。

「ふん。そう。あなたの事はそう呼ぶわ。でも、ベンジャミンはベンジャミンって呼ばせて貰うから！あなた達の都合なんて知らないわ」

ミネルバはハッキリとそう云った。

「ミネルバ、お前な！合わせるよな、このちんくしゃ！」

ヤンは怒っているようだった。もしかして、この仲間達って云うのは、ヤンを中心に集っているのではないだろうか？リーダーとして。

「酷い！今更変えられる訳無いじゃない！ベンジャミンはベンジャミンよ！もう、あたしはそう呼ぶからね！」

そう云うと、椅子から立ち上がり、舌を出して玄関の扉を開けてドタドタと出て行った。

「ったくあいつは……」

ヤンは、頭をポリポリと搔いて、溜息をついていた。そして、

「ミネルバってああいふ奴だから、手が掛かるけど、気を悪くしないでくれよな。あいつの腕と天性の勘はホント凄いから、仲間としては、手放しがたいんだ」

言い訳かな。でも、私は特に気にはしていない。驚いたけれども、「で、ユエ？お前はオレの部屋で寝ろ。絶対それだけは譲んないからな！」

念を押されてしまった。それに私は逆らうことは許されない。なんて想着て、

「それじゃ、お言葉に甘える」

と、少し躊躇ってそう云った。

それから、休む準備が始まる。それは、ヤンの下テキパキと進んだ。

流石この家の主。

ヤンは、私が想っているよりしっかりしている。それが凄く心強い。

これから後に、ヤンの仲間達との対面がある。それを考えると

新鮮でも有るが、凄く緊張するだろう。それでも私が選んだ道だ。もう引き返すことは出来ない。そう。ヤンと云う旗頭の下、私は動き始めたのだから。

だから、今は休もう。

備え付けられた布団の中に潜り込む時、私はそんな風に考えに至った。そしてその布団は、薄くても、温かくて、ヤンの匂いがした。それが何だか心地よくて、直に眠りに堕ちた。

#11 結集

「ヘックシユン！はあゝ」

オレは、毛布を羽織って、暖炉に火をくべた。

昨夜、防寒服を身に纏い、掻き集めた布団に包まって石煉瓦の壁にもたれて丸まって寝ただけど、どうやら風邪を引いてしまったらしい。

「ズズズ……」

うゝ鼻が出る。これなら、ユエと一緒に寝た方が良かったかな。なんて想ってみたが、その図を考えると、危ない構図だと想い、頭を振った。これが、二、三歳だったら可笑しくも無いんだけどな。そう。もう、十五だ。ミネルバにバレたらそれこそ、大問題だ。

「不潔よ！」

なんて云われそうだ。

さて、ユエを起こさなければ。そう想った時、オレの部屋の扉がギシット軋み、ユエが起きてきた。

「おはよう」

「おはよう……あの、さつきクシャミしてたみたいだが、風邪を引いたんじゃないのか？」

耳ざといな。しっかり聴かれている。

「いや、誰かが噂でもしてるんじゃないかな。ミネルバ辺りがさ」
オレはユエに気を遣われると大変だからそう云った。ミネルバだと、有り得るだろうしね。

「それなら良いんだが……今日は、これからどうするんだ？」

そうだな。やる事は、日々の鍛錬くらいだけど、外は雪が降り積もっている。とにかく、その雪をどうにかしないといけない。

「まず、飯を食ってから、雪掻きだな」

オレは提案した。すると、ユエは判ったと云って、炊事場へと足を運ぶ。

「適当に作ったので良いのか？なら私が作るが」

と云つても、此処を出た後、蓄えた食材は限られている。このタナーシャの北の村は、食べることに神経質である。南方で育ったユエには考えられないであろうが……

「保存してる食材が無いから、オレやるよ」

オレは、急いで炊事場へと向う。

そこに居るユエは、色んな引き出しを開いて考え込んでいた。やはり、判らないのだろう。

「ほらほら、客人はあつちで寛いでろ。オレが作るから」

ユエは、少し申し訳ないという表情をして、

「足手纏いの様だから、そうさせて貰おう」

オレに頭を下げて暖炉のある部屋へと戻っていった。

オレは、謝らなくても良いのにも思ったが、それがユエらしいとも想い、クスツと笑つた。少しだけユエが作る料理と云うのも食べてみたいなんて考えてる自分。それが可笑しかったのも有ったり。

それから、食事を摂ったオレ達は、食後の運動も兼ねて、雪掻きをした。それは、身体を温めるには丁度良い運動だった。降り積もつた雪は、全て、家の端に掻き寄せて、道さえも作る。

それから、ユエを相手に剣術の練習。

実践では負けたことが無いオレは、師範代が居ない今でも手加減無しに剣を打ち込む。

ユエは、剣の鋭さは変わらないが、やはり体力に欠けている。そこを突くのは容易い。

そして、朝錬を終えたオレ達は家に帰ろうとした所、ミネルバのはしゃぎ声で再び外に目をやった。

「ベンジャミン。還つてたんだね」

そう問いかけたのは、リケルであった。

「おお！リケル！どうだ？調子は」

銀髪の髪を後ろで一括りにしている、目がパツチリ開いた可愛ら

しいリケルは、重そうな書物を携えて、ミネルバの横で手を振った。
「はい。好調ですよ。ミネルバがベンジャミン、還ってきてるって云って誘いに来たんだ。」

ベンジャミンも、騎士の称号採れたみたいだね？」

そう、騎士の称号を採った採らないは、卒業式で貰う、胸に着ける気神を模した紋章で判る。オレはそれを見せて、

「勿論さ！これ見るよ！」

鼻高々。オレはそれを誇りにしている。

「薬草学の方はどうだ。此処に居るって事は、博士号貰えたんだろ
う」

リケルは、ほころんだ笑顔で、

「ええ。採れましたよ」

「リケルってば、それからって云うもの、ずっと家で薬草楽の本も
う一度お浚いしてたんだって！真面目すぎるのよ。詰んない男」

ミネルバの相変わらずの毒舌にオレは苦笑いした。ミネルバと同じ年のリケルであるが、落ち着いてるないつも感心する。

そして、立ち話もなんだからと、二人を部屋に案内した。

「そうなんですね。騎士養成所で、お知り合いになられたのですね、
ユエさんと。そして、ベンジャミンと同じ名前であるから、ヤンと呼べば良いんですね？」

とは、リケルの言葉。リケルの包容のある言葉は、ミネルバと違いホツとさせてくれる。

ユエにはこういう人間の方が、仲良く出来そうだ。リケルって、あの騎士養成所での九竜の相方のミハエルと似ているような気がする。オレは余り言葉を交わしていないから、詳しくは判らないけれども。

「そうそう、さっきアイシャにも声掛けておいたから、その内来ると想うよ！アイシャって、ホントだらしが無いんだから」

って、ミネルバの口から聴くと、とんでもない人間のように取れ

る。でも、オレに云わせると、アーイシャの方がどれだけまともか知れない。確かに、変わった思考の持ち主ではあるが……

そんな話をしていると、戸口をドンドンと、叩く音が聴こえた。

「ベンジャミン。わたくしです」

どうやら、アーイシャがやって来たみたいだ。オレは、戸口に行つてその扉を開きアーイシャを招き入れた。

「こんにちは。ベンジャミン」

アーイシャは、落ち着き払つてそう云った。前下がりの金髪オカッパ頭のこの冷めた所がアーイシャの持ち味なのだが、オレ的にはやりづらい。

「こんにちは、アーイシャ。先に此処にきてる奴等だけで、話をしている。キミも、席について寛げよ」

オレは、取り敢えずの所を云った。

「そう。ではわたくしも……ベンジャミン。知らない方がいらしますわよ？」

ミネルバは、ユエの事を話していないのか。オレはまた少しやりづらいなと想ったが、

「騎士養成所で、知り合つたオレ達の新しい仲間だよ。名前はオレと同じだから、ユエと

渾名で呼んでいる。宜しくしてくれ」

その言葉に、ユエが気を遣つて、

「ユエと申します。宜しくお願いします」

と、礼儀正しく頭を下げた。

「ユエさん。ですね……こちらこそ宜しくお願いいたします」

そう云うと、スタスタとユエの横の席に坐った。

オレの席だったのに、アーイシャは気にせず坐つて既に落ち着いている。オレは何だが、ユエを取られたかのような気がしてムツとしたが、考えてみれば、取られたなんて想うのが変なのだと打ち消し、仕方なくミネルバの隣の空いた席に坐った。

「アーイシャは、弓使い。弓を引くことに凄く長けてるんだ。狙い

は外さない。腕前は凄いぜ。それに、指揮系統も彼女が仕切る。とにかく、頭が切れるんだ。こいつ。年上だから落ち着いても居るし」

「そうか。皆さん素晴らしいものを持つてゐるんですね」

ユエは、それぞれのオレの仲間の事を把握しているみたいだ。

そう、リケルは医療、アイシヤは指揮官。

オレ達の間では、補助的役割を担っている。

「後は、ルシードと、エドか。あいつら、未だ還つてないのか？」
オレは、ちょっと気になった。もしかすると、オレが一番最後になるかもと想っていたからだ。

「はい。エドと、ルシードには家の扉に貼紙しておきました！
還つてきたら直ベンジャミンの家に来るように！つてね？」

ミネルバは、褒めて褒めて。つて云つてのける。まあ、そうしてくれたのは有り難いが、それを主張されると何だかなうである。

「ミネルバは本当に、気が利くね」

リケルは、そう云うミネルバが可愛いとでも云いたげににこやかに笑った。リケルは本当にミネルバに甘い。いや、ミネルバに係わらず甘いのだが、特にそう感じる。

「時々、煩いけれども」

アイシヤは、シラツと嫌味を云った。主張は良いから、実を出せと云つてゐるかのようだ。全くアイシヤらしい。

そんな時、また再び玄関の扉を叩く音がした。もしかして、還つてきたのかな。エドかルシードが。

オレは跳ねる様に、玄関へと急ぐ。そしてその扉を開いた。真っ白な景色の中、エドとルシードが揃つて顔を並べていたのである。

「よーベンジャミン」

「ただいまや。ベンジャミン」

オレンジ頭の癖のある髪の二人は、にっこり笑つて何も変わつた風もなくオレの前に居る。

「おかえり。遅かつたんだな二人とも。そうそう、こんな所で立ち話は辛いだろ？中に入れよ。ミネルバと、リケル、アイシヤも居

るぞ」

オレは、吹雪き始めそうな空模様を見て外に居るエドとルシードの背中を押し、入れよと促した。

そして、全員がこのオレの家に揃った訳である。

「これで全員揃ったな！」

そう云って、ヤンは、私の方に視線を動かした。

この者達が仲間。そしてこれから、エドと云う者と、ルシードという者の紹介をしてくれるのだろう。

「こっちのオレンジ頭が、エド。で、こっちのオレンジ頭が、ルシード」

そう紹介してくれたのは有り難いが、実はその二人、瓜二つ。どうやら双子らしい。私は思わず見比べた。

「見分けはつかないか。でも性格が全く違うから、すぐ判るよ。後、言葉遣いくらいだろうな？」

と、二人を私の目の前の席に坐らせた。

「こいつ、ユエって云うんだ。本当の名前は、オレと同じベンジャミン・フrintトってんだけど、紛らわしいから、ユエって渾名で。これからオレの事はヤンって統一して呼んでくれ。こいつとは、騎士養成所で気が合ってね。で、仲間に誘った。物静かな奴だけど、腕前は、オレと肩を並べる位凄いぞ？」

また、大げさな事を。私はそれでも何とか笑って二人に頭を軽く下げ、挨拶をした。

「宜しく願います」

すると、確かエドと云った者が、

「よっ！こちらこそ宜しく。この雑なベンジャ……じゃなくヤンにそう云わしめる腕前っての早く見たいよ。僕は、エドワード。でも、エドで良いからね。武器は槍を使うので、中距離戦向きなんだ。後は、吟遊詩人なんて者でもあったり。この豎琴^{ハープ}で、曲を編んで、攻撃力を上げることが出来るんだ」

なんて、自慢気に、豎琴を机の上に置いた。私は初めて目にする豎琴という物をマジマジと見た。細身の木であしらわれている型に、何やら文字が刻まれている。これはルーン？そして、それに細い糸を張っている物だった。

「テンポによって、攻撃力だけでなく、守備力も上るんだったよな？」

ヤンは、それを不思議そうに問う。きっと、余り把握していないのであろう。

「その辺りは抜かりなく、だよ。色々勉強してきたからね。但し、魔力。魔法の類に対して効力が有るかは微妙だけど？」

そう、グリーズコートは魔法を使う種族。ラスキンハートもそれを研究しているらしいとは祖母に聴いたことは有るが、それを表立って公表はしていない。ならば、この曲を編むと云う行為で攻守の力を上げると云うのは、魔力と云う物の一つなのかも知れないが、それは云わずにおいた。

「で、ルシードは？」

ヤンは、今度は、もう一人の方に問いかけた。

「儂か？そんなん訊かんでもわかつとろ？この儂が試験に落ちるわけない。勿論、トップで卒業してきたわ」

かなり、テンポの良い口調でそう云った。何であろう？この気さくさ。と云うのか、開放感。ヤンを上回る。それに、双子と云うのに、明るい所は似てはいるが、ルシードと云う者は、力強さを感じさせる。エドはそれより少し神経が柔らかいと云う感じがする。見た目は一緒でも、全くの別人だ。

「訊くのは野暮だったと云う訳か。悪い、悪い。ルシードは、武道家。拳を使うのと、短剣を遣うのが得意だ。器用でもあるんだよ」

ヤンは、参ったといった表情で、ルシードの頭を軽くこついた。

「いってゝべ……ヤンお前叩くなや。ああ、名前変えられると、ややこいな」

ルシードは、ぶつくさ云ったが、

「あ、でもユエさんが悪いんやあらへんで、そう云う意味にとらんでや？」

と、まだ逢ったばかりで判らない私に気を遣ってくれた。ヤンの仲間は皆気が良い奴ばかりなのかも知れない。

「そうそう、ちゃんと謝っておけよ。実は誕生日まで一緒に来る。縁が有り過ぎたんだよな。ユエ？」

そう云って目配せする。ヤンも気を遣ってくれているみたいだ。私の生い立ちに関して全く触れようとはさせてない。それは有り難いことである。しかし、

「でもさ、何かユエって、ラスキンハートの匂いってしないんだよね。これで男だっているしさ。あたし、赤い髪で、こんなルビーのような赤い瞳と灰色のオッドアイの人間って見たこと無いよ」

ズバリ、ミネルバは云ってのけた。それを私は言い訳できる訳もなくて……

「あら、赤い髪の種族も居ましてよ。ミネルバ。あなたが知らないだけですわ。それにオッドアイも」

私の隣に座っている、今迄一言も喋らなかったアイシヤがまるで対抗するかのよう云い放った。

もしかして、このミネルバとアイシヤは仲が悪いのであろうか？
「あら、そう。居るのね。知らなかったわ」

ミネルバは、肩肘をテーブルに突いたままフンツと鼻を鳴らした。
「まあまあ、ミネルバ。ボクも、見かけたこと無いから、初めは驚いたけど、アイシヤがそう云っているんだし、ね？」

と、フォローする。もしかして、リケルは、ミネルバの事を？なんて事を考えて私は要らぬ詮索をしてしまったと反省した。ただミネルバの言葉は確かに波紋を広げるだろう。

「ヤン。仲間なんだろ？それは間違いないんだろ？」

エドは、うん。と首を傾げて問いかけた。

「勿論だ。そうでなくてどうするよ……」

ヤンは、この不穏な空気をどうにかしようと、話を変える。

「さて諸君。これからの事に関しての相談だ。これだけの人数で、どう、グリースコートを攻略するかだ。それに関して、指揮を執るアイシヤ、どう出る？」

ここで、真剣な話をするのは、私の生い立ちを知らせないためだろう。

此処に集っているのは、少なからずもグリースコートへの反逆を企てる者達。それぞれの異なった想いを心に抱いているからであるからこそだろう。そうでないと、こんな少人数で、このアイーラの半分。中央部を攻めようなんて考えたりしない。

「そうですね。まず、グリースコートは、このアイーラの中央部にあります。ならば、

周りを固める事をまず、しないとけません。しかしそれをこの人数で出来る訳が無いのです。そこで、考えたのは、今までの事件を洗う事。わたくしは、それを元に、未だ荒らされていない地方を調べました」

と、オレンジ色の前開き服の懷に忍ばせていたのであるうか、そつと取り出し、テーブルにそれを広げた。それは、アイーラの地図であった。

「この×を付けている所が、過去にグリースコートが攻めてきた場所になります。これを調べるのは、西の貯蔵図書館であり、わたくしが出向していた宰相訓練所での調べによります」

それを私達は覗き込んだ。それは、かなり事細かく調べていた。小さな事件。皆が知らないような事件までそれは詳細にその地図上に×が刻み込まれている。

「そして、ここ。此処は何故か、攻め込んではいないようです。そこから進入する事をお勧めします」

と地図に指を滑らせて、アイシヤは云った。

「此処は……」

私は思わず呟いてしまった。それもそのはず、私の生まれ故郷。

そして、五歳まで育った場所。罪を背負った場所。南の町、ルカンダであるのだから。

オレは、思わずユエを見た。そして、蒼白な顔をしたユエにどう声を掛けようかと一瞬躊躇う。ルカンダは、ユエの故郷であり、辛い場所だ。そこから進入するなんて……

他に無いのか？オレはその隙間を探す。しかし、何処にも存在してはいないのだ。

「南の町なんやな。全く逆やん。此処からやとかなり回り道やな。グリーズコートを取り巻く結界は厄介やし」

ルシードは、あくあと、背伸びをした。

「良いんじゃない？その辺りの事は、ミネルバが何とかしてくれそうだし」

と、エドはミネルバを見た。猛獣使いであるミネルバには、空を飛ぶための翼竜を集めさせようと云う魂胆みだった。

「それは大丈夫。あたしに任せなさいな。翼龍の扱いは楽だから。ね、ベンジャミン？」

ミネルバは、乗り気のようにだが、オレ的には……やはりユエが気になる。オレはもう一度ユエを見た。しかしユエは、

「私も、賛同します。此処は私の育った場所。庭のような所です。案内も出来ますゆえ」

そう、云い切ってしまった。

それで良いのかお前は……ルカンダに戻ったら、ユエを見知っている者も居るであろうに。

オレは思わず胸を締め付けられてしまった。その覚悟が、ユエ、お前にあるのか？と。

「へへえ。ユエはんは、ルカンダ育ちなんや。

それは、都合がええ。道案内が居ると、心強いがな」

ルシードは、ユエの経緯いきわづかなど知らないものだから、気軽に賛成って挙手していた。そんな時、ミネルバがオレの顔色を窺った。そし

て、口を開く。何を云う気だ？

「そうね、何か役に立ちそうだし、あたしも賛成ね。どう想う？賛成の人拳手！」

勝手に仕切り始めた。オレの顔色をどう取ったのか？それは大体判る。ユエに絡んでいる何か。それを善しとするかどうかだ。是が非でもユエを追い込む算段らしい。この時ほど、ミネルバを身勝手な奴と想わない時は無かった。

「ベンジャミン？あなたはどのよ？」

賛成の拳手がこの部屋の天井に五本伸びている。と云う事は、オレ以外の皆は賛成と云う事になる訳だ。

勿論、ユエは自ら云い出したことなので、拳手をする立場では無い。なのに、此处でオレが反対すると、それは、或る意味ユエに対しての信頼を裏切ることになる。それを出来る訳がない。

「ああ……」

オレは、今気が付いたとでもいうかのごとく、軽く手を上げた。そして、この話は、いつから旅立つのか？に移る。

旅に必要な物。それが揃わないと旅は始まらない。しかし、卒業したばかりのオレ達に武器と云う物は備わっている。後は、それをどう扱うかだ。

「オレは、剣をもう少し厚く大きな物に変えたい。騎士養成所であつらって貰った物では物足りないからな」

少し時間を作ろう。その間に、ユエと話がしたい。そう想って話を持ち込んだ。

「そうですね。わたくしも、弓の強化と、調整をしておきたいですわ」

都合よく、アイシヤも賛同してくれた。「そうですね。ボクももう少し薬草に関して知りたい事があります。特に、南のルカンドで、どう云った物が取れるのか？詳しく知りたいものですから」

良いぞリケル！オレは、これで何とかなると想った。他の皆ももう少し何とかしたいと想っているらしい。色々語り始めた。

オレは、ユエをもう一度見た。そこに居るユエは、感情を押さえ込んでいるが如く、静かな眼差しで、そんな皆を見ている。

やりきれなさがオレの中に渦を巻いた。オレは、ユエをこの闘いに招いたのは間違っていたのかも知れないと、たった今後悔している。ただ傍に……と想像していただけなのに。

そして、最終的には、明後日ここを離れることで話は収まった。それはミネルバが、翼竜をこのタナーシャに集めるまでの時間と重なる。

「では、これにて、作戦会議を終える。皆、それまでに全てを整えくれ。後は、ただ行動を起こすのみだ」
そう締め括った。

その後皆は、それぞれこのオレの家から去っていく。但しミネルバは、

「ご苦労さんね。まあ、もう少し時間くらい上げるわよ。その、不思議な生き物に知恵を授けるくらい許してあげ・る」

等と意味ありげに云ってよこした。それを、アーイシャは、

「あなたも、ずいぶん不思議な生き物ですけど？さて、お暇しますわ。ヤン。当日……」

ユエを一目確認して頭を下げ、オレに目配せをしてから、ミネルバの腕を取って出て行った

#12 出発

部屋の中は、オレとユエだけになる。そう、やっと、二人きりになった。

「……ユエ。お前それで本当に良いのか」

オレは少しトーンを落とした声で問いかける。それに対してユエは、

「断ち切るなら、今しかないと想ったんだが……ヤン、お前は心配してくれたいだな？」

ユエは、テーブルに視線を落としてオレを見ずに問いかけた。

「あ、当たり前だろう！心配しない仲間なんて居やしない。お前は特に、抱え込む。嫌なら嫌で良いんだぞ。何も、ルカンドでなきゃいけないなんてことなど無いのだから」

オレは精一杯ユエに云い聞かせようとした。しかしユエは、逆に辛そうな顔で、オレを見た。

「終わらせなければならぬ。それに、私が此処に来たのは、覚悟を決めていたから。だから、気にしないでくれ。過去は変えれないが、未来は変えられるのだから……」

それが、前向きなユエの考えなら、オレだっ賛成したい。でも……
「ルカンドは、五歳の時以来殆どその町の者との干渉は無い。私を見て判る者も居るかも知れないが、それは覚悟の上だ。だから、心配しないでくれ」

ユエは、オレを安心させるために、笑って見せた。それが、辛いんだ。

オレは、グリーズコートへの復讐を決めて騎士になった。そして、今でも、その復讐の念は変わらない。オレの殺された両親。そして、この村の人々への愛にも似た感情。此処まで復興させたことだけでも凄い事なのだ。だから、憎むべきグリーズコートはオレが生きる

ための敵として心を燃え立たす。

でも、混血であるユエを友に持ったオレにとって、これが本当に正しいことなのか？その疑問が心の何処かで燻らせる。そう、友人だからこそ踏ん切りがつかなくなっていた。

「ヤン……」

「何だ？」

「私は、後悔はしていない。お前はお前の道を往け。それが私の願いだ」

心の中を読まれている。そんなにオレは顔に出していただろうか……そんな顔を見せては駄目だ。判ってる。だけど、踏ん切りが……「私を信じられないか？」

オレはその言葉で深い情から目を醒ました。

「判った。ユエ、お前を信じよう」

ユエは、本当に覚悟を決めていると視線をオレに向けた。こんなユエをオレは無視出来る訳が無い。それがお前の往く道なんだな。ならオレも、それを受け入れよう。

それから、オレ達は、詳しいルカンドの内情を話し合ったのである。

私は、ヤンに心の内を曝したくなかった。

確かに、私を見知った者は多い。この髪、この瞳。あの事件は、私が引き起こした。そして、その贖罪を、ヤンに話してしまった。それで、全てが洗い流せるなら……そう想った。だけど、運命は、私の故郷ルカンドを選んだ。

それは全て私に、その代償を払えと云っているかのようであった。きっと、これは縁なのだろう。それを自分の身で購えと云う。

そう、私は自分に、そして、自分の過去に勝たなければならぬ。今度こそ逃げたりなど出来ない。なら、手を広げてそれを受け止めよう。そう、それが私の運命なのであるのだから……

だから、ヤンが気に病むことは無い。こういう機会をくれたのだ

から。逆にありがとうと云わなければならないのだ。

この闘いが。そして、決着がヤンにとっても私にとっても区切りなのだ。

そうしたら、ヤンに云おう。心からの言葉を。

そんな私達の心は、もう、ルカランダへと飛んでいる。そして、それぞれの想い、そして、考えを乗せて、明日は来る。それは、全ての用意が出来た当日は、慌しくやって来るのであった。

「はい。翼竜はこの通り準備できてるわよ！それぞれ自分の持ち竜に乗ってね！」

厳つい、翼竜のゴツゴツした鱗。そして、ギョロつとした大きな瞳と大きな足。その爪は鋭く尖っている。ミネルバ以外の皆が圧倒されたのは云うまでも無い。

「さあさあ、乗った乗った。これで一つ飛びでルカランダへと進めちやうんだから！」

よくよく見ると、翼竜の体の色が微妙に違う。基本、緑色なのだが青みがかっていたり、黄みがかっていたり。

そんな竜の首に、名前が刻まれたプレートが有る。それには数人ずつの名前が刻まれていた。

「おい、ミネルバ。この名前って、ペアで乗る事になるのか？」

オレは何だか嫌な予感がしたので、問いかけた。

「人数分用意出来なかったのよ！それに翼竜は二、三人乗る事なんて造作ないことだし良いじゃない？で、あたしのペアは、ベンジャミンよ！」

オレは、それは勘弁。と想い逃げようとした。しかしミネルバはその腕を取り上げると、

「失礼しちゃう！何もしないわよ。しても良いけど我慢するからね？」

ああ、ミネルバの悪い癖が出ている。何でも自分の想うとおりにならないと、この世界は間違っていると云う思考の持ち主だ。

「あ、別にミネルバが嫌だという訳じゃ無いんだが、ほら。男は男同士、女は女同士の方が良いだろう?」

あたふたとオレは云い訳をしようとした。

「えゝそっちの方が変だよ」と云うか、ベンジャミン? ユエって人と乗る気じゃないでしょうね」

それはそのつもりだったのだが、

「凶星。そう、そんなにあの女が良いの? ふゝん。なら、あたしがユエって人と乗るから

」!

うわっちゃゝ。それこそ勘弁。こいつと一緒になんてユエの神経に障る。だからオレは、

「判った。この通りにしよう……」

渋々、従う。そして、それぞれのネームプレートになる翼竜に乗り込んだ。

「向うは、ルカンダ! 皆、しっかり翼竜にしがみついてるよ!」

オレは、ミネルバの後ろに乗り込むと、そう云い放った。

ミネルバは、首から提げている笛をピューイと一吹きする。すると、大きな翼を広げ、竜は空へと羽ばたいた。

それから、腰につけている鞭をミネルバは巧みに操りオレとミネルバの乗った翼竜は南へと方向を変えて飛び始めた。

その後に続くように、皆を乗せた翼竜は付き従ったのである。

オレはミネルバと。ユエは、アーイシャ。リケルとエドとルシー

ド。この組み合わせで、飛び立った。全部で三頭の翼竜。それは、上昇気流をも上手く乗り切り切りどんと進んでいく。

「そろそろ、方向を変えなさい。ミネルバ」

後方を飛んでいる、アーイシャがそう叫んでいた。

「どうしてだ?」

オレは振り返った。そう、このまま南に進む方が早くルカンダに着く。

「グリーズコートの結界は、空にも及ぶからです。ほら、この通りですわ」

アーイシャは、背中の弓を取り上げると、それを扱い、矢を前方に放った。

その矢は、鋭く真っ直ぐ飛んでいった。それは、ある地点に辿り着くと、光を発して、火炎を起こしたのである。

「うわっ……ミネルバ、方向変えろ！この結界はどうなっているんだ。アーイシャ！」

こんな結界を空にまで張っているとは、グリーズコートは何を考えているのだろうか？魔法の力というものにゴクリと生唾を呑んでしまう。

「グリーズコート自体を取り巻くのかのように張り巡らされてるのだと、聴き及んでおりますわ。従って、ここから暫くは西を。時々わたくしが弓を放ちますからそれによって方向確認。そして見た目にも判ようになるので、それにて判断をしていただければ宜しいかと」

アーイシャは、平然と云つてのける。彼女が指揮官で良かったと想わずに居られない。心強い。知識と云う物は、大切なのだとオレはこれ程感じ入る事は無かった。

そこから先は、アーイシャの弓とミネルバの翼竜操縦で南へと進む。それは、実践的にオレ達の成果を発揮している序幕であった。

「ユエさん。あなた、グリーズコートとどういう関係なのでしょう
か」

弓を放つ必要も無くなり後は南に進むだけとなったそんな時、アーイシャは、私に問いかけてきた。

私は、その言葉に驚きを隠す事ができなかった。それもその筈、彼女はミネルバのあの時の言葉に反論をしたからでもあったからだ。それを今更何故に問うのであろうか。

「困らせるつもりで云っている訳ではありません。そう。わたくし

は、ユエさん。貴方を信じておりますから」

それは一体どう云うことだろうか。信じている……ヤンが仲間として連れて来たと云う事で信じられると云っているのかもしれないと、そう判断してみた。それが一番妥当だ。

「ヤンが、わたくし達を危険に曝す訳は無い。それに、貴方は、グリーズコートと関係が有ると思われませんが、気の持ちようが違うように見受けられます」

やはり、ヤンを信頼していると云いたいみたいである。そして、私をも受け入れていると判った。

「おっしゃるとおり。私は、混血^{ハーフ}です。その事は、ヤン以外にこの皆さんは知り得ません。それでも、アイシャさん、貴方は受け入れられるのでしょうか」

私は、こんな時にしか話せないだろうと、心を改めてそう問いかけた。

「受け入れます。貴方の事は、少しだけ存じておりますから。それでも、情報に関してはかなり精通しております。そして、これからの貴方の身の振り方が、この戦の要になるとわたくしは感じておりますゆえ」

アイシャは冷静だ。そして、情報と云うものを、かなり駆使している。

私のことを何処まで知っているのか。このような時代でそれを知り得るとは……とも思うが、隠し切れないものでも有る。噂は如何様にも伝わるものであるのだから。そして、何を知っているのか。それは判りかねるが、アイシャにとって、不利にならない。得る物が多いと云う事なのだと推測できる。

「そうですか……」

私は、一言そう云っておいた。アイシャは何かを考えているらしく、その言葉には何も反応を示さなかった。

私は、それで充分だと想った。

#13 ルカンド

南の町、ルカンドに着いたのは、夕方であった。この町は、温暖であるがため、冬でも防寒具など必要は無い。私達は、直ぐ様服を着替える為に近くの宿屋を探す。外の戸口に掛けられた、宿屋の木彫り看板を目印に。

しかし宿屋と云っても、大通りに沿って一つ二つ在るかだろうか？ そんな町だが。

その内の一つ、気軽に泊まれそうな小さな宿屋に入る。

「とにかくこの宿屋で服を着替えて今日は休もう。明日から本格的に移動を開始する」

ヤンは、リーダーとして統率するために、そう云った。

南の町は、北のヤンの村とは違い夜が長い。飛び立つ前、そう、つい先ほどまで朝だった。

しかしもう夕方になっている。これが時差と云うものであり、北と南の違いであると私達は感じずには居られなかった。

もしこれが、自らの足で歩いたと云うのであれば、そこまで感じないだろう。それ程に、翼竜は役に立った。今は、ミネルバの指示があるまで、他者に迷惑が掛からないことを念頭に、翼竜達の好きなように遊ばせているらしい。

ここ、南の町、ルカンドは広い敷地を持っている訳ではなかったりする。それなりに、町として活動できる、赤レンガを敷いた道。そして、まばらではあるが、その煉瓦道に沿って、木造建築の家が建っている。

私はその風景を懐かしいとも思うが、それよりも、緊張感が走る。この道をずっと下って、そこを右に。そこからひたすら歩けば、私が住んでいた家があった場所がある。

しかし、その家はもう無い。そう、私が焼いてしまった。両親と共に……

「何を考えてるんだ。ユエ……」

ヤンが声を掛けてきた。きっと私が、皆が宿屋に入ろうとしているのに、町並みを佇んでボーッと見ていたからだろう。

「少し此処を想い出そうと想った。明日から必要だろう。考えてみれば、十年近く離れていた。町並みも変わっている」

私は、今の自分の意識を他の皆に触れさせるのは間違いだと改めなければならぬ。その事に、少なからずヤンは気付いた。だから早く休もうとヤンに云う。そう、それがこれからの私にとっての試練となっていく。

何処まで自分が耐えられるだろう？それは判らないが、もつと毅然と振舞おう。それが、私の、これからの有り方なのだから。

「宿主、申し訳ないが、部屋を明日までの間借り切る。人数分借りられるか？」

オレは、戸板で出来た簡素なカウンターの所まで進むと、宿主である真つ白な髭がトレードマークのお爺さんに問いかけた。

「人数はと……七人のう」

そう、お爺さんは首を縦に振りながら数えると云った。

「ええ。そうです。宿代は如何ほどに？」

お爺さんは、オレの顔を一度眺めてから、腰に設えている剣を見た。

「騎士殿ですか。なら安心してお貸し出来ますわい。そうですね。お一人一泊、五グース。ですなあ」

皆、手持ちの財布を取り出すと、数える。一ヶ月泊まっても充分余りある。皆頭を縦に振った。それに、此処に決めたのである。

「朝食にスープは如何ですか？」

「サービスかい？」

オレはここぞとばかりに朗らかに笑って問いかける。

「そうですわい」

「勿論、頂くよ」

オレ達は、教えてもらった部屋、二階へと階段を上っていく。ギシギシ揺れる階段だ。でも、休むだけなら充分だろう。明日から本番だ。それに見合う宿だと想った。

「じゃあ、個々で自由に休め。明日は朝日と共に出発する予定だ。リケル。薬草を積むのは、明日の早朝でも今日でも構わない。自分のペースに合う様にしておけよ」

そう、此処に来て一番の問題。薬草博士の個人的趣味として、動き回りたい所であろう。他の誰も、動くことは殆ど無いだろうが、リケルにはその可能性が高い。

「うん。その辺りは考えて行動させてもらうよ。えと、ユエさん。一緒に着いて来て貰えないかな？この辺りに、シータと云う薬草があると想うんだ。一緒に探して貰いたいなと想って」

リケルは、この辺りの地理に詳しいユエを名指した。オレは当然の事なのに、一瞬動揺しそうになる。しかし、ユエは、何時かこう云う事になるのではと覚悟していたらしい。スツとオレの前に出て、

「良いですよ。リケルさん。お供します」

何事も無く頷いていた。表情も柔らかい。リケルだからこそ出来る業なのか？それとも、ユエ自身、振り切ってしまったのだろうか。否、もう覚悟は決めてるんだ。後は、ユエに任せよう。

そう、これはユエの問題なのだ。オレがどう云える立場なのでは無い。

「それじゃ、着替えたら部屋の前に居るから、声を掛けて下さいね。ユエさん」

リケルはにつこりと笑うと、好奇心旺盛にベコベコと音のする扉を開き閉じて中に入って行った。オレ達も、自分に宛がわれた部屋に入り寛ぐ。そう、今日は何事も起こらないそんな気持ちを胸に抱えて。

「シータ……そのような薬草がこの辺りにあるのだろうか。私は初耳だが」

私は、薬草にそこまでは詳しくない。少しだけ、祖母意教えてもらった事は有るが。だけどそれはもう想いでの一つとなり、私は只、道案内だけは出来るのみである。

「温暖な土地。ルカランダ地方って書かれてるんだ。で、程よく湿気がある、草原のある丘らしい」

と、本を持って歩く辺り、リケルは本当に薬草薬を極めてしまいたいらしい。

この辺りで丘がある場所。それは、ルカランダとグリースコートの境にあるタズナと云う丘しか想い浮ばない。そこに向うには、暫く歩く。

「なら、タズナだろう。で、どういう効用があるのだ？」

薬草ならば、効用が無ければ意味が無い。

「これを燃やした時に、その煙で相手に幻覚を見せると云う代物なんだ。戦闘するには、こう云うのも必要かなと想ってね」

なるほど。薬草と云うより、紫乱みたいなものか。薬草も奥が深い。只治療するためだけではなく、攻撃に用いる為に使用する。それもまた有りなのか。

「この道を真っ直ぐ行つたところにその丘がある。行つて見よう」

私は、促した。リケルは本を眺めながら、「はい」と云った。本当に好きなのだな。調べることが。私は少しだけ微笑ましく感じられた。

タズナの丘に登ると、少し風を感じた。吹き抜ける風が、肌に心地よい。過去はどうあれ、懐かしい匂いがする。ルカランダの、乾いた空気と町の匂い。

此処に来るまでの間、見知った者と遭遇することはなかった。それで良かったと安心したは良いが、あの頃と変わらず人々の溢れん

ばかりの生活力を感じた。それが私にとって救いのように感じられた。

さて、後は、シータを探すのみ。湿気が多い所となると、影が出る場所だろう。そう思い、木々が立ち並んでいる辺りを探す。

「リケルさん。有りましたか？」

私は、本にある絵を元にそれらしき物をいくらか取り上げて、持ち寄った。

「うーんと、似てますが、違いますね。木の実の様な匂いとなっていますから」

リケルはその草の匂いを嗅ぎ分けているみたいだ。

それだけで判るものだろうか。私も嗅ぎ分けようとやってみたが、全く判らない。こういうのは専門家に任せるべきだろう。

「ボクはこちらを探してみます。ユエさんは、そちらを」

もう、太陽も地平線へと隠れようとしている頃である。そう、時間はかなり掛かった。でも、収穫は有った。リケルはそれを手柄であるかのように、大事に腰にかけているバックへと仕舞った。私もほっとした。そして、夜になる前に、この場から立ち去ったのであった。

歩いて戻る道程。既に夜となっていた。星々が夜空に埋め尽くされ煌いていた。辺

りは静かだ。まるで、人が居ないかのように。

この地方は、夜は静かである。休む時間が早いから。それは今でも変わっていないかった。

この世界を壊したくは無い。だけど、グリーズコートの全てを否定も出来ない。

それは、私の祖母との思い出の場所。

それを、この夕方、薬草を摘みながら、そんな思い出も有ったなと思い出したのも手伝った。

如何すれば、このアイーラは一つになるであろう？否、そんな事は不可能なのか？

私はそんな事を密かに考えてしまった。

そして、無事宿屋に戻ると私とリケルは、「おやすみ」

を云って各自の部屋に戻って身体を休めた。明日からの死闘となるであろう戦の事を考えながら……

朝は、清々しい晴天に見舞われた。それは、これからの復讐劇に相応しいとは云えないが、気分的には、晴れやかである。そう、勝利へと導く天候だとオレは感じた。

オレ達は食事を済ませると、宿主に「ありがとう」と云い荷物を抱えて目的の道を探す。

「ユエ。此処からどう行けば良い？結界を抜けられるのは、お前の祖母の家に繋がる」

オレは、こっそりと問いかけた。

「勿論そのつもりだ。その為の、道に行くつもりだからな」

ユエはもう既に云わなくても判っていた。それもそうだ。この話を受けた時に、判っ

ているはず。オレも要らない事を云ってしまったものと、苦笑いした。しかし、ユエは気にはしていないらしい。

「此処から先は、どう行けば良いんや？」

そこで、すかさず問い掛けたのはルシードだった。

「それは私が案内しよう。この辺りで、一度グリーズコートの領地に迷い入ったことが有る。その抜け道を行こう」

ユエは、皆の前に立つと、こちらだと、先導する為にスタスタ歩き始めた。

それは、太陽を背に北へと進む。赤レンガの大通りを真っ直ぐ下り、そして左に折れた。

その先には、翠の小高い山が遠くに見える。左右に草原が広がっていた。

その草原にポツリポツリとまばらな位置に、家や小屋らしき物が見えた。タナーシャの村とは打って変わって、此処には生活感が存

在していた。

そんな時、突如後ろから子供の声が聴こえた。

「待って！お兄ちゃん！」

女の子の声だった。直後、オレの足に何かがぶつかった。

「いたっ！」

小さな男の子が、オレの後ろで転んでいた。

「オイ、大丈夫か？」

オレは、その男の子の手を取り、抱きかかえた。皆は、その様子を見守っていた。

「うん。ごめん。お兄ちゃん」

少年は、ソバカスのある鼻の頭を指で擦っていた。オレは、その様子に微笑ましい物を感じた。

「家は何処だ？」

オレはその子を肩車して問い掛ける。

「直そこ。この道を真っ直ぐ行つて……ほら、あの煙突が見えるところ！」

少年は指をさした。オレは、

「じゃあ、お兄ちゃん達と一緒に行こう。このまま肩車しててやる」
「わーい」

少年は喜んで、腕をブンブン振り回した。その様子に、後ろから走ってきた少女が、

「お兄ちゃん良いな！ミーナも！」

少女は、それを羨ましいと、バタバタ足を地面に慣らして訴えていた。

「じゃあ、僕が、ミーナちゃんを肩車してあげよう」

エドが、につこり笑って、少女の背の高さまでしゃがみこむと、手を握った。

「エド、お前……ロリコンに走るなよ？」

オレは、思わず大笑いして云ってやった。まるで、これから復讐の闘いに出る光景では無いことに思わず笑ってしまったのも手伝っ

た。

それだけ今が幸福すぎるのだ。

「ヤン！莫迦云うんじゃないよ！何で僕が……人助けだろ？全く」
膨れるエドに、皆もクスクスと笑う。

そして、オレ達は、その家まで歩いて行っただのである。

しかし、それは逆にユエにとつての過去を先に暴く元凶になってしまったことを、オレは悔いる事になるのだった。

「おかあさ〜ん！」

家の近くまで来た時、少年と少女は手を振り、自分は此処に居るよと主張した。その先には、庭というのであるうか、少し草原を開拓し広場を作っている。その場所に木で支えたロープに洗濯物を干している女性が居た。きつと母親なのであろう。

オレ達は、その女性の元には子供達を肩車したまま共に足を運んだ。
「あらら、ピーターと、ミーナ。お兄ちゃん達にお世話になつていたの？駄目じゃ無い。この子達つたら……本当に済みませんね〜」

その女性は、申し訳ありません。とコクリと頭を下げた。

「いいえ。通りがかりでしたから、お気になさらずに」と、

「お茶でも中でいかがです？取っておきのお出しいたしますわ？」
にこやかに応対してくれた。すると、奥から男性の声がこちらに近づいてきたのである。

「お前、一体誰と話をしてるんだ……」

その男性は、オレ達を一眺めした。そして、ある一点でその視線を止めた。その顔が見る見る蒼白になる。

「あら、あなた。ピーターとミーナをこの方達が送って下さったの。お茶でもお出ししようかと……」

母親は、その男に問い掛けていた時、それを遮るように、

「お前……フリントの息子か……」

オレは、フリントという名にエツと自分の事を云われているのか

と驚いたが、そんな筈などない。そして、頭を切り替える。それは、ユンなのだと。

不味い……知り合いなのか！

「未だ生きていたのか……この、災いをもたらすラスキンハートの敵、悪魔め！」

男性は突如、近くに積み重ねてある薪を投げつけて来たのである。「ちよつと何をするのよ！信じらんない！」

それが、ユエの前に控えていたミネルバに当たりそうになった為、その薪を腰に装着している鞭で素早くクルクルツと受け止めた。

「お前達も、グリーズコートの回し者か！」

男は、目をギラギラとさせて、怒りを露にしていた。それはもう、何かを納得させる言葉を掛けられたものではなかった。

「あなた、何をするの！この人達は……」

母親は訳が判らないと、その男の腕にしがみつく。すると、

「そこに居る、赤頭！混血^{ハーフ}だか何だか知らんが、もう二度とルカンダには戻らないと想っていたのに……去れ！今、すぐ！」

血が上り、手がつけられる状態では無いまま、ユエを指差した。

いや、指をささなくとも、此処に居る者に、赤い頭をしているのは、ユエしかないのだ。だから、皆がユエに注目したのは云うまでも無い。

オレはシマツタと想った。が、もうこうなってしまったらどうしようもない。オレは、

「ちよつと、それは無いんじゃないか？ユエが、此処に戻ってきてはいけないうちでオレは想わない。それに、一方的な感情をぶつけるな。これから、オレ達は、そのグリーズコートに闘いを挑みに行くのだからな。それが終わってから、ユエに文句なり何なり云ってもらおうか！」

云いたい事を云ってスッキリした。

でも、そのオレの前に、ユエがわざわざ出てきた。オレは、出てくるなとそう云う気持ちでこう云い切ったのに、この莫迦が……

「済みません。私が、あの時したことの償いを、これからしてきます。そして、もう此処には戻りません。ですから、此処はお納めください……」

ユエは、地に頭をつけてそう云った。土下座。これを目の当たりにしたオレは、二の句を告げなかった。

此処にいる者達は、その様子に、沈黙する。否、何も知らない子供達の笑い声が響くのみだった。

「あなた。大人気ないわ……およしなさい。そして……」

その女性は、ユエの頭を撫でて、

「頭をお上げ下さいな。私は、此処に来てそう時間が経ってる訳では無く、あなたを見知ってるわけでも無い。でも、今のあなたに、何か出来るとは思えないわ。私達は何も見なかった。そう、此処に有るのは、ラスキンハートに吹く風。その風に乗せられた木の葉が通り過ぎただけ。さあ、お行きなさい」

そう云って、その母親は、子供達を抱えて、笑った。

オレは少しでも救われた気がした。しかし、男の方は、納得いつてない様子だった。

でも、そのままその女性の言葉で家の中へと引き返していく。玄関の扉が閉じる。その後、立ち尽くすオレ達の間、一陣の風が通り過ぎて行った。

そんなことが有り、何が起きたのか判らない状態のユエとオレ以外の仲間で一番に声を発したのは、アイシャだった。

「こんな所で、立ち止まるつもりでしょうか？わたくしは、先を急ぎたいのですが」

それは、今のオレの代弁者。そう、助けの言葉だった。

「ちよっ……でも、ユエって混血って今云ってたじゃ無い！そんな奴、この仲間の中にいて良いの？あたしは冗談じゃ無いわ！」

ミネルバは、只でさえユエを気に入っていない。その上、グリーズコート of 血を受け継いでいるという事が重なり、より、拒絶を表

していた。憎い者を見る目。それが、ミネルバの碧い瞳に揺らいでいた。

「ミネルバ。混血で有って、純血では無いだけだ。半分はラスキンハートの血を継いでいる。あなたの頭で判るかしら？それは、わたくし達にとって有利なの。頭から、グリーズコートばかりを見るのは短絡的過ぎる」

アイシャは、まるで凍った人形の様な目でミネルバを直視し、戦力を他に使えと云いたげにしていた。

この言葉は、策士のものだ。オレにはこんな云い方は出来ないし、考えない。

「僕は、かまへんで。アイシャの云う通りやと想うし、ユエはんが何をしたんかなんて興味ない。ただ、グリーズコートを叩きたいだけや」

ルシードは、あつさりしていた。只グリーズコートを叩くために来ているのだと。

その双子の片割れであるエドは、

「そうそう。一つ、気になるのは、ユエさんが、グリーズコートに寝返らないと約束できるかどうかだね？その辺りどうなの」

エドは、それを突きつけた。きつい言葉だと想う。ユエにとってグリーズコートと云う所。それは祖母との想い出も有るはず。二つの故郷。ユエはどう応えるのであろうか？

「グリーズコートに私が還るところなどない。今は、ラスキンハートで、騎士になった。居場所がこれから作る。それは、このアイラを一つにできる世界。そう想っている」

オレは、ユエがそんな世界を考えているなどとは想っていなかった。そして、この決断をいつしたのか？それさえも知らされていないかった。果然とするしかない。

「一つの世界……そんな事、出来るんだろうか。出来たら、それに越したことは無いよ。只単に、グリーズコートへの復讐を考えてたボク達に可能性が有れば良いけど……」

リケルは躊躇いがちに云った。今、オレ達は闘いに行くという気持ち。それだけで動いている。そう、その先の事など考えてなどいなかった。

「それは、わたくし達の闘い方次第。ヤン。あなたはどう想っていらっしゃる？」

ここで、オレに振ってきた。リーダーはオレだ。そして、この決断は、ユエではなく、このオレが全責任を負わなければならない。大変な事になった。そこでオレは考える。どうすれば、どう云えば、これを収められるであろうか？

ユエを考える。国を考える。そして、自分を考える。そして出した答えは、

「これは……この戦いは、^{リベンジ}復讐ではなく、^{ジハード}聖戦だ！」

そう、国の事なんてどうでも良い。そう想ってきた。だけど、この世界を、周りの考えを変えるのは、オレ達のような境遇を持った者達でなければならぬのではなからうか。

それは、周りから見たら、ちつぽけな願いや、想いであるかもしれない。だけど、今のユエに対するあの男の態度を見て、逆にそうしなければ世界は変えられないと判った。ならば、敢えてやってやるうじゃないか。

「これは、聖戦。リーダー。それで良いのですね？」

アーイシャは、静かに云った。それを望んでいるかの如く。

もしかして、アーイシャは気付いていたのかも知れない。このような事を。その為には、復讐と云う形を取るのは間違っていた。だから敢えて静かに見守っていた。負けたよ。

「ミネルバ。多数決を取りましょうか？」

唯一反対意見を出していたミネルバに問い掛ける。しかし、返ってくる言葉は判っていたのだろう。

「多数決を採る必要なんて無いわよ！あたしが求めるのは、リーダーである、ベンジャミンの言葉が全てですもん。だけど、ユエがあたし達に仇名す様だったら、その時は、あたし許さないから！」

そう云って、ユエを見た。ユエは、一段と落ち着いた表情で、それを受け止めて頷く。

「さうて、話は纏まったわ。んじゃ、道先案内人さん？この続き宜しゅうな」

ユエの肩をポンと叩いて、ルシードは、この先を進んでいく。その後に、エドが駆けて行く。オレ達の道に大きな壁が立ちはだかうと、それは受けて立ち、ぶち壊さねばならない。もう引き返せないのだから。

「ユエ。行くぞ」

「ああ」

皆が進んでいくその後をオレ達は駆け出した。

そして、二人肩を並べて歩く。そう、此処からの道は、この仲間達との約束で紡がれた。

オレは、少し見上げるようにユエを見た。ユエは、微笑んでいるように見えた。それが凄く印象的で、オレは少しだけ救われた気分になった。

#14 ユエの宿命

オレ達は、ずっと先を急ぐ。そして、小高い丘カーナという丘を超え、その先に見える森に入る事となる。

「少しここで待っていてくれないか？」

ユエが、その先の森をに目を凝らし、隈なく何かを探し始める。

「この辺りは、木々が多いな。アイーラにこんな場所が有るなんて考えられない。もしかすると、この先がグリーズコート の領地になるのかもな？」

オレは、ユエの行動を考え、立ち止まっている皆に問いかけた。

それに対して、賢明なアイシャは、こう云った。

「それは、もう判りきっているでしょう。ただ、グリーズコートは結界を張る種族。その抜け道をユエさんは探していると想われますわ」

オレはアッサリ云われて、アイシャ以外を見渡した。皆は、ああ、そうかと云う表情だったので、取り敢えずホツとした。自分だけが短慮にそう考えていたのかと想ったからだ。

そんな時、ユエがその先の森から引き返して来たのである。

「こつちだ」

ユエは、静かな面持ちで、感情を露にする事なく着いて来るようにと促す。

オレ達は、その後を着いていく。すると、森の入り口の草むらのような所に、何かの印が彫られた古めかしい板っ切れが、草の陰に隠れているが見える。

そして森の中に繋がるように草は、細い道を作っていた。それは、どう考えても這って進まなければ辿り着けないトンネルのようになっていた。

「子供の時に通った道です。そして、此处から私はラスキンハートの騎士養成所へも行きました。まだ取り壊されてないようですので

使えます」

と云う事は、取り壊す事も考えられていたと云う事なのだろうか？疑問は残るが、オレ達は、此処からしかグリーズコート内に入ることが出来ないのだ。何も考えることはない。

「なら行くか。先頭は、オレが……」

と云おうとしたが、それをユエが遮った。

「私が先頭に立ちます。殿は、ヤンが受け持つてくれ」

何が起こるか判らない。そう云う神妙な顔つきだったのでオレは、ここはユエに任せようと想い、

「じゃあ、ユエが先頭に行く。続く者は続いて行け。で、オレは殿を勤める」

こうして、その草の穴を潜って先に進む事になった。それは、何処まで続くのか？と想えるほど、遠くて暗い穴だった。この先に在るグリーズコート。その隠された門を潜った。そんな気分だった。

この穴をラスキンハート側から通ったのは、祖母が迎えに来てくれた時だけだった。

そう、無意識とはいえ家を焼き、両親を殺してしまった私。その後始末を、ラスキンハートは、グリーズコート側に押し付けた。

年に幾度と有る適例行事の際、官吏が、グリーズコートへと赴くのだ。その合間を縫って、祖母との連絡はなされたらしい。

詳しくその内容がどういった物だったのかを私は知らない。だけど、身柄をそのまま引き渡したと云う事は、もしかするとその影に隠れているのは、あの、騎士養成所の校長の存在なのかも知れないと、私は想う。

そう。あの校長。確か、名前はマクベスと云っただろうか？

グリーズコートまでやってきて、私をラスキンハートの騎士に成るようにと云った。そして、今、その私はここ、グリーズコートへと向い、聖戦を挑もうとしている訳だが……それを、あのマクベス校長は、望んでいたのだろうか？それが、今この草道のトンネルを

這いずっている私の頭を過ぎっていった。

何時間経過しただろう。それは長いトンネルだった。腰を曲げてズリズリ匍匐^{ほふく}前進するオレ達は流石に疲れ切っていた。慣れない事だから余計感じる。

その上、前から、

「ちよつと、今あたしのお尻触ったでしょ！リケルのスケベ！」

何て怒りの声さえ聴こえて来る。全く何と云うチームワーク。それでも、前方から薄明かりが射した時は、皆が感嘆の声を上げた事は云うまでも無い。

「やつと着きおつたで〜！」

特にルシードは、未だ着いてもいないのに、喜び勇んでいた。武道家ですか、キミは本当に……オレは苦笑いしそうになる。

それでも、確かにこの姿勢は辛い。でも、安心など出来ないであろう。この先にあるのは、未知の世界であるグリーズコートの内部だ。知っているのは、ユエしかない。そう、他の誰も、この先を知らないのだ。ましてや、グリーズコートの人間という者と話したことさえも無いのである。

オレはゴクリと、喉を鳴らす。それは、緊張感からであり、興味とはまた違っていた。

「さあ、着きましたよ」

その場所は、ラスキンハートとは全く違った世界であつた。光を遮断した世界。森の入り口とは全く別の世界だった。

でも、草で出来たトンネルよりは明るいのかもしれないとオレは思った。

「何で、こんなに暗いの？」

そう云ったのは、リケルである。リケルの目には、この暗さが恐怖として捉えられたらしい。

いや、他の誰もがそう感じたかもしれない。

「グリーズコートは、結界を張っているため、太陽の恵みが少ない国なのです」

ユエは、説明をした。

「その代わり、魔力を持つて、その暗さに光を灯すことが出来る。それに不思議なことだが植物達も、この世界に対応出来ている」

で締めくくられても困る。納得が出来ない。何故、結界を張らねばならなかったのか？オレは疑問を感じた。

「ユエ。あなたも、魔力が使えるのでしょうか？」

オレはドキツとした。訊いてはいけない事だから、絶対に避けようと想っていたのに、アイシヤは、平然と問いかけたのである。

「簡単なものであれば」

でも、それに対してユエは問題が無かったのか、平然と応えた。

「とにかく光を灯しましょう。私の周り、五メートル範囲に皆さんいて下さい」

そう云うと、手を上に翳した。ポツと音が聴こえると、掌から光の玉を出し、ユエはそれを上方に放り投げた。すると、半径十メートル位だろうか？ドームのような光の膜が出来た。そして、周りが見渡せるようになる。

「流石、混血よね。魔法なんて物が使えるなんて気味が悪いわ……」

そう云ったミネルバは、オレに抱きついてきた。全く、何とまあ判りやすい拒絶の仕方であろう。オレは、ミネルバの腕を解いて、ユエの元に行く。

「で、どうするんだ。此処から」

「ひとまず、こうやって魔法を使っていれば、グリーズコートの間は、仲間だと想う。それを、逆手に取るしかない。こちらは少数なのだから。だが、此処にいるグリーズコートの者達全てを相手にするつもりなのか？その辺りが今後の問題だと想うが」

そう。オレ達は、今では此処に聖戦を持ちかけようと想っている訳だ。しかし、それは全ての者と交わるべきであるのか？敵の本体と云うものが知りたい所だ。

「グリーズコートを統括している者は何処にいるのでしょうか？それに応じてわたくし達は動かないといけない」

アーイシャは、オレの代弁をしてくれた。それも忠実に。

「グリーズコートの中枢部。そこが、全ての統治下に置かれている場所だとして私には判らない」

ユエは、知っている限りの事だけを云っているようだ。と云う事は、それ以外は何も知らされていないと云う事なのであろう。此処から先は出たとこ勝負なのだ。

「まず、腹ごしらえでもしませんか。私の住んでいた家が近くに有りますから」

たった今、オレのお腹が鳴った所だ。そう、それを配慮して、一時休憩に入ろうと云う事なのであろう。

「そうして貰えると、凄く嬉しい。他の皆はどうだ？」

それに関する答えは訊くまでもなかった。

「さんせーい！」

一致の答えが返ってきたのだから。

この家に戻ってこようとは想つてもいなかった……

祖母と暮らしたこの家。出て行った時のまま寸分変わっていない。いや、少しだけ埃が積もってしまったか……

私は、頑強な玄関のドアを魔法を使って開け、中に入ると、まず、皆を居間に通した。居間と云っても、絨毯代わりの布の上に、テーブルと二つの椅子しかない狭い空間だ。

そして、装飾となる物といえば、奇妙などこか悪魔をイメージさせるお面に、祖母が大好きだった、ドライフラワー。そして、木彫り人形。それが有るだけだ。

「そこで少し休んでいてくれないか。何か見繕つて来よう」

出て行った後、還る予定など無かったため、貯蔵としている食物など無い。

仕方なく、裏庭の木に生っている林檎と、畑の自然野菜類を取り

に行った。

そして、軽く炎をであぶった野菜炒めと、林檎魔法で絞り、林檎ジュースをそれぞれ器に入れて、皆に出した。

「これを食べ終わったら、少しグリーズコートについて、調べたい時間を貰えるであろうか？」

私は、祖母の書斎に入ることを考えた。

そして、みんなの賛同を受け、そこで調べ物をすることになる。

その間、ヤン達に、この旅の疲れを癒して貰おうと、休めるベッドのある部屋と、この居間を提供した。

その後、直に私は行動を開始する。

祖母の部屋は、部屋の一番奥にある。私は一度も入った事など無い。それは、堅く禁じられていたからである。だから、入る前に、亡き祖母に「入らせていただきます」と言葉添えをして、中に入った。

中は、小綺麗に片付けられていて、本棚には、隅から隅まで本がぎっしり詰っている。

祖母の性格をまるで示しているが如く感じられる。

そして、壁の周りに掛けられている額縁の肖像画。

私はその絵が母であるのだとすぐに判った。額縁の中の母は、あの頃のままきちんとそこに居た。それが凄く私の心を締め付けた。私が殺してしまった……と、またあの時の感覚が戻りそうになったが、今それを悔いてもどうしようもない事を悟る。そして心してもう一度その絵を見た。

その絵は、少し色褪せていた。十年の年月を感じさせるものだ。それを祖母は私に見せられないものだと思っただけだろうか？そう考えると、祖母の心にあつた、私に対する愛情を感じる。優しくかった祖母。その温かい笑顔は今でもハッキリと想い出せる。

でも、こうして感慨に浸っている場合では無い。そう、グリーズコートに関するものを、洗いざらい調べなければならぬのである。

のだから。

まず、本棚を漁った。グリーズコートに関する資料となる本を。それらを合わせ、共通する事は、^{スカアハ}獣神を讃えることにより、魔法を使うことができる。

魔力を吸収し放出する力。それは、獣神が住まわすこの国の中枢部である塔に関係があるらしい。通称この塔の事は、ルーンと云う。その塔から発せられる魔力が、このグリーズコートの結界を作っている事が判った。

それに比べ、ラスキンハートにはそんな神は存在しては居ない。否、信仰はある。^{ルグ}気神は万物を豊かにする神。そして、闘神。だが、この世には存在していないのだ。

この不可解な双方の違い。それに神は、信仰を深める物であると云う認識が強い私にとっては、解せなかった。

神は居るのであるうか？

それは、その塔に行ってみれば判る事。そう考え、グリーズコートに関する調べ物は終わった。

後は、詳細なグリーズコートの地図を手に入れなければならない。そう想つて、本棚に設置してある引き出しを探った。

地図は、程なくして見つかった。私はそれを祖母の机に広げた。今自分が居る場所を探す。南に位置するであろう場所。それは、祖母が既に。を付けていてくれたので判った。

此処から、中枢部に向うには？そう考えて、地図を見る。しかし、このグリーズコートは、まるで迷路である。

所々、祖母が描いたのか、矢印が色んな方向に示されていた。町や村自体が移動空間になっているようだ。これは魔力で作られており、動いているのであるう。よって、この地図は無効。当たりにするしかないのだ。それは、この通りとは限らないからでもある。

「何なのだ、これは……町や村が移動だなどと」
混沌としているこのグリーズコート。

私はこの家から外に出る事が無かった為に、初めて知り得たことが多すぎる。

これを、ヤン達が見たらどう想うであろうか？そう、聖戦よりも道を探すことで力を使い果たしそうだとか云いそうである。それは私も同じこと。無理なのではなからうか？だ。

そして、私は、その地図を騎士訓練所で頂いた制服の胸元に仕舞いこむと、祖母の机を調べる。

もしかすると、祖母は何か重要な何かを書き残しているのではないだろうか。と想ったからだった。

机の上には何も無いので、私は、引き出しを探った。すると、たった一通の封筒がそこに有った。その封筒の宛名は私であった。

「私に宛てた手紙？」

それは、ひっそりとその引き出しに仕舞われていたのである。

何故、直接私に渡さなかったのでしょうか？いや、口伝えでもいい筈だろうに。

私は、その封筒の封を切ろうとした。が、それは魔法で勝手に開いた。

「私以外に見せれないもの……だったのか」

そう。これを手に出来るのは本人のみ。そう云う種明かしがこの手紙には施されている。もし他の誰かがこの手紙の封を解こうとするならば、その者は只では済まない。そう云う仕組みである。

一体何が書かれているのであろう？私は、その中の手紙を取り出した。

三枚にわたる手紙。それはグリースコート文字で書かれていた。

一応私は、グリースコートの文字は理解している。その為読むことが出来た。此処に来てからの喋れなかった私の読書は、こういった文字で埋め尽くされていたからである。

そして、その手紙には次のように書かれていた。

『わが愛する孫。ベンジャミン・プリントへ』

この手紙を読んでいると云う事は、私が既に、黄泉の（グメ）^マ国^{ルド}

へと招かれた後でしょう。そして、このグリーズコートに、剣を向ける時。

それは、私が、騎士養成所へと話を持ちかけるようにと勧めた、マクベスとの約定が有るからです。それをあなたはきつと受け、自らの道を見つけたはず。そうなるはずだと信じています。

ベンジャミン。あなたは、ラスキンハートと、グリーズコートを統治する為に働く事になるでしょう。それは、善悪なく、必ず訪れます。そう云う運命の下に生まれた人間なのですから。

それは、フrint氏と、わが子レイラとの結婚が決まった時から決まっていたのです。

そう、この結婚を許したのは、私自身の役目でもありました。そして運命は紡がれた。その結晶がベンジャミン。あなたなのです。

このグリーズコートを変える為にも、あなたと云う存在が必要不可欠だった。過酷な事ですが、あなたにそれを委ねました。

私は愚かしい人間でした。だけど、そうすることに意味がある。そう信じたい。それを受け入れることを、あなたに強要できる訳でも無い。だけど、そう願わずにはいられなかった。それが、私の罪だとしても。

グリーズコートは、過去を断ち切れない人間が住まう国。そして、変化を常に求めています。その精神が、ラスキンハートを脅かす。

しかし、ラスキンハートは、それを好まない。そう云う人間が殆どであるため保守的なのです。その為グリーズコートが、戦火をもたらすと云う行動に出してしまうのを、私は止めたい。その事を踏まえ、元同士、マクベスにあなたを託しました。

彼は、色とりそりしをしたでしょう。過去のあなたが引き起こした事件で、あなた自身が傷ついた。だからそれを断ち切る人物を。その者が、あなたにとっての将来大切な者になります。かけがえの無い者。私とマクベスのような関係に。

ただし、一つだけ忠告をしておきます。このグリーズコートでは、剣を振るいなさい。魔法は控える事。それは、あなた自身を破滅へ

と追い込みます。そう、戦いの場においては特に気を付けるのです。闇が……負の力が注ぎ込まれる事になりますから。

その為、私は、あなたに魔法を教える事なるべく禁じていました。興味を持たないように。それは、必要の無い力であるのだから。

ベンジャミン。あなたの今後の成長に期待しております。そして、このアイーラの未来と共に。

祖母である、ルースより愛を込めて』

私はこの手紙を読み、初めて自分の宿命と云うものが何なのか、判った気がする。祖母が、父と母の結婚を許した訳。それは、アイーラ自体の未来を考えての事だったのだと。

祖母と、マクベス校長の同士と云うのは、その考えを持った同士と云う意味だったのであろうか？でも、彼女達の間にはそれ以上の繋がりを感じさせていた。でも、それは伏せられている。祖母の『かけがえの無い者。私とマクベスのような関係に』と云う言葉で、それは否定された。私は、祖母のように、女性では無いのであるのだから。

マクベスが、リサーチをしたのはヤンだ。ヤンを同じ寮の部屋に配属し、私にその傷

を塞がせる。そう目論んでいた。

その背景に、ヤンの過去というものが組み込まれていたかは謎ではあるが……

ヤンは正直者だ。嘘が付けられない性格である。だから、この事をヤンは知らないであろうと私は考える。

偶然が、必然となったのは、運命。それは、喜ぶべき事なのだろうか。少なくとも、私が救われた事には変わりがない。だから、祖母の裏工作を、恨みには想っていない。むしろ感謝すべき事なのだろう。

例え、過酷な運命であっても。

それから、このグリーズコートを移動する手段を調べた。かなり厄介であったが、何とか調べる事ができた。これで殆ど必要な事は調べられただろうか。

そして私は、腰から下げている剣を握り締める。ラスキンハートの紋章を刻んだ、少しだけ改良しておいた剣を。

私は騎士。そう、正しき事に命を懸け、剣を振るべき者。祖母の云うとおり、魔法は使わない。それを心に止めたのである。

ヤンの奴遅いな……

その頃のおレ達は、既に休息していた体を正し、旅を始める仕度を済ませていた。そして、後はユエがこの場に戻ってくるのを待っていた。

「ちよつとベンジャミン！ユエ。逃げたんじゃない遅すぎるわよ！ほつといて行こうよ」

痺れを切らしていたのは、ミネルバであった。他の皆も、そう想っているのかも知れないが、落ち着いて待っていた。

「もう直来ると想う。それにユエが居ないと、このグリーズコートは攻略できない。待て、ミネルバ」

オレは、当然の事を云った。それに関しては、アイシヤも同様なのだろう。

「少しは落ち着きなさい。あなたが急いでも何の変化も無い」

きついお言葉。それにしても、本当にどうしたのであるう？オレは、チラリ奥の部屋に向かって目を見張った。

すると、奥の部屋から、ユエが扉を閉じて出てくるところだった。オレと目が合ったユエは、

「遅くなった……済まない」

そう云って、居間へと足を運んでくる。

「何か判ったか？」

その言葉は、これから先に繋がる事でも有ったから、慎重を期した。

「それは、みんなの前で話そう……」
ユエは考えを纏めるためにもそう云って、居間へと向かった。オレはその後を着いて行った。

15 移動鍵

「このグリーズコートは、云うなれば、移動要塞のような町、村で成り立ってます。地図を手に入れました。これがそうです」

ユエは、懷からその地図と云うらしきものを、取り出し、テーブルの上に広げた。

「この。が刻まれている所が、今私達が居るこの家です。そして、中枢部。が、此処。グリーズコートの中央に位置している、ルーンと云う塔です。で、町や村を見ていただければ判ると想われるのですが……」

それは、あっちこっち矢印を記した細かい物であつた。

「この移動方法を知るには、如何すれば良いのでしょうか？」

策を考える立場であるアイシヤは、珍しく困つた顔をした。それもそうだ。こんな細かい移動をする訳の判らない町や村などお手上げた。オレの頭では混乱しか起こさない。

「移動鍵^{ポト}を踏めば良い。但しそれを探すのが困難だろう。村や町のどこかに存在するグリーズコートの紋章を探さなければならぬのだから」

また凄く時間^{てま}の掛かりそうなことを……

オレは、愚痴りそうになつたが、これがグリーズコートなのだと自分に云い聞かせてみた。

「紋章やて？どんなんや、それは！」

そうそう、ルシードの云う通りグリーズコートの紋章など知らない。

「古代魔法に使われたルーン文字を組み合わせで作られた、円形の紋章です。例えば、こんな感じの……」

ユエは、その紋章を皆に見せる為に、わざわざその絵をテーブルに直書きで描いて見せてくれた。

「何か複雑やな。何かを模^{かたど}つとると云うわけでも無いし」

ルシードは、ラスキンハートのように、^{ルゲ}氣神を模った紋章とは違う所から、その言葉を発したに違いない。オレも、その紋章と云うものを見て、何かのマークとだけしか認識できていなかった。

でも、考えように依ったら、円形をしているのだから、ルーン文字というそんな物は関係ないのかも知れない。そう、円の中に複雑な線と、字が書かれている。とそう考えれば、判りやすのだ。

「ルーン文字。それを聴けて良かったですね。確かルーン文字は、このアイーラの古代から続く伝統的な魔法文字。ルーンとルーンを繋ぐには、ルーンを。ですわね」

アイイシャは、エドの方を向いて、

「その豎琴。貸していただけるかしら？」
と云った。

「え？これか。良いぜ」

エドは、この豎琴が何なのかと云いた氣に背中に背負った袋ごとアイイシャに手渡した。

アイイシャはその袋の中から豎琴を取り上げると、テーブルに置く。そして、その豎琴をポロローンと、鳴らしたのである。

するとどうだろう。その豎琴と、さっきユエが描いた紋章の描かれたテーブルが振動でガタガタと揺れ動き、共鳴したのである。

「やはりそうなのね」

オレは何がやはりそうなんだろうと、アイイシャに聴きたい所だった。が、

「この豎琴に刻まれている文字は、ルーン文字。必要なのは、ルーン文字という訳なのか……」

ユエは、ハッと氣が付いた様に云った。俺にはその意味が判つてない。何処にそんなものが？と、豎琴の木の杵を見た。すると確かに文字が刻まれている。

「これが、ルーン文字？へーそうだったんだ。僕、氣にも留めなかった。只の飾りかと想ってたぜ」

エドはあっけらかんと云ってくれた。持つてる本人がこれだから

な……気付く訳がない。

だけど、アーイシャは気付いていたのか。本当に頼りになります。姉御！

「それでは、これを使って、紋章を探すと云う事になるのですか？」
リケルはその後を紡ぐ。そう、そう云う事になるであろう。その為には、この豎琴は、必要不可欠だ。しかも共鳴を起こしてくれるとなると、判りやすい。

「エド。あなたがこれを弾きなさい。その間に、わたくし達が、共鳴先を探すことにしますから……：そうですね。眠りを誘う曲でも弾いてもらえるでしょうか？」

アーイシャは考えられる事を考えて云っているらしい。オレにはチンプンカンプンだが。

「眠りを誘う？なんで。皆を眠らすんだ？」

話が読めないエドは勿論問い返す。

「わたくし達ではなく、グリーズコートの中をですよ。わざわざ闘う必要などありませんからね」

力の浪費だと云いたげだった。それもそうだろう。これから、中枢部までどれだけの町、村を跨いで行かなければならないであろうか？それを考えると、力の温存は必要であろう。

それに、聖戦である以上、関係ない殺し合いは無意味だ。

「なるほど。判ったぜ！その時はやって見せてやる！」

エドは、自分に任せるとハッキリ云い切った。

こういうエドを見て、オレ達はまた、やる気が沸く。一人でも多くの者が力を貸すことで、これからの旅が、充実できる。

だからオレは、こう云った。

「みんなの力が、今までの積み重ねが、オレ達の戦力になる。これからよろしく頼むぞ」

！

こうして、オレ達は、ユエの家を出た。

そう、このグリーズコートの暗闇に、ユエの光を灯しながら。

地図によると、初めの町は、此処だろうと予測を立てたのは、少し歩いた所にある檜の木が覆い茂った先の開けた場所であった。

建ち並ぶ家だと想われるそれは、木で出来ているようには感じられなかった。石。でも、オレの家の様に石を重ねて作っているようにも感じられない。何かを塗りこめて、それを平らにしているような気がする。その何かは判らないが……

そして、これから先が問題なのである。まずこの町から、次の町に移る為の、移動鍵を探さなければならない。

道に行くグリーズコートの者達は、時々オレ達の明かりの中を通り抜けて行くが、それでも、未だバテてはいない。そして、それが、初めてのグリーズコートの人間を目の当たりにする機会でもあった。基本的に、背が高いのが特徴である。そして、右も左も赤い髪。赤い瞳を曝している。

まるで、オレたちラスキンハートの人間とは別の生き物でも見ているような気がした。が、それを云ったら、ユエも同じだ。だからそれは言葉に出さないように、気をつけた。見慣れている。そう、見慣れているのだ、と。

「では、この辺りで良いでしょうか？」

かなりこの町を歩いた。そして、人が集まらなさそうな広場でユエは、問いかけた。

「そうだな。アイシャ。どう思う？」

それに対して、アイシャは軽く頷いた。

「エド、宜しく頼む」

その言葉で、エドは豎琴を用意すると、掻き鳴らした。それによつて、次第に眠りに就くグリーズコートの者達。そして、左の方から物凄い音が聴こえてきたのである。

「これが共鳴なの？気分悪い……」

ミネルバは、耳を押さえてその場に頭を抱え込んだ。聴覚にかなり敏感なミネルバだからこうなるのだろ。オレは、

「暫く此処で耳を塞いでエドと共にいる！オレ達は、ユエと共に探しに向う！」

そう云って、オレ達は急いだ。この共鳴は、かなり神経を逆撫でしてしまう。オレも、頭痛がしてきた。

「こっちだ！」

走って、オレ達は共に行動した。そして、共鳴する先を突き止める。

それは、路地道と云うのであろうか、店が建ち並ぶその狭間の地面に施されていた。

「此処にいてください。私は、エドさんと、ミネルバさんを連れてまいります」

そう云って、ユエは離れた。そのため暗闇の中にオレ達は取り残された。

移動鍵は、この暗闇の中、赤く光っている。それがとても不気味に感じられた。

暫くすると、ユエは、エドとミネルバを連れて此処まで戻ってきた。

「これに乗れば、次の村に着きます。皆さん、一斉に乗って下さい」
ユエはそう云った。

「では、三、二、一！」

オレがカウントダウンすると、一気に皆がその紋章の描かれた地面を踏んだ。すると、七色の光がオレ達を包み込み、そして、不思議な浮遊感の空間に身を投じる事になる。

「何？この感覚……」

ミネルバが、上も下も無い空間に目を白黒させていた。次の村までの道がこんな空間だとは……まるで、空中を飛んでいるかのようだ。そして程なくすると、次の村の暗闇が見えてきた。オレ達は、気付くと、村の入り口に立っていた。

それは、元から地面に足を着けていたが如くに。

次の村は、人の通りの少ない山奥だった。

さて、如何したものか？先ほどまでの、判りやすい目印も此処には無い。これは、探すのに苦勞しそうである。木々が邪魔をしてくれるのだ。これでは、先のようにエドとミネルバを残してはいけそうに無い。

「ミネルバ。暫く我慢していただけますか。

今度は、一緒に行動になりますから」

エドは、確かに歩きながらも豎琴は弾けるであろう。ただし、ミネルバには酷だ。だから、敢えてアイシヤはそう云ったのだらう。

「我慢できるかい？ミネルバ……」

リケルは心配そうに、アイシヤの言葉を考えて問いかけた。すると、

「我慢すれば良いんでしょ！足手纏いはごめんだからね！ああ、これほど聴覚に自信持てない事って無いわよ！ベンジャミン、指示を出して！」

やけ起こしてるな……オレは、そう感じ取ったが、

「悪いな。ミネルバ。じゃあ、エド宜しく」

その言葉で、豎琴を鳴らした。また奇妙な劈くつんぱ様な音が響き渡り、聴覚を刺激する。

オレ達は、直に、辺りを見渡し、共鳴部分を探す。そして、見つけたのは、大木の穴の中。そう、判り辛いそんな所に有った。

奇妙に揺れて、木の葉が辺りに散らばっているその光景で、見つけることがやっと出来たという何とも行き当たりばったりだ。

「こんな時は如何すりや良いんや？踏む事なんて出来へん……」

ルシードは、こりや困ったと、頭をぼりぼりと掻いていた。それに関して、

「一斉にこの穴の中に手を入れて、紋章に触ってみましょう。それでも駄目なら、この木を切り倒します」

ユエは、腰に下げている剣に手を寄せた。

「剣で切れるんか？」

「やる価値はあります」

ユエは、一か八か試してしまおうと想っているらしい。

「それやったら、儂の拳で、この木を切り倒せるわ。騎士さんの大切な剣の錆にすることあらへん」

これに関しては、ルシードに任せた方が良い。ユエの剣で、この木を切り倒す事などできないのだから。オレにだって無理だ。

そして、オレ達は、まず手で触れてみることにした。しかし、それは無駄な事であった。

そこで、ルシードの出番となる。

「ちよつとどいとき。倒れてきた木で怪我せんようにな！」

すると、腰を沈め、気を静めると、一気に拳を木にぶつけた。すると、大きなその木が地面目掛けてバササ……と崩れたのである。

それは見事な腕前である。丁度、紋章がある部分の木の穴を真つ二つにしたのだから。

「こんなものやろ？」

そう、充分だった。オレは感動して、

「ルシード、お前と喧嘩するのもうやめるからな！」

なんて、そんな和みを入れてしまった。

「そりゃ、光栄やわ。儂もヤンの剣を考えると、喧嘩したないもん」
未だお披露目していないオレの剣を勝手に想像してくれている。

それもまた和んだ。

「では、紋章に足を」

アイイシャは、その和みに少し水を差すようだと、冷静に次を要求する。

そうだ、それをしないと次に進めない。

「次は何処ですか？」

リケルは問いかけた。ユエは地図を眺め、矢印を目で追った。

「次はかなり大きな町です」

「ああ、もう、こんな事の繰り返し？しんどい」

ミネルバは、疲労がピークになっているのである。それもある。でも、

「まだまだ先は長い。我慢してくれミネルバ」

オレは、励ますしか出来ない為そう云った。

するとそれを嬉しく想ったのか、

「ベンジャミンがそう云うなら、頑張るー！」

現金なミネルバに、オレは苦笑いするしかなかった。

そして、再びあの空間を通り、次の町へ。今度は、かなり都会と想える町だった。

人々の足取りは早く、何処にこんな人間が住んでいるのかと想えるほどだ。

そして、その町並みには奇妙な動く箱。それに乗り込む人々が、絶え間ない。そして、また動く。

これは何であろうか？オレは疑問ばかりであったが、此処はそう云う、魔法が使われているのだろう。

さて、町の中央まで歩ききったオレ達は、次の行動に移る。

今度は何処に有ると云うのであろうか？移動鍵は……

歩きながら、エドがまた豎琴をかき鳴らす。すると、以外に近くに共鳴する振動を感じ取った。そして、その場所に急ぐ。

そこには、人々が集まっていた。その奥には移動鍵が赤く光っている。

しかしおかしい。この町の人々は、眠りに就くことなく、オレ達に一齐に視線を向けると襲い掛かってきたのである。

「作戦変更。直に戦闘開始！」

オレとユエは、剣を携えて、向ってくるグリーズコートの人々に切りかかる。何も武器を持たない人間を、敵であると判断するのは愚かしいが、向ってくる者に対抗するにはそれしか術が無かった。

そして、中距離はエドに、肉弾戦と判断できる者は、ルシードが

受け持つ。アイシヤは、弓を使い、そのまた奥から襲ってくる人々を捉えた。ミネルバは、鳥を呼び寄せ、扱い、空中から人々に襲い掛かる。

そして、ここで、重要な任務を受けてくれたのが、リケルであった。

南の町ルカンダで、ユエと摘んできた薬草であるシータを燻し、それをグリースコートの人々に振りかけた。すると、混乱した人々は、オレ達にはなく、味方同士争い始めたのであった。

「ふゝ助かった。ありがとう、リケル」

オレ達は、リケルにお礼を云った。

「良かったです。こう云うことでお役に立てて」

そう、何か怪我をしたりした時の補佐役であったが、その知識で、この場を凌いでくれたのだ。これほど嬉しい事は無い。

「今のうちだ、走れ！移動鍵に乗れ！三、二、一」

オレ達は、何とか無事次の場所に移動する。

こんな事が、何十回と続いたのである。それは、休むことなく続けられた。

時々地図とは違う村山地にも訪れたが、それは、仕方の無い事と考え、次々進んでいく。

そして、最後の町を終わらすと、終に、中枢部分の塔が在る場所へと辿り着いたのであった。

#16 ルーン

塔は、ルーン文字を意味するように、壁面にルーンを描いていた。それが、円を描いた螺旋状の階段を作るかのように、ほんのり碧くなっている結果が張られた空の天辺に届くかの勢いで聳えていた。

「これが、塔。これを如何すれば良い。上るれと云う事なのであるうか」

私は、この先の事までは判らない。それに、此処には、グリーズコート人間が一人も存在しないのである。拍子抜けと云うのもあるが、それでも闘わなくて済むのは良いことだろう。

「この階段は、天まで続いているのでしょうか。上らなければ判りませんが、上ってみますか？もしかすると、畏かもしれませんか……」

アイシヤもこれに関しては、全くお手上げと云いたげである。だから、この先に行くべきかどうか。それを皆に問いかけたのだろう。

「そやなあ、此処にずっとおっても意味無いし、少し休んでから、上らんか？この先に何があるうと、儂は問題ないわ」

ルシードは、自らの力を過信しているのか、上ろうと提案した。

「……確かに此処は、人っ子一人、いないね。休む事は僕も賛成！」
双子のエドも考えは同じのようだ。

「どっちでも良いわよ。上るの上らないのは！とにかく休ませて、あたしも、頭クラクラ」

これは、ミネルバの勝手な意見だったが、休みたいと云うのは一致しているようだ。

「ミネルバ、疲れたんだね。お疲れさん。ボクも、休みたいな。とにかく……その後考えても良いと想うけど？」

リケルは、口実をつけつつも、休む事に賛成した。そして、

「ユエ。この先の事は、お前にも判らないと云うんだよな。うん

……じゃあ、皆の意見で此処は休む事にしよう。オレも一休みしたい。その後考えよう」

多数決を採る事もなく、意見は一致した。そして私達は、塔から少し離れた大きな檜

の木の下まで移動した。それは休むには、この場所が良いだろうという意見を取り入れたためである。

「ユエ……お前、他に何か知っている事は無いか？グリーズコート
の事で……此処がどういう場所なのか？とか……」

一休みする前に、ヤンは私に問いかけた。それは、この先の事も考えての事だろう。でも私が知っていることと云えば、このグリーズコートの塔が、中枢部と云う事だけである。

否、何かあった気がする？何だ。グリーズコート。それに纏わる何か……それが有った気がする。それは、ラスキンハートとは違う何かだった筈。

「あゝこういう時、神様ルゲでも居て導いてくれたら良いのになゝそして、この先の事が判るのに……！」

困った時の神頼み。そう云いたいらしい。私だってそうしたい気分だ。

神……？そうだ、神だ。

「ヤン。想い出した。何故この事に気がつかなかったんだ、私は……この塔には、神が居るのだ」

私は、慌ててしまったので、ヤンには判らない云い回しをしてしまった。

「あん？神がいる？それって何云ってるのか判らないぞ、ユエ……」
確かに判らないだろう。ラスキンハートで育った者ならば。特にヤンは、神の存在を支持しない派だ。

「つまり、神の存在自体、このグリーズコートには有ると云う事だ。ラスキンハートは、偶像として扱っているが、グリーズコートは、神を絶対的に信じている。そこが先ず違う点。

そして、その神は、実在する。獣神スカアハは、この塔の上に……！」

此処まで云って、私は、絶望した。それは、闘う事すら出来ないモノだからだ。闘えないというのは、存在を否定する意味では無い。力が違うと云いたいのである。

「うむむ？お前は、この塔の上まで上ると、グリーズコートの連中が崇拜している神が居るとそう云うのか？まさか……もし居ても、オレ達の手には負えないじゃないか。相手は神だぞ？」

そうなのだ。なら、如何すれば良い？神の存在を消す。それが出来ないなら、消してしまえる物。それは、この塔自体では無いのか。でも、それは、壊して良い物であろうか？そう、私達のしなければならぬ事。それは一体……

「塔を壊す……」

その話に耳を傾けていた者がいた。それは、アイシャであった。隣近所で、男女を問わず横になっているから、私達の声で目を醒ましたのかも知れない。

「アイシャ、目が醒めたのか？」

ヤンは、済まないと言いた気にアイシャを見ていた。それよりもっと気にする事があるだろう。私は云いたかったが止めて置いた。「それは良い。気にしなくても……それより、

話を続けなければならない。ユエさんの云う事が本当であれば、此処を破壊すると云う事が先決ではないだろうか？わたくしはそう思うのですが」

それは考えた。私も。

でもそれが可能なのか？疑問である。只でさえ、この塔は魔法文字を刻んで護られている。それが出来るのであるかと云うことだ。「破壊するのは、ルシードにやらせれば良いじゃないか。無理だとは思えないが……」

ヤン。それは安易過ぎる。魔法に対して、素手で対抗できるとは限らない。特にこの塔は、かなり強烈な魔法を感じる。

「ユエさん。この塔を壊すことは出来ますか？」

アイシャも、そこを危惧しているようだった。だから私は云っ

た。

「これだけのルーン文字を多用していると云うことは、それだけ強い魔法がこの塔を護っていると考えられる。それに、素手だと云うにはかなり難易ではないだろうか」

そうだ。だから私はそう云った。

「フム。ならば、やはり魔法には魔法と云うことになりますね」

此处で、またあの豎琴を使おうというのであるうか？私は、それは余りにお粗末だと想った。力が違い過ぎるからである。

「ユエさん。魔法は使えますか？」

それは、私に魔法を使えと云うのか。それは、祖母より禁じられている。あの手紙から私はそう学んだ。

「使えるが、使う訳にはいかない。亡き祖母からの命だ」

そう、だから私はそう云った。

「フム……」

そこでアーイシャは考え込んだ。

「ユエ。何かお婆さんからの書き置きがあつたのか？それなら、使わない方が良い。他に何か手を考えよう！」

ヤンは、私とアーイシャの話を聴きそして、納得したようである。が、アーイシャは、その話に未だ納得し切れていないようだった。

「私は剣を振るのみ。それ以外出来ない。攻撃するための魔法は、私自身を破滅へと追い込みます。闇。負の力が注ぎ込まれる事になると……」

その言葉が、アーイシャに興味を持たせてしまった。

「でも、世界は変わるのでしょうか？何が起るか、それは判らないでも、禁じられているモノを紐解く事は或る意味、真理に近づく」

そう云いかけている所で、ヤンが、

「アーイシャ！ユエに危険が及ぶ事はさせたくない！例え、アーイシャの命でも、オレは賛成でкин！」

猛反発をした。それは、仲間として云っている言葉だ。でも、アーイシャの興味はそのままである。彼女の探究心は底が無いようだ。

「では、魔法を使うのではなく、ユエさん。貴方があの豎琴を弾くのです。それくらいは大丈夫なのではないでしょうか」

豎琴を弾く。それくらいなら大丈夫ではなかるうかと云いたげだった。でも、あの豎琴自体にルーン文字は刻まれている。私は迷った。

「ユエ……どうだ？それは大丈夫なものなのか？俺には判断しかねる」

ヤンは心配げだった。それは、魔法を知らない者の言葉だった。

「判りました。では、この休息の後、試してみましよう」

私は、軽くそう応えた。それが、私と云う存在を変える。そうなるとも知らずに……

オレは、休息しているにもかかわらず、眠りに就けなかった。それは、ユエの事が気になったからである。

本当に大丈夫なのか？

アイシヤは、今回間違った選択をユエに突きつけてしまったのではないだろうか。それが気になって仕方がない。でも、きっと、ユエはあの豎琴を弾くだろう。そう考えると、真つ暗闇のこのグリズコートが恐ろしい物に感じられた。

ルーン文字を刻んだ塔。それは、この大木の奥で赤く光り輝いている。それが、また業火の炎のように感じられた。

あの夜のように。

オレ達は、あの日両親から離れ、逃げおおせた。でも、その途中振り返った先には、燃え盛る炎のタナーシヤの村が見えた。

そして、オレ達はそれを恐れ憎み、復讐の誓いを立てた。そして、今この場所に居る。

だから、仲間と云う者への信頼は厚い。だけど、今回は……

そんな事が頭を駆けずり回る。そして、結局一睡も出来ずにオレは、仲間達の目覚めを待ったのである。

「エド、その豎琴を貸しなさい」

皆が起き準備が出来た。アーイシャは、エドから、豎琴を預かる。オレは、その行動を目で追うしか出来なかった。

豎琴の話。ユエの話。昨日の話。それらを纏めてアーイシャは語った。そして、その事を皆了解し、この試しの儀式は始まったのである。

「はい。ユエさん。では弾いてみて下さい」

そして終に、ユエの手にその豎琴は委ねられた。それをオレは、ただ傍観視するしかなかった。

ユエはそれを取り上げて、一呼吸置くと、弦を鳴らした。それは、綺麗な戦慄を描き響き渡った。

そして、塔のルーン文字と共鳴したのである。赤く光っているルーン文字は、次第に蒼色に下から順に変化して行った。それをオレ達は眺めた。

そして、それがオレ達の目で追えないほど上空までたどり着いた時、異変が起きたのである。

上空から、赤い稲妻がズドンと、ユエ目掛けて落ちたのであった。それは、音だけでなく、周りの木々をも揺るがした。そして、声が聴こえて来たのである。

『汝、太古の契約により、我が身と同化すべし。我が名は獣心。^{スカアハ}我が眠りを妨げた愚か者よ。その報い、今、我が身の代償として贖え！』

その光は、ユエを取り込むと、スーッと、赤い炎と化して上空へと連れ去ろうとした。

「ヤン……」

ユエが、オレを呼んだ。だからオレはそれを止めようと、手を差し伸べた。しかし、炎は本物。熱くてユエが助けを求めて差し出したその腕を取る事は出来なかった。そう、心配していた事が、現実となってしまった。

「ユエ———！」

オレは叫んだが、ドンドンと天空に昇って行くユエをオレは止めることは出来ない。そして、終にユエの姿は消え、落ちてきたのは豎琴のみ。また、辺りは、赤いルーン文字の光のみを残した。

オレは立ち上がることにすら出来ず、地面に膝を着き見上げたまま放心状態になる。皆はその様子を呆然と見ていた。

どれだけ時間が過ぎたであろう。オレの肩に手が置かれるまで、この状態は続いた。

「ヤン……これから如何しますか？」

如何する？その言葉は、アーイシャのものだった。

「！」

オレは、考える前に、アーイシャの頬を平手で叩いてしまっていた。

「ちよっ……待てや！落ち着けヤン！」

それを止めたのは、ルシードであった。ここで仲間割れをしてるより、先を考えると云いたいのだらう。だけど、今の自分は考える事などできない。ユエがいないこの状況で、何を考えると？オレの不始末だ。アーイシャの考えを押し通してしまったばかりに、ユエが……

「何を落ち着けと？仲間が、ユエがあんな事になって、落ち着けられるのか？」

オレは空笑いしてしまった。頭が空白だ。

「ベンジャミン！しっかりしてよ。未だ何とかなるかも知れない。ね。アーイシャ？」

ミネルバも流石にこの状況では、ユエの事が心配なのである。自分の意見より、如何するかを考えたいとそう云っている。

判っている。だけど、今のオレには何も考えられないんだ。身体に重く押し掛かる重圧。それは、自分が犯した不始末であり、罪である。

「ミネルバの云うとおりですよ。ヤン。未だ手は有ります」

叩かれた頬をそのままに、アーイシャは次を考えているらしい。

冷静な所が、余計苛立たせる。今の自分を抑えられずに怒りが沸々
滾る。^{たぎ}

「何が有るって云うんだ……アイシャ……相手は、神なのだぞ…

…」

オレは、自棄^{やけ}になつていた。手などないだろう。

「ヤン。気持ちは判るけど、アイシャに任せようぜ……」

エドは、豎琴を貸してしまった事に重荷を背負っている分、少し躊躇いがちに云った。

「そうですよ。考えましょう。リーダーでしょう？ヤンは！」

リケルも、気持ちを切り替えている。変えられないのは、オレだけなのかも知れない。

「聴きなさい。これは聖戦。神であろうとなかろうと、命を懸けてそれを全うするのが、わたくし達の目的になったはずです。ヤンが、この状態のままであるなら、わたくしが皆のリーダーとなります。それで良いのですか」

静かに、アイシャは仕切ろうとした。

「いや、オレがリーダーだ。これ以上犠牲を増やす手伝いなどしたくない！」

オレは、今はこんなことしか云えなかった。

「では、ユエを助けに行くのですね？」

助ける？ユエは生きていると？

「同化したということです。なら、未だユエの精神は、獣心の中にあるという事になります」

アイシャは淡々と云った。いつでも客観視しているアイシャは、この先の事をもう考えていた。オレは、それを聴き、未だ何とかなる可能性に、ゆっくり立ち上がった。

「アイシャ。この後は如何すれば良い……」

オレは声を抑えて問うた。此処から先は、死をも齎^{もたら}すことに成るかもしれない。

「この塔を上って、獣神を討ちに行きます。異存のある者は？」

このアイシャの問いかけに、反対の意見は出なかった。

「リーダーのヤン。後は貴方の想うように」

オレは、これ以上犠牲は出したくないと想っていても、やはり闘う事しか出来ない事が骨身に沁みた。それが、オレ達のやるべきことなのだ……改めて悟ったのである。

「これから、ユエの奪還と、聖戦の狼煙を上げる。着いて来たい者だけで良い。オレはこの塔を上る。その先に何があるうとも、オレは保障できない。生きて還る事が出来る者だけ、オレに続け。以上だ！」

オレはそう云うと、塔の階段へと向かい、そして一歩その階段に踏み入れる。それは、

これから先の苦難への一歩だった。

#17 獣神

『お主は闇か？それとも光か？』

私の脳髓にその声は響く。目を醒ましたのは、何も無い真っ白な世界だった。

私は確か、獣神の中に取り込まれたはず。それなのに、私の体は此処に在る。

『グリーズコートか？ラスキンハートか？どちらでも無いのか？』

さらに、脳内にその声は響き渡る。それは、私に対する問い掛けであつた。

「私は混血。どちらも私だ」

そう応えた。自分の存在。そんな物が何故此处で必要なのか。私にはそれが判らなかつた。

『我が名は獣神スカアハ。魔力を民に分け与え、そしてグリーズコートを守護する者。ラスキンハートは、忌むべき神が悟りを啓か^ひず見捨てた土地。それをお前は如何受け止める？無慈悲な神を如何想う？』

それに関して私は、何も応えられない。神が存在するなどとは想つていなかったのであるのだから。

信仰心。それは、自分が選ぶべきことではないのか。自らの思念が神を慕う。

でも、国を別ち（わか）、神はそれぞれを選びそして培った。それは太古の話。今、此处に獣神スカアハが存在するというのは、納得できない。

それでも、姿無き者は続けた。

『まあよからう。今から思考をお前と同化させる。お前は、未だ成熟し切れていない。なら、その成長を促進してやろう。グリーズコートは、お前を媒体にこれから存在を続ける。我を倒さない限り、お前は解放されない。そして、闘うのだ。これからやってくる、お前の仲間。そう。ラスキンハートの輩と。それが、お前に架せられた宿命。光を破り、闇を全うせよ！』

頭の中に響くその声は、語尾を強め、私の脳を侵す。^{おか}それは、ドンドンと私の思考を蝕んでいく。消える。私が……

過去の映像が走馬灯のように流れていく。火災を起こした夜。私を引き取った祖母の顔。そして、マクベスに騎士養成所に来ないかと問われた幼き日の想い出。それから、ヤンとの出逢い。罪の告白。その全てが私の脳裏から流れ出していく。

目が霞み、そして何も考えられなくなった時、私は、最後の力を絞り込み、腰の剣を握った。それでも私はラスキンハートの騎士だ。だけどその思念は虚しくも、獣神によって打ち碎かれる。神には勝てない。私は大粒の涙をぼろりと流す。そして、私は、獣神スカアハとなったのである。

「結局、皆来たのね？あたしはもとより、ベンジャミンに従うつもりだったけど？」

ミネルバは、オレの後に続いて階段を上っていた。そして、皆がオレに着いてくる。

オレは、それを心強く感じた。

でも、この後の保障などない。それでも、仲間はオレを選んでくれた。有り難い事だ。

獣神は、ユエを取り込むといった。それは、既に行われたのであ

ろうか。それを考えると、無闇やたらと闘う事もできない。ユエを開放してくれるのであったなら……と云う気持ちが今、オレの頭の半分を占めていた。

オレ達は、黙々と階段を上る。その先は未だ見えてこない。そして、雲のすぐ下まで来ているため、空気が希薄に感じられた。眼下。そこには不思議な光景が広がっていた。

普通だったら、町並みがその回りに広がっているのだろうが、この塔の周りは木々しかない。

そして、そのもつと遠くで、赤い光が点滅している。村と町が移動している為に、起こる現象なのだろう。それがリアルに目に付きオレは途方も無く感じられた。

魔法。それがグリーズコート内全域で確かに蠢いているのだ。

そして、黙々と歩き続ける。下から上ってくる皆との会話も無い。誰もが緊張とプレッシャーを感じているのだろう。

オレは、そのまま足を止めることなく上を目指す。そう。オレの中の突き動かす感情。ユエを救う事。そして闘志だけで満ちていたのであった。

「あれは何だろう？」

背後で、リケルがボソツと声を掛けた時点で、やっと天边が見えた。

「あそこが最終点なのでしょう」

凄く長い距離のある階段だった。果てがあるのか？と想えるくらいに。

雲の遙か上は光に満ちていて、結界など無く、ラスキンハートとの結界であったであろう、場所のその向こうに、オレ達のラスキンハートの土地が薄っすらと見える。

それは、アイーラの土地を見渡せるほど高かった。

「また、ルーンの描かれた移動鍵なの？此処から先は何処に繋がる

って云うのかしら」

ミネルバは、疑問を投げかけた。赤く光るルーン。それもそうだが、最終地点にまで、移動鍵があるとは……もしかすると、この先にもまだ何か？と想わせる。

そして、程なくしてその場所まで辿り着く。

「これを足で、踏めつてのか？」

ルシードは、最後の階段の踊り場に並んでいるオレ達にそう云った。

そして、手を伸ばす事ができる距離だったので、移動鍵を触ろうとした。しかし、アーイシャがその腕を取り上げた。

「気安く触るものではありません。もしかすると、一人で移動してしまうケースも考えられます」

アーイシャは冷静に止めた。これ以上の失態は、沽券に係わるとでも云いたそうだった。

それは、オレも同様。アーイシャを叩いてしまったのは、オレ自身のやるせない気持ちからだ。それを謝る事ができないのは、多分、アーイシャを傷つける事になるからだ。

アーイシャは自らを律する事で汚名挽回するつもりだろう。

「じゃあ、如何すれば良い。僕達は？」

エドは、その先を促す。

「エド、その豎琴を貸しなさい。私が弾きます」

そう云うと、アーイシャはエドの了解も得ず勝手に背中に掛けている豎琴の袋ごと引ったぐった。

「待て、アーイシャ！」

オレは、それを止めようとしたが、アーイシャは既にその豎琴の弦を弾いてしまっていた。

これを引き受けたのは、アーイシャ自らの責任を此処で果たそうと云う事だと理解した。自らの犠牲。そう、アーイシャ自身それが当然だと想っているのだとオレは感じた。

そして、うわっと、オレは身構える。これでアーイシャまで失う

事になるのは辛い……

しかし、ただ、紋章と共鳴を起こすだけであつた。オレはホツとした。この塔とは共鳴していない事が判つたからだ。

「何も起こりませんね。では、次は皆で、この紋章を触ってみましよう」

ホツとしたのは束の間、今度は皆でと云う事になる。それは、死なばもろとも。なのだ。

死にたくは無い。死なせたくない。でも、この仲間となら……そう、怖くなど無い。

誓いの為の行動の果てに、得られる物があるのであれば！

オレは、手を繋いだまま皆を見渡した。皆覚悟が出来ているかのようである。オレは、小さく承諾を受けたと頷いた。

「三、二、一！」

同時にその紋章に触る。すると、移動鍵はブーンと云う音を立てて、オレ達を異空間へと運んだ。今までと同じく浮遊感を味わうが、飛び出た先は、真っ白く上も下も無い世界であつた。

「此処が、獣神がいるところなのか？」

神はこんな何も無い場所で、ただ魔法を生み出し、グリーズコートを成り立たせていたというのであるうか。オレは、途方も無い白い景色に意識をハッキリさせようと必死になった。

周りの皆も、フワフワ浮いているこの場所で、同じ事を考えているらしい。呆気にと取られているようだ。

でも、如何する？こんな不安定な場所で。オレ達は何をすべきなのであるうか？答えが見つからない。

「導く者があれば……」

アーイシャが、言葉を發した。それがオレ達の探しているもの。

その答えは、獣神であつた。

「何処に居やがる！獣神！」

オレは叫んだ。すると、木霊する自らの声に、周りは一氣に変化

したのである。

ズドーンと云う反響音が、突然起こったと想うと、オレ達は降下して行った。

オレ達は、それを止めることなど出来ず、一気に落下してしまった。それは重力というものだろう。

この下に何かがある。それが、何なのか？今のオレ達にはまったく想像もつかなかった。

ドスンと落ちた先は、闇の世界に、赤く煮え滾った火山がマグマを発している場所だった。

「何なの、此処は！」

ミネルバが第一声を発した。小柄なその体がオレの体の上にあった。どうやら、オレを下敷きに上手く落ちた分だけ反応が早かったのであるう。

「暑いですね……此処は」

リケルは、ミネルバの手を取ると、オレの上から立ち上がるようにと促してくれた。有り難かった。ちよつとだけ重圧から開放された為である。

「地面があるからと云って、安心できません。ほら、あそこに誰か居ます」

活火山の噴出をバックに、誰かがこちらに向ってくる。オレ達は、立ち上がり、そして、それぞれが構えた。

そう、この赤い光の中、こちらに向かつて来る者と相対する為に。しかしそのシルエットが、次の火山の爆発の細かく舞い散る光で、長い赤い髪とオッドアイの特徴を知り、それがユエだと知らせた。オレは、ユエが無事だったと想い、一目散で駆け出したのである。

しかし、その者は、腰の剣を引き抜くと、オレに向って切りつけたのであった。

「な……ユエ？オレだ！判らないのか！」

オレは、間一髪その剣から退く。髪の毛の一房ほど切られたかも

知れない、本当にギリギリのラインだった。

『我は、獣神スカアハ。この地に降り立つ者全てを排除する者なり』
その声は、ユエを連れ去ったあの時発した声と寸分変わらなかった。オレは、ユエを乗っ取ったと想い、退くしかなかった。

「同化……しちゃってるんだ。ヤン！もつと退くんだ。そいつと闘っちゃいけない！」

エドが、この状況を端から見てもつと退く様にとオレに云った。言われずとも、退くさ。ユエの姿をした神と闘えるはず無いだろう！これは訓練では無いのだから。オレは、向ってくる獣神スカアハの心に支配されているユエの剣を只避けるしか出来なかった。

『何故闘わぬ？お主達。ラスキンハートの者達は、腰抜けなのか』
せせら笑うその獣神スカアハは、オレ達を追い詰める。それは、火山口に向ってジワジワと。

「ちよつと、ユエ！莫迦やってるんじゃないわよ！あんた自分のやってる事に気がついてないの！この甘ちゃん！」

ミネルバが葉っぱを掛けたが、ユエの心はそこには無い。まあ、有ったとしても、ユエの事だ、困った顔くらいしか出来なかったであろう。

「もう、後が無い。ヤン。剣をお抜きなさい。
闘うのです！」

もう、一歩後ろに退いたら、火山口に落ちるといところまで追い詰められた。だから、アイシヤはそう云った。だけどオレは、それでも、剣は抜きたくなかった。

「こん畜生！」
オレは、剣をすり抜け、獣神の足元を潜り、後ろへと回りこんだ。これで、逃げ道は広がった。

『んぐグググ……』

想いきや、アイシヤが、矢を放っていたのである。獣神スカアハの、肩に矢が刺さっていた。緑色の光る体液がそこから流れ落ちてくる。

「アーイシャ！何故矢を放った！」

オレを助けるためとはいえ、ユエに矢を放ったアーイシャを睨み付けた。

「貴方は、闘うしかないのです。ヤン！」

そんな事出来るわけ無いだろう！相手は、獣神スカアハであろうと、ユエが取り込まれているんだ。それを討つ事など出来るはずが無い！

『我が身に傷を負わせたのは、誰だ！』

ユエのオッドアイだった目が、両方とも炎のように赤く染まっていた。これがあのユエ

？もう別人である。ユエなのに、ユエで無い。オレは困惑した。ユエはどこに！

そう想っている間に、獣神スカアハはヒュンとオレを飛び越え、アーイシャへと詰め掛けた。オレは、シマツタ、とアーイシャの元へと急ぐ。

しかし、その剣は、オレが助けに入る前にアーイシャの身体を引き裂いた。真っ赤な血が、辺り一面へと飛沫いた。

「アーイシャ！」

オレの目の前で、ゆつくりと倒れるアーイシャ。それは、仲間を護れなかった、自分の最大のミスだ。アーイシャは闘えと云った。それをオレが拒んだばかりに……

オレは、倒れていくそのアーイシャの体を何とか滑り込んで支えた。それから立ち上がりリケルの居る方角へとアーイシャを抱えて走った。

そしてゆつくりとその地面に衝撃を与えないように横たえようと、オレは再び獣神スカアハを見た。

「お前は、獣神スカアハだ。ユエなんかじゃ無い！ユエはオレの仲間！こんな事はしない！」

オレの目に映るその者は、ユエの皮を被った獣神スカアハ。オレ

達の宿敵、グリーズコートの連中が崇拝する神なんだ。

オレは目を閉じて、心を落ち着かせる。

「リケル！アイシャの傷の手当、何とかなりそうか！」

オレの背後で、リケルはアイシャの容態を診ているのであろう、ゴソゴソと物音がしている。オレは、これ以上此処を犯させるつもりは無い。

「これだけの血を流してる。だけど何とかします！任せて！」

リケルは少し涙声では有ったが、とにかく、何とかしてみせると云った。オレはそれを信じるしか出来ない。

「後は任せる！エド、ルシード、ミネルバ！オレはもうこいつを、ユエとは想わない。だから、お前達も力を貸してくれ。闘え！」

ミネルバは、この地に獣が居るかどうか、呼び笛を吹き始めた。そして、エドは槍を構え、オレの後ろへと移動する。ルシードは、オレと、獣神スカアハとの距離を測り、拳を構えていた。

「さあ、獣神スカアハさんよ。来るなら来てみな。オレ達は、絶対負けない！」

すると、一人だった獣神スカアハは、四人に分かれた。魔法を使ったらしい。

四人に分かれた獣神は、己が相手と、オレ達を見定めていた。

「厄介なやつちゃ。ヤン。此処は四人に分かれて闘うで。後は、野となれ山となれや！さて、久々に暴れるか！」

ルシードは、直、目の前に居る獣神と向き合った。エドは、オレとの間にいるもう一人を。そして、ミネルバは、この地にいたのであろう、鼠を先ず獣神スカアハに襲い掛かせていた。

そして、オレは、残った獣神スカアハと向き合った。

「さあ、始めるぞ！これがオレ達の聖戦だ！」

こんな勝てるかも判らない魔法を使う神と、己の力が尽き果てるまで、獣神と闘う事となったのである。

#18 聖戦

痛い……

その感覚が、私の身に感じられた。さっきまで全く意識が無かったのに、この痛みで意識が戻った。取り込まれたはず。なのに、何故こんな事が？

私は、目を見開く。すると、暗闇にボツツと浮かんでくる映像。その先には、アーイシャが血を吹き倒れているのが目に入った。

手を見る。それは、剣を持って居る私。そして、その剣は赤く血塗られていた。

この私が、アーイシャを切った？

私は、発狂しそうだった。何なのだこれは。

だけど、体の自由が利かない。意識はあるが、体に乗っ取られている。その状況に変わりは無かった。

如何すれば良いのだ？私はこの状況下、ただ、傍監視しているしか出来ない。せめて、意識どおりに身体を動かせられれば……

そんな時に、体が四つに分断された。でも、私の意識は一つ。そして、その相手は、ヤンだった。

『ヤン、私を切れ！そうすれば、この体から開放される。切ってくれ！』

そう叫びたい。だけど、言葉は口から出ない。獣神の念が私を押さえ付ける。この者を切れと……

エドは間合いを取り、槍を構えると、細かくそれを突いていた。その俊敏さは獣神を追い詰める。火山口へとズンズンと。

そして、終に剣を槍の先で封じ込める事に成功した。獣神は、何も出来ずに、そのまま火山口から下へと落ちて行った。

『熱い！』

私の体は燃える様な熱を感じた。それは、エドが、私の分身を火山口へと突き落とした知らせだった。

身を焼く痛みだったが、それでも、一人の私は死んだのだ。後は三人。目の前に居るヤンを相手に私は成す術なく考えていた。

獣神スカアハは意識を四つに分断している。もしかすると、あとの二人を消せたなら何か状況が変わるのかもしれないと。仄かなる願いを感じずにいらなかった。

ルシードは、間合いを縫って剣を避け、拳を獣神に向けて突く。それは、力の入るタイミングと、そしてリズムを上手く分けていた。

そして、上手く剣をすり抜け、それを弾くとその剣を取り上げて、獣神の胸元に突き刺した。そして、とどめとして、火山口へと放り込んだのである。

『うつ……』

また一つの私が殺された。今度はルシードだ。胸に大きな痛みを感じ。そして、焼け爛れる感覚。それは今の私の罪を洗い流してくれた。痛みなどより、今のこの状況下が私にとっての痛みである。早く私を、この状況を終わらせて欲しい……

ヤンとの対決は、未だ終わらない。私はヤンとの剣での試合で勝った試しが無いと云うのに、この獣神スカアハの思念はヤンを上回る。

これが成熟した私の力だと云うのか？ 私は、空恐ろしい気分になる。もし、何も知らずにラスキンハートで生活していたら……私はどうなっていただろう？ 力の制御が出来ていただろうか……それを考えると、途方も無く怖かった。

ミネルバは、笛を吹き大量の鼠を操り、獣神スカアハの体を食べ尽くすよう命令を出していた。

それは、剣を振る獣神スカアハの動きを封じ込め、ガリガリとその体を貪った。獣神スカアハは、それから逃げようと試みたが、獣神スカアハの体を這いずる鼠は容赦ない。

今こそ美味しい食事をしなければと想っているかのような勢いでガリガリと食い尽くす。それは、骨になるまで続き、その骨を、ミネルバは火山口へと放り投げてしまったのである。

「うあっ〜！」

体中が痛い。駆けずる小動物の感触と、かじり取られる肉片。それを体にした。痛い。痛い。痛い。

だけど、これは、全て自分の強いられた宿命。祖母の書置きを無視した自分への罰。そして、三人目の私は死んだ。後は、この私だけ。

ヤン。お願いだ。もう終わりにしてくれ……

そう想った時、口から言葉が出た。それは、獣神スカアハの力が弱まった瞬間だったのかも知れない。

「終わりにしてくれ……」

オレは、剣を切りつけながら、その言葉を聴いた。

確かにそれは、獣神の口から漏れたモノであった。瞳がユエのものに変わっていた。

「ユエなのか？」

オレは剣を止めた。ユエ？気がついたのか？少しでも良い。話が出来る状態なら、話してくれとそう願う。

「切れ……私を。今なら、制御が可能だ！」

獣神スカアハは、力をもう一度使おうとしている。そんな事はさせられない。いや、させない。

私は、云った。切れと。今なら間に合う！

「待て、切れってお前……」

オレは、意識の有るユエに剣を向ける事なんて出来ないんだ。話を……

「早く！今なら間に合う、切るんだ！そうしたら私は解放される！良いから切れ！あ……不味い……もう力が……」

獣神スカアハは、再び私を閉じ込めようとした。その力はやはり神のものだ。抗えない。だけど、今なら……気付いてくれ私が云いたい事に！

「ヤン！」

「ユエ——！！」

オレは、ユエの云いたい事が何なのか、理解する間無く、勝手に体が動いた。

そして、獣神スカアハの頭から足に向って剣を振り下ろした。

獣神スカアハは、真っ二つに切り裂かれた。その瞬間、確かにユエの顔は笑っていた。それは、ありがとうと云いたそうな満面の微笑だった。

オレが願っていた一番のユエの微笑みを、こんな形で見るなんて想っても無かった。そう、こんな最悪な形で。それも、オレが殺す瞬間だなんて……

オレは、振り下ろした剣を、そのまま握っていらなかった。そして地面に剣がカランカランと虚しく転がった。

その剣は、真っ赤な血で汚れていた。

アイシャが弓を放った時流したあの緑色では無い。赤い血。それは確かに人間の物であった。

「うわ~~~~~！」

オレがユエを殺した。無抵抗なユエを！オレは地面を血が滲むまで拳で叩き付けた。

「はあはっはアハ」

罪とはこんなものなのか？ユエは、こんな物を抱えて、今まで生きてきたのか？

地面に突っ伏して、オレは笑いとも泣いているとも云えない感情で、錯乱していた。

こんな事が、聖戦であるものか！誰か……オレを助けてくれ……

心の中が腐った血で溢れている。錆付いた血の味。それが、心に焼きつく。立てない。

これから如何すれば良い。オレは、もう、生きていても意味が無い。仲間をこの手に掛けてしまった……

オレは死すべきだ。死んで、ユエに謝らないと！

護るべき者があればこそその騎士。それが、もう、騎士なんて呼べない者になってしまった。オレは、只の人殺しだ！

転がっている剣を手にし、オレはそれを、胸に当てた。

「まて！ヤン！」

周りで、エドが叫んでいる。止めてくれるな。オレは……もう……すると、視界が、変わった。七色に光る光が、辺りを取り巻いた。そして、上も下も無い空間へと飛ばされたのである。

オレは、何ごとが起きたのだと、ゆっくりと首を擡げた。すると、視線の先に、ボーっと裸体の人影が見えた。

「……誰？」

オレはまだ死んでは居ないはず。黄泉マの（グ）メルド国からのお迎えなど来るはずが無い。ならこの先に居るのは誰だ？

後ろを振り返るが、ミネルバ、エド、ルシード、リケル、アーイシヤは居る。

じゃあ、一体誰なんだ？

俺は目を凝らして見た。長い髪をした、女性。シルエツトだからハッキリしないが見知った者では無さそうだ。

獣神の本当の姿なのか？闘いはまだ終わってないのか？オレは、沸き立つ怒りを感じていた。ユエを犠牲にしてまでまだこの戦いは続くのか。

しかし、

「ヤン？」

その者はオレの渾名を呼んだ。オレを見知っている者。なのかな…でもこの声には聴き覚えなど無い。一体誰だと云うんだ。

光の中そのシルエットはこちらに近づいてくる。フウつとその裸体は騎士の制服を纏った。そして、目の前にたどり着いた時、オレは、涙が零れ落ちた。

「ユ……エ。なのかな？」

そう、女性の姿、声をしていたが、それは、確かにユエであった。このオレが見間違えるはずが無い。赤い髪に、オッドアイ。そして、あの時見せた微笑。それがそのままそこに有った。

「ユエ！」

オレは、オレより小柄になったユエを抱き寄せていた。そして、想いっきり泣いた。生きていた。ユエが！

それがどれほど嬉しかったか。云い表す事が困難なほど。だけど、本当に、安堵した。

そんな抱き合っているオレ達に、茶々を入れるのがミネルバである。

「ちょっと！あたしのベンジャミンに触れないでよ！あんたやつぱり、女だったのね！騙すなんて卑怯よ！」

ユエからオレを引き離れた。ミネルバのやりそうなことだ。こんな対面に水を差すなどとは。

「それより、どうしてあんた生きてるのよ？死んだんじゃないの？」

本当は、ホッとしてるくせに、まあ、云う事は云う子だ。

『それに関しては、私から説明しましょう！』

突然、声がこの空間に広がった。そして、オレ達の足元に、これまでのアイーラの歴史の映像が流れたのである。

それは、オレ達が生まれるよりもっと以前の映像だった。

そしてオレ達は、その映像に見入った。

『元々、グリーズコートは、変化を求める種族意識を高める為に集

めました。それに対し、ラスキンハートは、不変を求める種族。けれど、それを統合しようと言う計画が進められました。それが、ベンジャミン・フリント。あなた方がよく知る、このユエの誕生でした」

オレ達は、何処からとも無く聴こえて来る透き通った女性らしいこの声に耳を傾けた。

計画。と云う事は、仕組まれた事だったと云う事なのか？

「ちよつと待て！ユエはそんな知らんようなそぶりやったで！それよりあんた誰や！」

ルシードは息巻いた。そりやそうだろう。こんなことで、苦労したなんて考えたくも無い。

『我は、^{スカアハ}獣神。聖戦。あなた達はそれを望んだでしょう。だから、我もそれに賛同した。但し、それだけの力があるかどうか、試したのみ。ラスキンハートの神、^{リグ}気神は、元々、私の恋人。しかし神として、考え方が一緒とは限らない。気神ルীগは、後は我に任せたと勝手にこの持ち場を離れた。本当に勝手な事でした』

オレ達の神が、そんな事を云ったのかと、首を捻りなくなつたが、偶像とされている神であることは確かだ。その点に関しては、何も云えない。

『そして、グリーズコートは結界を張り、先ず、この地を封鎖した。それは、我等の進化していく様を見せるつもりが無かったからです。ラスキンハートは、此処よりも遙かに文明が遅れている。それは、変化を求める心が少なかったかなのです。それとは相反するグリーズコートは、進化を遂げた。魔法。それは、この地を活性化させた』
確かに、魔法は凄いと想う。

このグリーズコートに来てからの世界観は、ラスキンハートとはまるで異なり、変化に富んでいた。それは認めよう。

だけど、それが世界を支えると云う考え方は間違っているとオレは想う。

『魔法が、嫌いのですか？それでも良いでしょう。ですが、この

地アイーラは、元々魔法を使う土地だった。それは心して置いて下さい」

オレの考えを読んだのだろう。神には筒抜けだ。オレは苦笑いをした。

「話は変わりますが、この後、アイーラを、如何するおつもりなのですか？」

アイーシャは問いかけた。この光で、アイーシャの傷口が見る見る癒えて行ったかのようにだった。

『この地、グリーズコートをラスキンハートにも譲る事にします。結界を解いて。その事により、何が起こるか？この我にも判らない。我も、この地を離れ、気神と同じ、他の地へと移ろうと想う。此処に長く居すぎた為に、我も老いた。少し休みたい』

それは、もう魔法が使えないと云う事なのか？だから、さっき、心して置けと云ったのであろうか。なら、このアイーラは、どうなるのだろうか？

『これから先の事は、お前達の手に掛かっている。そう、聖戦は果たされた。そして、グリーズコートとラスキンハートの間の子供も居る』

まるで時が熟したかの様なことを云う。

「で、なんで、ユエは女なのさ！可笑しいじゃん！」

ここで、また怒っているのはミネルバだった。そんな事で怒らなくとも良いと想うが……

『グリーズコートの子供は、変化に富んでいてな。生まれてから十五歳になると、性別が逆転する。そう云うことなのだ。だが、混血であつたユエは、まだ成熟仕切れて居なかった。それを促進したのが、我と接触した事。それだけだ。さて、我は疲れた。休むとしよう……』

そう言つた獣神は、もう何を問い掛けても返事は無かつた。

後の事は、全てオレ達に託したと云う事なのだろう。

そしてオレ達は、再び塔のあの踊り場に戻された。有つたはずの

あのルーンはもう無い。この先にあるのは、只の階段であった。

#19 決着そしてエピローグ

「さて、還るか……闘ったのに、傷一つ残って無いのな？」

オレは、この状態を善しと取って良いのか判らなくて思わずばやいた。

「良いのでしょうか。もう結界も無く、獣神も居ない。魔法は使えないのだから……ラスキンハートに押し寄せるグリーズコートの連中は居なくなるでしょう」

アイシヤは、ホツとした様子だった。

もしかして、彼女にとって一番許せなかったのはそこだったのかも知れない。

魔法。

それが、オレ達の村を焼き尽くしたのだから。

だから、恐れていたのである。アイシヤが魔法を一番。

「さて、還ったら、如何するかな？吟遊詩人としてデビューして、この聖戦の唄でも謳ってアイーラを回るか？んでもって、可愛い嫁さん貰って、ウハウハ」

エドは、もう既にこの後の事に頭が回っているらしい。全くタフな奴。

そして、その話をしながら、アイーラを見て回ろうとか想っているのだろう。にしても、可愛い嫁さんね……そうなることを祈ろう。「僕は、もっと力つickenとな！あのグリーズコートの町みたいな家建てんと。凄くがっしりしてて、住心地良さそうやったやろ？ああいう家作れる職人を最終的に目指さな！」

此処にも未来を見詰めている奴が居る。でもこちらの方が堅実だ。グリーズコートを回って、教えを請うとか？それもまた一考ではなからうか。オレはクスリと笑った。この双子、顔は似てても考える事は本当に違うもんだ。

「リケルは？」

オレは、ちょっと気になって問いかけてみる。

「ボクは、このアイーラを回って、薬草学を磨こうかなと。で、医者になるんだ。でも、それには歩き回る足が必要で……」

と、後ろをチラリと見る。

「ミネルバの事好きなんだろう？」

オレは、こっそり耳打ちした。

リケルは、ボツと顔に火が付いたかの様な勢いで真っ赤になっていた。素直な奴。

「そんなもの、自分で何とかしなさいよ！それより聴いて？あたしはね！ベンジャミンと結婚するのよ！」

ミネルバ……勝手なことをベラベラと。

リケルの顔は青ざめたため、オレはもう、やってられんと、ユエを従えて階段を駆け下りた。

「ちょっと！何抜け駆けしてるのよ！ユエ！あたしのモノなのよ！ベンジャミンは〜！」

おいおい。ベンジャミンって、ユエもベンジャミンなんだけど？オレは、ユエの手を取り、

「ユエもベンジャミンだって覚えてるのか！ミネルバ！さて、関係ない者は急ぐぞ！」

何て云ってみる。

「ちょっと待ちなさいよ！ひど〜い」

後方で、ミネルバが怒鳴っている。そしてそれをリケルが落ち着かそうとしていた。

だけどオレは、ユエと二人で話をしたかった。そう、色々と言きたい事があったから。

ヤンは、怒るだろうか？もし、私を切らなかつたら、この世界が闇に包まれてしまう事態になってしまうかも知れなかったと云う事を云わずにいたら。

こんな成りで、今ヤンと向き合うのが怖い私は、手を解くことも

出来ない。今のヤンにとって、私の位置づけはどうなってしまったのであるとか……

まさか、自分が女になってしまおうとは思っても居なかった。そう。男だと自分も想っていた。だから、余計に怖い。

母も、昔は男の子だったのか？祖母も。

私の名前を女名にしたのも、もしかすると、そうなることを知っていたからかもしれない。だけど、ヤンはれっきとしたラスキンハートの男性だ。

私は、如何話せば良いのか？悩んでしまう。

きつと、ヤンは知リたがるだろう。あの時切れと云ったことに関する詳細を。

私は助かりたかったからああ云った訳では無い。そうしないと、この世界が終わるからだった。それを判って貰えるであろうか？それがとてつもなく怖かったのである。

「此処までくれば、もう大丈夫だろう？さて、訊きたいんだけど、お前は、オレが切ると想っていたか？」

あれ？なんか変だぞ。話の趣旨が違ってる気がするの私の考えすぎなのだろうか……

「いや、切れないとオレ想ったんだ。だけど、あの時切らないといけないような気がした。勝手に体が動いてしまったんだ。本能みたいなものかな？あんな、オレは切ろうなんて想ってなかったんだけど、お前がそう云うし……」

って、オレ何を言い訳してるんだろう？

ユエ、スツゴク不思議そうな顔してるし、やっぱ、不味いかな、この話題……

「あの時、切らなかつたら世界が闇と化した。

だから、ヤンが切ったのは、私ではなく、闇の世界だ。気にするな」

って、私はこんな受け答えで良いのか？凄く悩む所だ。それは、私の都合も考えての話じゃないではないか。

「あのさ……」

「あのな……」

って二人同時に言葉を発している。それで、何だかもうどうでも良い気分になった。

「もう、この話は良いか？助かったんだし」

「……そうだな？」

そう、終わりよければ全て善し。なのかも知れない。そして、この世の中は全ての人にとって、良い世界になれば良いのだ。

始まりは、まさにこれからでもある。

罪を憎んでも人は憎めない。

そして、行動の先に、いつも新たな世界を築ければ良い。

それは、簡単なように想えるけど、実はかなり難しい事。

ただ、云える事は、目標をもって取り組む事だ。

「そこのベンジャミン！待ちなさい……」

ミネルバが笛を吹いて呼び寄せたのか、翼竜に乗ってこちらに向ってきた。その竜にリケルも乗っている。で、その後ろから、エドとアイシヤ、ルシードが翼竜に乗ってオレ達に向って叫んだ。

「このまま歩いて還るんか？このアイーラに今は結界なんぞないんやで〜！」

「ほら、ヤンとユエの翼竜も居るから、乗りなさいよ！全く、あたしから逃げ^お遂^おせるなんて想ってるのかしら？失礼しちゃう！」

あれ？なんか変だぞ。ミネルバ、今何て云った？

「ヤン！待ってなさいよ！絶対、ユエより美人になって見せるから！後で後悔しても知らないから！」

あ、そうか……渾名で呼んでいるから奇妙だったんだ。

「ですよ。ヤン！」

と云って、リケルが、有り得ない事だが、ウィンクして見せた。何があった？

オレは目を白黒させる。

「何だか、不思議な事になっているようだな」

私も、今のこの状況をヤンと同じく不思議に想って見ていたが、
「ほら、乗ろうぜ、ユエ！還ったら、先ず祝杯と行こうじゃないか」
何はともあれ、この闘いは終わったんだ。それが今この様な明る
さをこのアイーラに齎しているのだ。オレは、翼竜の背に乗り、ユ
エの腕を掴んで、導く。

「この先どうなるか判らんが、まあ、これから宜しくな？」

ヤンは笑顔で云った。それに関しては、私も同意見。

「こちらこそ宜しくな。ヤン」

そう、これから先のことなど判らない。だけど、多分オレ達はい
つまでも仲間だ。

この命が尽きるその時まで。

この後、アイーラ全土は繁栄を繰り返していく事となる。太古の
ような生活。それは廃れていった。

グリーズコート。ラスキンハートと云う国の堺も消え、人々は魔
法という存在を忘れ去る。 だけど、融合して文明は、どんどんと
時代を超えるたびに栄えた。

それは、もつと先の出来事だが、オレ達のなした事が、後の時代
へと引き継がれていった。

吟遊詩人のエド。

建築家のルシード。

医者のリケルとその嫁ミネルバ。

ルシードの建てた学校で、このアイーラの歴史を教えるアイーシ
ヤ。

そして、色々な問題も有ったが、ごく幸せな家庭を持ったベンジ
ヤミン・フリント夫妻。

この歴史はこのアイーラと共にいつまでも皆の希望の始まりとし

て残ったのである。

歴史は、未来は、ほんの僅かな幸せを求める為に存在するのだから……

#19 決着そしてエピソード（後書き）

好き勝手書いた小説でした。

ユエが女性になったりして、最期ちょっと不満な方いらしたら申し訳ありませんm（・・）m

でも、まあそうゆうことで・・・・・^^；

個人的に、友情って愛にも似てると想います。

それが言いたかったのかも？？ちよつと自分でも難しいなと想いました。ムムム・・・

少しでも何か心に残っていただければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0258g/>

陽月の軌跡 ～ 始まりの場所～

2010年10月8日14時50分発行